
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 護る為の力 ~

くりふぁ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 護る為の力

【Nコード】

N9093L

【作者名】

くりふあ

【あらすじ】

この小説は「魔法少女リリカルなのは」をアニメでしか知らない作者がお送りしています。なおこの小説はタイトルは「魔法少女リリカルなのは」ですが、オリジナル要素が含まれております。さらに、「あれ？これどこかで見たような？」な展開があるかも知れませんがご了承ください

この小説はシリアス系を目指しています。その為ギャグが異常なほどないです。

挙句初投稿作品です。文才が乏しいですが、頑張っていきます！

ご質問等がありましたら感想の方をお願いしますm(_____)m

prologue strike (前書き)

さあ、ムラ モの覚醒だぁ！（嘘w）

調子乗ってすいません

魔法少女リリカルなのはStrikers〜護る為の力〜、始まり
ます・・・

一人称に変更しました（12/23）

prologue strike

「やっと手に入れた！オリジナルのG（ryじゃなくて、リリカルなのは無印からSSまでのDVD！」

歓喜している俺は暁 時谷

「さあて帰ってからなのはたちの勇姿を見るとするか！ん？」

俺が道路の方を見ると女の子が飛び出していた。その向こうには大型のトラックが迫っている

「危ない！」

俺は女の子を突き飛ばすが、自分は間に合わずにトラックに撥ねられる。大型のトラックに当たって生きている筈がない

「（俺、ここで死ぬのか？そんなのダメだ！紗耶はどうするんだ！俺が居なくなったら紗耶は一人ぼっちじゃないか！俺はここで死ぬ、死にたくない！）」

なら、叶えましょう。その願い

どこからか声が聞えてくる。今まで瞑っていた目を開くと、そこには銀色の髪、翡翠色の瞳と背中に純白の翼を生やした、まさに女神と言える姿をした女性がいた。

「あなたは誰ですか？もしかして女神っていう奴ですか？」

「ええ、まあそうなりますね。私の事より、今はまず謝らせてください」

そう言つて女神と名乗る女性は頭を下げる。そんな女神を見て慌てる

「あ、頭をあげてください！それになんであなたが謝るんですか？！」

「いえ、謝らしてください。あなたが亡くなったのは私のせいなのです」

「はあ！？いやいや！意味がわかりませんよ！」

いきなり女神から告げられる真実に困惑する俺、そんな困惑する俺に女神はさらに言葉を紡ぐ

「あなたが亡くなったのはこちらの手違いなのです」

「手違い？もしかして、間違えて死んじゃった的なものですか？」

女神が苦笑いしながら答える

「ええ、そうなりますね。」

「そっか、あの女の子は無事だったのか？」

「え？」

「心残りはあるがあの子が無事ならいいかな」

「ええ、無事ですよ。それとお詫びとして、あなたを他の世界に転生させていただきます。せめて別の世界ですが、幸せになってください」

「転生！？マジで？」

「ええ、あの心残りというのは？」

「ああ、入院中の父さんを看病している妹がいるんだ」

「わかりました。私が直接お詫びに行きます」

「いいのか？神様なんだろう？」

「それくらいはさせていただきます」

「そっか、じゃあお願いするよ」

「はい」

「それで俺はどうなるんだ？」

「あなたの望む世界に転生させていただきます。どんな世界がいいですか？」

「え？どんな世界でもいいのか？うーんじゃありリカルなのはの世に転生してくれ」

「リリカルなのは？あのアニメですか！？」

「う、うん、そうだけど・・・知ってんの？」

女神の食い付きぶりにたじろぐ

「知ってますとも！神様の間で今大人気ですよ！因みに私はなのはちゃんのファンなんです！」

アニメについて熱弁する女神とは、何ともシュールな光景である。

「オッホン、わかりました、リリカルなのはの世界でいいんですね？後他になにかありますか？」

「えーと、向こうで戦いたいから、魔力と能力をくれないか？」

「戦う？何故そんな危険な事を？」

「今まで居た世界では妹を護れなかった、だから、あの世界の人たちだけでも護りたいんだ」

「そうですか、わかりました。どんな能力がいいですか？」

女神の質問に俺は手を顎にあて考えだす。

「そうだな、魔力は適当に多めにしてくれ、能力は
だな」

「それでいいのですね？では、あれはをリリカルなのはの世界へお送りします。言えた義理ではありませんが、お幸せに」

「ああ、じゃあな」

女神に別れを告げると、目の前が光で一杯になる。そこで俺の意識は途切れる

n e x t s t r i k e

prologue strike (後書き)

長くなってすいません(汗)

主人公の容姿変更がないのは主人公がメチャメチャかっこいいです。
この文章を見ての通り、作者は文才がありません。そこは大目に見てください

更新は大体一週間に一度だと思っています

strike 1 (前書き)

どうもくりふぁです。

更新が遅れてすいません>(――)<
リアルでレポートが大変で(汗
さて、張り切って第一話いってみよう！

「」は会話

『』はデバイスです。なお、作者は英語の成績がアボンなので言語は日本語です。分るところは頑張って英語にしていこうと思います

strike 1

「ん？ここは・・・」

光が去って、目を開けるとそこは森の中だった。近くからは小さい爆発音が聞こえる。

「爆発音？それにこの森・・・リニアールのレリック回収か？確認したいが歩いて行くには遠いな」

『でしたら、私を使ってください』

いきなり声が聞える、声の発生源は自分の首にあった

「これは・・・デバイス？なんでこんなの持ってた？」

『それは、女神があなたへの贖罪として持たせた物です』

「贖罪・・・ね」

そう言いながら自分の首元にある翡翠色の宝石を見つめる

『マスター、バリアジャケットと形状の設定をお願いします』

「うーん、いきなり言われてもなあ、あ！」

『どうしたのですか？』

「いや、なのはがレイジングハートを手にした時もこんな気持ちだ

ったのかな？」

『そんな事より、早くしてください！』

デバイスに突っ込まれる主人公、情けない

「ああ、ごめんごめん。じゃあ、バリアジャケットの形状はBLAZBLUEのハザマをベースにしてくれ。あ、ハットはいらない。色は黒」

いい終わると体を光が包み、弾けると指定したバリアジャケットを着ていた

『デバイスの形状はいいかがいたしますか？』

「デバイスの形状はラグナの”蒼の魔導書”にしてくれ」

『了解いたしました。デバイスを装着します』

手の甲に丸いカバーがついたグローブが装着される

「お前の名前は？」

『エクセアです。これからよろしくお願いしますマスター』

「よろしくなエクセア、飛行魔法は出来るか？」

『出来ます。体全体に魔力を纏うイメージをしてください。飛行出来ると思います』

エクセアの説明を聞いた時谷は自身の体に魔力を纏わすイメージをすると、ふわりと浮かぶ感覚がある。

「行くぞ！エクセア！」

『All right my master』

時谷はさらに足に魔力を込め、飛行していく。爆発の光がきらめく場所へ

時谷side end・・・

なのはside

「ちょっと数が多いかななの」

茶色の髪をツインテールにまとめ、白い服を着た女性が空を飛んでいた。不屈のエースオブエース、高町なのはである。なのはの周りにはガジェットと言われる機械の無人兵器が飛び交っていた

『マスター、右方向より何かが急速に接近中です』

「え？」

自分の愛機、レイジングハートの警告に驚きつつガジェットの砲撃を防ぐ

「（このタイミングで増援？ちょっとまずいかな？フェイトちゃんも居ないし、それに）」

なのはは下のリニアレールを見る、そこには自分の教え子たち、機動六課のFW陣たちがガジェットと対峙している。こんな状況で増援はFWの子たちを危険に晒す事になる。それは絶対に避けなければならない、自分がここで増援を食い止めなければならない。今度こそ護るんだ。すべてを・・・

「よそ見るな！高町なのは！」

「え？！」

危険を感じ後ろを向くと、ガジェットが砲撃を溜めている

「（まずい、回避できない！防御も、ここで終わりなの・・・ごめんフェイトちゃん）」

なのはは親友の名前を思いながら目を瞑る

なのはside end・・・

時谷side

「よそ見るな！高町なのは！」

叫ぶ時谷だがなのはの後ろのガジェットは砲撃を溜めている

「くそっ！」

さらに加速する

「（間に合え！間に合え！）間に合ええ！」

そして砲撃が放たれる・・・

n e x t s t r i k e

s t r i k e 1 (後書き)

第一話はここで終わりになります。

うーん、如何せん会話が多い・・・これぞ文才のなさの証！

こんな感じでこれからがんばっていきましょう！

では、次回の更新はまた一週間後の予定です！そう予定です！早いかもしれないし、遅いかもしれません。

そこは温かい目で見守ってください

strike 2 (前書き)

くりふぁ「どうも、くりふぁです。」

時谷「どうしたんだ？告知では一週間後っていつてなかったか？」

くりふぁ「いやぁ、他の小説読んでたら書きたくなっちゃってw」

時谷「流されやすいなw」

くりふぁ「しょうがないじゃん！書きたいんだもん！」

時谷「まあ頑張れよ、さて今回のお話は？」

くりふぁ「今回は、とうとう魔王との出会いだな。やっとなのはが
出せる！」

時谷「前回も出てなかったか？」

くりふぁ「正確には時谷となのはの出会いだな」

時谷「あ、やべ・・・じゃ俺帰るわ！」

くりふぁ「あれどうしたんだ？」

なのは「デイベイン、バスター！」

くりふぁ「ぎゃあああああ！」

なのは「魔王じゃないもん！」

くりふぁ「で・・・では・・・始まり、ます（ガクッ）」

は念話です

strike 2

「えっ？」

自分の後ろにいる女性、高町なのは疑問の声をあげる。なのはに砲撃を障壁で防ぎ、ガジェットをハザマのアークエネミー【ウロボロス】で破壊する

「大丈夫か？」

「ふえ？あ、はい！ありがとうございます！でも、あなたは誰ですか？」

いきなり話しかけられ可愛い反応で驚きながらも、しっかりと職務をこなすなのは。だが、何故にレイジングハートをこちらに向けている？

「今はそんなことより、あれをどうにかしないとだろ？」

そう言って視線をなのはからガジェットへ向ける

「そうですけど・・・分りました。でも後でお話聞かせてもらってくださいね！」

なのははお話宣言すると、ガジェットへと向かっていく

「俺らも行くか？エクセア」

『All right』

時谷 s i d e e n d

フェイト s i d e

「今のは？何だったんだろ？」

なのはに向かって砲撃を撃とうとしていたガジェットを破壊して助けた

「なのは大丈夫？怪我してない？」

「あ、フェイトちゃん！うん、大丈夫だよ。あの人が護ってくれたし」

「よかった・・・で？あの人は誰なの？」

なのはの安全を確認して安心したフェイトはガジェットを撃破しつつ突然現れた青年の事について質問する

「それがね、話してくれなかったの。お話の約束はしたよ？」

お話、それはなのはの得意技。お話という名の尋問なのだ

「そ、そっか、じゃあ安心だね」

「？フェイトちゃん何が安心なの？」

「な、なんでもないよ！うん、なんでもない」

「そう？そうならいいんだけど、じゃあフェイトちゃんも頑張つてね」

なのははそこで念話を切る、自分もガジェットの撃墜に専念する

フェイトside end

時谷side

「エクセア、後何機だ？」

『約30機です』

「あともうちよいか」

ガジェットの砲撃を回避しつつ、手に持っている双銃、ノエルのアークエネミー【ベルヴェルク】でガジェットを撃墜していく

「これで、30機目！」

最後のガジェットを撃墜し、リニアレールを見ると、FW陣がケースらしきものを持っている。おそらくロストロギア、レリックのケースだろう

「そのあなた、武装を解除してください！」

後ろから声がしたので振りかえると、そこには金髪の女性が手に持

っているデバイスを自分に向けている。

「何のマネだ？こちらは協力したのだが？」

「管理局執務官、フェイト・Ｔ・ハラオウンです。管理局はデバイスの無断使用は禁止しています。武装を解除し、ご同行願います」

「ちょ、ちょっとフェイトちゃん！？」

いきなり武器を構える親友の姿に驚くのは

「ふむ、分かった。武装は解除しよう」

フェイトの要請に答え、ベルヴェルクを消す

「今のは！？（いきなり武器が消えた？）」

消えたベルヴェルクにまたも驚くのはであった

「ありがとうございます。では私たちについてきてくれますか？」

頷いて返答すると手にバインドをかけられた

「すいません、形式状こうしなければいけないで、先程はなののを助けていただいてありがとうございます」

フェイトから念話が送られてくる、それに戸惑いつつ返答する時谷

「これが念話って奴か。いや、気にしないでいいさ。後で解除してくれるならな」

「 そうですね、機動六課まで我慢してください 」

なのはとフェイトに連れられ、機動六課に向かう時谷、時谷はこれからどうなるのか。

n e x t s t r i k e

strike 2 (後書き)

くりふぁ「さて第二話終了」

時谷「今回も会話多かったな」

くりふぁ「すいません>(――) <努力はしているのですが」

時谷「まあこれからも努力しろよ？さて、今回は機動六課ではやてと対面か」

くりふぁ「そうなんですがねえ、うまく書けるかなあ？」

時谷「そう言えば、作者はBLAZBLUEが好きなのか？」

くりふぁ「うーん、主人公のBJがハザマベースだからもあるけど、自分があまり強くないから、せめて小説の中だけでも強くありたいのさ。ノエル可愛いよノエル」

時谷「作者が自分の世界に入ったから俺が締めよう。こんな作者だが、応援よろしくお願いしてます。ではまた次回！更新は明日か明後日の予定です！」

今回登場した武器

【ウロボロス】

プレイフル

登場作品：BLAZBLUE

コンティニウム

CONTINUUM

シフト

SHIFT

使用キャラ：ハザマ

形状

深碧の鎖に蛇を模した銀色のアンカー

【ベルヴェルク】

プレイフル

登場作品：BLAZBLUE

コンティニウム

CONTINUUM

SHIFT

使用キャラ：ノエル・ヴァーミリオン

形状

純白の銃身に真っ赤なグリップをした双銃

アークエネミーとわ

黒き獣と呼ばれる強大無比な力を持つものを倒すために魔女ナインが作ったとされる兵器。アークエネミーを作る為には無数の魂を必要とし、その多大なる犠牲^{コスト}から、九器しか作る事が出来なかった。使用者の何かを代償にその力を発揮するが時谷は己の魔力を代償にしている。時谷の魔力は無尽蔵の為、代償にしても問題ない

strike 3 (前書き)

くりふぁ「さて、調子にのって投稿だぜ！」

時谷「どうしたんだいったい？」

くりふぁ「いや、また他の小説読んでたら書きたくなっちゃって」

時谷「はいはい、いつも通りなわけな」

くりふぁ「まあ早くはやてとの出会いを書きたかったのさ（キリッ」

時谷「うわ、キモッ！」

くりふぁ「ひどいなぁ、さて今回のお話ははやてとの出会いまで行くこうと思う」

時谷「それじゃ」

くりふぁ、時谷「始まります」

strike 3

なのはたちに連れられ今時谷は大きな建物の目の前にいる、機動六課隊舎、それが建物の名前だ

「ここが私たちの仕事場、管理局機動六課の隊舎だよ」

なのはが説明するが時谷はたいして驚かずにジッと隊舎を見つめる

「じゃあ、部隊長の部屋まで来てくれるかな？ バインドは解いておくから」

「いいのか？ いきなり攻撃するかも知れないぜ？」

「にやはは、君はそんなことしないよ。そんなことするんだったら私を助けたりしないよね？」

確信があるのか、なのはは時谷を疑わない。フェイトも同様のようだ

そんな話を話していると、部隊長室と思われる部屋の前に着いた

「ここが部隊長室、はやて？ 連絡した子を連れてきたよ？」

扉の横にあるインターフォンで中と連絡を取る

「ありがとう、中に入って来てや」

インターフォンから柔らかな関西弁が聞えてくる。部屋の扉が開き中に入る。そこには椅子に座っている茶髪のショートカットの女性

と、ピンクのポニーテールの女性、三編みの少女と狼？がいた

「君がフェイトちゃんの言ってた男の子やな？機動六課の部隊長、八神はやてや」

「主に仕えし騎士、烈火の将、ヴォルケンリッターのシグナムだ」

「同じく、鉄槌の騎士、ヴォルケンリッターのヴィータだ」

「盾の守護獣、ヴォルケンリッターのザフィーラだ」

「自己紹介されたからにはしないとな、暁 時谷だ」

お互いの自己紹介を終えるとなのは時谷に質問を始める

「まず、質問させてもらうね？あなたは何故私の名前を知っていたの？」

「それは言えないな。今は」

「じゃあ、どこでそのデバイスを手に入れたの？」

フェイトは的確に痛いところをついてくる。

「俺にもわからないんだ、気付いたらもっていたんだ」

「気づいたらやて？暁さんは次元漂流者なんか？」

次元漂流者、何らかの要因で次元の狭間に巻き込まれどこかの世界に流れついた者のこと

「（まずいな、転生したとは言えないし）いや、どちらかと言うと平行世界からきたって感じだな」

「平行世界だと？」

時谷の言葉にシグナムが反応する

「俺はここじゃない地球から来た、今はそれしか言えない」

真剣な目で語る時谷、この空間に沈黙が流れる

「うーん、それじゃしかたないなあ、しばらくはここにいてくれるか？一応保護という形になってしまっくんやけど」

「ああ、構わないが、俺をここで働かせてくれないか？戦闘能力は高町さんが知ってると思うんだけど？」

「うーん確かに強そうだったけど、民間人を巻き込むわけにはいかないし」

「なら主、私がテストするというのはいいかがでしょうか？」

なのはの強そうという発言に眼をキラキラさせながら提案するシグナム、さすがバトルマニアだ

「そやな、じゃあシグナムと模擬戦してみて、勝ったら協力してもらうことにしよか」

「ちょ、ちょっとはやて！」

「何？フェイトちゃん？」

「いきなりシグナムはきついんじゃない？私やなのはならまだしも」

「なんだテストロッサ、私が負けるとでも思っているのか？」

「そうだぜ、シグナムが負けるはずねえじゃん」

ヴォルケンたちとフェイトが言い合うが

「俺は構わない」

時谷が言い去る

「ちょっと暁さん！？」

時谷に発言に驚くフェイト、その言葉を聞いたシグナムはうれしそうに

「よし！そうと決まれば、さっそく訓練シュミレタ に向かうぞ
！」

意気揚々と出ていくシグナムに着いていく時谷、それをポケーとしながら見送るなのはたち

時谷とシグナムの模擬戦、時谷は勝てるのか？

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.

strike 3 (後書き)

くりふぁ「さて第三話いかがでしょうか？次回はシグナムとの模擬戦です」

時谷「俺死なないよな？」

くりふぁ「さあ？俺の気分次第だな」

時谷「はあ、さて次回の投稿予定は？」

くりふぁ「明日か明後日の予定です！」

BLAZBLUEのCS発売が楽しみです！

Strike 4（前書き）

更新がおくれてすいません。リアルが忙しく、なかなか書けませんでした

今回はシグナムとの模擬戦です。戦闘描写は苦手なのですが、頑張ります

では、始めます

strike 4

今、時谷は廃墟と化した市街地にいる。市街地といっても本物の廃墟ではなく機動六課が誇る訓練シュミレタを使った廃墟のステージである

「なあ、エクセア。あのシグナムに勝てるかな？」

『大丈夫です。マスターなら勝てます！』

「ありがとう、エクセア」

「準備は出来ているか？ 暁」

エクセアとの会話が終わると、シグナムがバリアジャケット姿で立っていた

「はい、いつでもいいですよ」

「では、始めるとするか」

シグナムは自身の愛剣、レヴァンティンを正眼に構えるが、俺は腕をだらりと下げたままだ

「ん？ なんだ構えなのか？」

「気にしないでください。試したい事があるので」

俺の言葉に微笑するシグナム

「私を相手に様子見は危険だぞ？」

「まあ、頑張りますよ」

お互いが構え終わり、なのはが模擬戦の説明を始める

「じゃあ、時間は無制限で気絶か降伏で終了ね。それじゃあ、始め！」

「行くぞ、暁！」

先に動いたのはシグナムだった。一気に時谷に肉薄し袈裟に斬るがバックステップでかわしてから、右手に魔力を込める

「ヘルズファング！」

地面を蹴り、シグナムに突進しつつ右手で殴りつける。が、シグナムはレヴァンティンで受け流し、さらに斬りかかる

「徒手格闘か、ザフィーラに似ているな」

「まったく違うがな、召喚、氷剣ユキアネサ」

俺が手を前に突き出すと、目の前に十字架をかたどった氷の塊が出てくる。それを手で砕いて、何かをつかみ取る。氷が砕け、俺の手には一本の刀が握られていた

「それがお前の剣か？」

レヴァンティンを構えたままシグナムが聞く

「ええ、幾多ある剣の中から選んだ剣です」

鞘から刀身を抜く、美しい刀身は雪のように白銀、刀身から柄までが白で統一された刀だった

「美しいな（だが、それと同時に何か力を感じるな）」

「ありがとうございます。じゃあ行きますよ！」

俺はユキアネサを納刀したまま、シグナムへと肉薄し左手を前に突き出す。するとミッドともベルカとも違う魔法陣が出現しそこから狼の形をした氷塊が出現する

「っ！」

シグナムは咄嗟に身を捻り、回避するが避けきれずに左腕が手から肘までが凍ってしまう

「魔力変換資質か？」

「違いますよ、魔力変換資質ではなくこの剣の能力ですよ」

「厄介だが、面白い！」

シグナムは腕に魔力を込めて着いた氷を砕く

「でわ、私も本気で行こう！レヴァンティン！カードリッジロード！」

『Ja』

レヴァンティンから弾丸がロードされる

「受け切れるか！紫電、一閃！」

シグナムの魔力変換資質である炎を纏いながらレヴァンティンが振るわれる

「凍牙、氷刃！」

俺も凍気を纏った斬撃を飛ばす

互いの斬撃がぶつかり合い、魔力どうしが反応し爆発する

「くっ！どこだ」

シグナムは爆煙の中での確に俺の位置を掴んで斬りかかってくる

「はぁッ！」

「甘い！」

レヴァンティンの胴を狙った一撃を体を屈めてかわし、その状態からユキアネサを真上に向けて抜き放つ。ユキアネサの刀身は的確にシグナムの胴にあたり、シグナムを撃ちあげる

「【^{エルキ}天の鎖^{ドウ}】よ！」

吹き飛んでいるシグナムに【^{エルキ ドゥ}天の鎖】で拘束する

「くっ、なんだこれは!？」

「それは^{エルキ ドゥ}天の鎖と言ってな、神すら抜け出す事の叶わない最強の拘束宝具」

シグナムはまだ理解できていないようだが関係ない。俺はシグナムに向けて左手を構える。そして俺の手から巨大な氷で出来た弓が現れる。弓を撃つ為の構えをとると右手から弓と同じく、巨大な氷の矢が形成される

「氷翼!」

矢をさらに引き絞る。

「月鳴!」

そして、矢が放たれる。放たれた矢はシグナムに当たり貫く。と言っても氷はシグナムに当たる寸前に砕けていく為ダメージはない

「なぜ、あてなかった？」

^{エルキ ドゥ}天の鎖解除して、降りてきたシグナムが聞いてくる

「なぜと言われても、俺の技には大概非殺傷なんてないから当たったらタダじゃ済まなくなる。それに女性に傷をつけるわけにはいかない」

「なっ、……はあ、私の負けだ」

「そこまで！勝者、時谷君！」

勝者宣言をしたのはや、模擬戦を見ていたフェイトやFWメンバ
ーは啞然とした。いくらリミッタがかかっていたとわいえ、ヴォ
ルケンリッターの将、シグナムが負けてしまったのだ。しかも誰と
も知らない俺にだ

n e x t s t r i k e

strike 4（後書き）

くりふぁ「お疲れ様でした！」

時谷「疲れた、てか最後の絶対フラグたってね？」

くりふぁ「気のせいだろ」

時谷「嘘だ！」

くりふぁ「はいはい、黙ってるこのだらず！」

時谷「書いたのはお前だろ！」

くりふぁ「それでは、また次回お会いしましょう」

時谷「無視かよ、次回の投稿は二日後か三日後の 予定 です」

strike 5 (前書き)

どうもくりふぁです。

まず、によほほぐさん感想を書いていただきありがとうございます！
これからも頑張っていきたいと思えます！

今回は戦闘はありません。

では、本編へどうぞ！

Strike 5

時谷side

「さて、はやて。俺が勝ったんだ、六課に協力させてもらっぞ?」

「うん、私としては不本意なんやけど、約束やししょうがないなあ。これからよろしくや時谷君」

「私もあんまり納得出来てないけど、よろしくね時谷君。ほらフェイトちゃんも」

「うん、よろしくね時谷」

全員と挨拶が終わると次にFWたちが自己紹介を始める

「ティアナ・ランスター二等陸士であります!よろしくお願いします!」

「スバル・ナカジマ二等陸士です!よろしくお願いします!」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります!よろしくお願いします!」

「キャ、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です!よ、よろしくお願いします!」

四人は敬礼しながら、元気に挨拶する

「暁 時谷だ。呼び方は時谷でいいぞ。よろしくな。皆の事は名前
で呼ばせてもらうな」

「『『『はい！』『』『』」

元気に返事をするスバル達、それを満足そうに頷く時谷

「あのー、時谷さん」

「ん？なんだスバル？」

スバルが遠慮がちに手をあげて質問する

「さつき時谷さんが持ってた剣ってどこにあるんですか？あれが時
谷さんのデバイスですか？」

「イヤ、デバイスはこいつだ」

『エクセアです。よろしく願いしますねスバルさん』

「エクセアさんですか、じゃああの剣は？」

「あれは俺の希少技能だよ」

「レアスキル希少技能・・・ですか」

希少技能と聞いてティアナが聞いてくる。自分の事を凡人だと思い
込めるティアナのことだから、また自分に劣等感を感じているの
だろう

「まあ、詳細は言えないがな」

「ええ、何ですかあ？」

人懐っこい性格のスバルは先程までの緊張は解けている

「ま、いつかな」

「残念だな」

スバルは肩を落としながら残念がる

「それじゃ、時谷君にこれから寝泊まりする部屋に案内せなあかな」

「じゃあ、エリオ。案内してくれ」

「え？僕ですか？」

まさか自分が指名されるとは思っていなかったのか、驚くエリオ

「話したい事があるんだよ。いいか、はやて？」

「まあ、エリオがええんならええよ」

「エリオ、大丈夫？」

フェイトが心配そうに聞くが、エリオは元気に答える

「大丈夫ですフェイトさん！それぐらい出来ます！」

「じゃ、頼むぜエリオ」

「はい！」

元氣よく返事をしたエリオについてく時谷、それを見ながら残された女性陣は疑問に思った

「（なんでエリオなんだろう？別に私やなのでもいいのに・・・まさか、時谷はそっちの人のかな！？それじゃエリオは・・・大変！）」

と、フェイトが妄想にふけっている時、エリオと時谷はというと

「あの〜時谷さん」

「なんだ？エリオ」

「なんで案内役が僕なんですか？」

「いや、女性ばかりの職場はどんなものか聞きたくてな」

「え？そうですね。時たま寂しいですね、主な男性はグリフィスさんやヴァイスさんだけですし、二人とは年も離れてますし」

「そうか、なんか悩みがあったら相談に乗るぞ？と言っても俺も歳が近いわけではないけどな」

「ありがとうございます。時谷さん」

そんな会話をしていると、部屋の前についた

「ここが時谷さんの部屋になります。食堂はでて右の角を曲がって真っ直ぐです。隊舎を出るには左に言って真っ直ぐ行くと出口に着きますよ」

「ありがとなエリオ、助かったよ」

「いえ、当然の事ですから」

「それじゃ、また明日な」

「はい！お休みなさい」

エリオは再びなのは達の所に戻っていったのを確認すると、扉を閉め、これからやることの確認をする

FWたちの強化

ティアナの魔王フラグブレイク

六課襲撃阻止

ヴィヴィオ誘拐の阻止

「とりあえずここまでが、当面の目標だな。結構大変だな、まあ出来る限りのことをするだけだ」

『頑張りましたよ。マスター』

「ああ、エクセアも頼むぞ」

『All right, my master』

エクセアとの会話をおえて、眠りに着く、これからどうなるのだからか

「（紗耶・・・）」

next strike・・・

strike 5 (後書き)

どうもくりふぁです。いやぁ今回も会話が多かったですね
さて、次回は戦闘をいれる予定です

ではまた次回！

Strike 6 (前書き)

どうもくりふぁです。

によほほーさんご忠告ありがとうございます！

作者は国語が壊滅的なため、誤字や脱字などがありましたら感想のほうへ一報いただければ幸いです。

では、魔法少女リリカルなのはStrikeS〜護る為の力〜始めます。

時谷「最近俺ここでの出番ないな」

strike 6

「気持ちのいい朝だな」

そんな爺くさい事を言いながら歩いていった。朝早くに目が覚めてしまつて、六課隊舎の周りを散歩していた。

しばらく歩くと、訓練場についた。訓練場の方を見てみるとすでになのはが居た。

「なのは、おはよう」

「ふえ？なんだ時谷君かあ、びつくりしたあ」

いきなり声をかけられて、可愛い反応を見せるなのはにグツとくる

「（いちいち可愛いなこいつ）ごめん驚かせてすまなかったな、FWたちの訓練メニューか？」

俺はモニターに写しだされている項目をみて聞いてみる。なぜミッドの言葉がわかるかと言うと、ドラえもんの秘密道具のひとつ翻訳こんにゃくを食べているためミッドの言葉がわかるのだ

「うん、でも最近気になる事があるんだ」

「気になること？もしかしてだけどティアナか？」

「そう、よくわかったね。そうなんだ、最近頑張りすぎかなあって思ふんだ」

「ティアナと話したのかお前の教導の意味、言葉にしなきゃ伝わらない事もあるぞ」

「そうだね、その内機を作って話してみるよ。て、なんで時谷君が私の教導の意味知ってるの!？」

「気にするな、強いて言うなら俺だから」

「理由がむちゃくちゃだよ」

その後もなのはと雑談していると、FW陣がやってきた

「「「「おはようございます!」「」「」」」

元気な挨拶とともに綺麗に整列する、機動六課の訓練は早朝の訓練と朝食後に昼から夕方までの訓練の二つに分かれている

「それじゃ、早朝訓練始めようか」

「「「「はい!」「」「」」」

訓練が始まり蚊帳の外となった時谷は隊舎にある自分の部屋に戻る
とエクセアを取り出す

「なあエクセア？」

『なんですか?』

「いや、なんでもない。^{トレース}投影、^{オン}開始」

手に魔力を込め、幻想する。かつて赤銅の弓兵が使用した夫婦剣をこの手に

「トレース オフ
投影、完了」

集中するために閉じていた目を開けると、ふた振りの剣が握られていた。陽剣の干将と陰剣の莫耶、白と黒の双剣

「うまくいったかな」

「大丈夫ではないでしょうか」

投影した干将と莫耶を破棄する

「王の財宝ゲートオブバビロンも使えるのか、てか時期的にそろそろホテル・アグスタか。魔王フラグの回避はムリのような気がしてきた」

「諦めないでください。マスター」

「それじゃ回避するために寝るとするか」

「さつき起きたばかりじゃないですか・・・」

エクセアが言った頃には時谷は寝ていた

「寝てしまいましたか。本当に護るつもりなのですね、この世界の人たちを」

そう言ってエクセアも待機モードへ移る

そして、時は流れていくそしてホテル・アグスタへ

n e x t s t r i k e

strike 6（後書き）

くりふぁ「すいませんでした！」

時谷「久々の登場だ。今回戦闘入れるって言ってたのに入れなかったからな」

くりふぁ「ホントにすいません、ホテル・アグスタには力入れる・・・予定です」

時谷「テスト明日からなんだから勉強しろよ」

くりふぁ「今日は連続で投稿しようと思ったのに」

時谷「いいから勉強しろ」

くりふぁ「しょうがない、勉強するか。というわけですいません。テストが終わるまで更新できません。」

時谷「では、また次回」

Strike 7 (前書き)

どうもくりふぁです。試験中に休日があったので投稿しようと思います

今回は戦闘はありません。ブレイブルー コンテニウムシフト発売おめでとう！そしてゲットしました！
やっとなタが使える！

では、魔法少女リリカルなのはStrikers〜護る為の力〜始めます

strike 7

「警備任務？」

朝早くにはやてから部隊長室にくるように言われて来てみると、なのはにフェイト、守護騎士が集まっていた

「そうや、場所はホテル・アグスタっていう高級ホテルで明日、取引許可の出ているロストロギアのオークションが開かれるんよ。そのロストロギアに反応してガジェットが来るかもしれんし、六課のアピールもできる。というわけで時谷君にも手伝ってほしいんや」

「なるほどな分かった、だがスバルたちは戦えるのか？」

「そこは大丈夫だよ、私やヴィータちゃんが訓練してるし」

「それに新人たちの防衛ラインにはぜってえ近づかせねえ！」

「お前も過保護だな」

「う、うつせえ！そうゆうシグナムだって」

いきなり口論を始めるヴィータとシグナム、顔を真っ赤に染めて怒っているヴィータに対し、にこやかな笑顔を浮かべないなす。端から見れば仲のいい姉妹に見える

「時谷？なんで笑ってるの？」

フェイトに言われて気付いた、いつの間にか笑っていたようだ

「いや、あの二人を見てたらいろいろ思い出しただけさ」

「思い出す？元いた世界のこと？」

「ああ、あるところにとっても仲のいい兄妹がいた。でもその兄貴のほうは死んじまってな、その妹は今一人ぼっちになっちゃった」

「その兄妹つてとき「フエイト、これはあくまで例えだ。気にするな」時谷・・・」

「おい、はやて！もう部屋に帰ってもいいか？」

「ええよ、ごめんなこんな朝早くに」

「気にするな、じゃまた後でな」

今だヴィータとシグナムが言い争いしていたが、そんなことお構いなしに部屋を出ていく

部屋を出た時谷は訓練場に向かう。しばらく歩いて行くと訓練場に着いた

「お、やってるな」

なのはが居ないながらもティアナが指示を出して、自主練習していた

「ティアナ！」

ティアナは呼ばれたのに気付くと、練習を中断しこちらに顔を向け

る。その顔は練習を邪魔された不満と自分に何の用だというふうな表情だった

「なんでしょうか時谷さん」

「すまん、練習の邪魔して」

「いえ、構いません」

「すまないが皆を集めてくれるか？」

「わかりました スバル、エリオとキャロちょっと集まって」

ティアナは念話を送っているのか目をつぶっている。しばらくしたら、FWメンバーが全員集まってきた

「あれ？時谷さん？どうしたんですか？」

スバルが目パチクリしながら聞いてくる

「ああ、今から模擬戦しようと思ってな なあ、なのは」

「ふえ！な、なに時谷君？」

「スバルたちとの模擬戦許可をくれ」

「え、時谷君とやったら一瞬で終わっちゃうんじゃないの？」

「大丈夫、手加減するし」

「あんまり激しくしないでね？明日は任務あるし　よし、今なのはから許可ももらった」

「あの、この模擬戦の意味はなんでしょうか？」

ティアナが不満丸出しで聞いてくる

「なに、君らの実力を知りたいだけさ」

「っ！分かりました。私が相手をします」

ティアナがなにか勘違いしている

「何言ってるんだ？全員でかかってこい」

「……え？」「……」

時谷に言葉に驚くスバル達、いくらシグナムに勝ったとはいえ自分たちはなのはやヴィータに訓練受けている。一人で戦うのとチームで戦うのは全く違う、仲間が居る。援護やカバーしあえる仲間が居るのだ

「ちなみに4人いれば勝てると思うな。どうせお前ら勝てないからな」

わざと挑発する。エリオとキャロはまだ子供のため勝てないという言葉に純粹にショックを受けている。スバルはそんな挑発をもともせず、模擬戦と聞いてワクワクしているようだ。ティアナは見てわかるくらいにイライラしている

「じゃあ、私達4人が相手します!」

「ああ、そうしてくれ」

こうして、時谷VSフォワードメンバーの戦いが始まる

next strike・・・

strike 7（後書き）

くりふぁ「ハザマむじい！」

時谷「いつたいたんだいきなり」

くりふぁ「いやぁ、コンボが繋がらなくて」

時谷「それはお前の実力不足だろ？」

くりふぁ「練習するさ！さて次回はFWメンバーとの戦闘だが、勝てるかな？」

時谷「え！？勝てないの！？」

くりふぁ「まあ負けないけどね」

時谷「よかった」

くりふぁ「それじゃ、また次回！」

時谷「更新予定は明日の予定だ」

Strike 8（前書き）

くりふぁ「すいません！投稿が遅れました！」

時谷「明日と言っておきながら、この遅れ・・・どう説明する？」

くりふぁ「本当に申し訳ありません！この埋め合わせは必ずいたしますので」

時谷「さて、今回のお話は？」

くりふぁ「FWたちとの模擬戦だな」

時谷「戦闘描写苦手なくせに模擬戦多いな」

くりふぁ「だって書きたいんだもん。しょうがないじゃん。それじゃ」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikers」護る
為の力〜始まります」

Strike 8

「さて、そちらの準備は出来たか？」

六課の訓練シュミレタの設定を平原に設定されている。何故平原なのかというと、時谷の提案だ

時は少しさかのぼり

「なあ、ティアナ」

「なんですか？」

「場所を平原にしてほしいんだが、ダメか？」

「平原・・・ですか？」

時谷の提案に疑問を浮かべるティアナ

「いいですけど、理由を聞いてもいいですか？」

「理由？まあ気分かな」

「気分って」

もう怒りを通り越して呆れがくる。なんなのだと

「じゃあ、頼むよ」

去っていく時谷の背中を見つめるティアナ

「（大丈夫よティアナ、あなたが教わってきた魔法はなんでも撃ちぬける。そうだどんなに強かろうと関係ない、勝つんだ。兄さんから教わったこの魔法で）」

心で自分の決意を固めるティアナ

時は戻り、FWたちは少なからず緊張していた

リミッタ　がついていたとはいえ、騎士の中でも高位の位置にいるシグナムが敗北したのだ。そんな相手に自分たちが勝てるのだろうか？

そんな不安がFWたちを緊張させる

「大丈夫よ、精一杯がんばりましょ。作戦は私とスバルのツートツプで行くわ。エリオは私とスバルが隙を作るからその隙について攻撃して」

「わかりました！」

「あの、私はいったいどうすればいいんですか？」

「キャラはフリードのブラストフレアで私達をカバーしつつブーストでエリオを援護して」

「はい！」

「作戦は決まったか？」

「はい、始めてもいいでしょうか？」

「分かった今から30秒後に始める」

時谷はそれだけ言い終わると念話を切る

「ふう、さてどうやって戦うかな」

模擬戦を申し込んだはいが、どうやって戦うかを決めていなかった

『あなたなら負ける事はないでしょう？』

「過ぎた力は慢心を生むつてもといた世界で小説で読んだからな」

『すいません。マスター』

「なんでエクセアが謝るんだ？お前のせいじゃないだろ？」

『いえ、気にしないでください』

「さてそろそろ、来るかな？」

ティアナたちの方を見ると、スバルの後ろに隠れながら走ってくる
ティアナの姿が見えた

「それじゃお手並み拝見だ

トレースオン
投影開始」

手を空に掲げる。すると背後に無数の剣の群れが現れる

「
ロールアウト バレット クリア
工程完了。全投影待機」

ティアナは警戒しているのか、進行スピードを緩める。だが緩めた事が裏目に出る

「
フリーズアウト ソードパレルフルオープン
停止解凍、全投影連続層写！」

俺が掲げた腕を振り下ろすと背後に控えていた剣群が一斉に発射される

時谷 side end

ティアナ side

「スバル！プロテクション張って！このままいくわよ！」

「え！？でもあんなに飛んでくるだよ？」

「あんたが防ぎきれないのは私が撃ち落とすから！エリオのための隙を作るわよ！」

「おう！」

返事をしたスバルはスピードを上げる、それでもティアナがついてこれる速度だ

「（勝って見せる、兄さんから教わったこの魔法で！）」

ティアナ side end

時谷 side

「さすがに止められないか、ま、これぐらい突破してくれないとな」

俺が用意した剣は、聖剣や魔剣の類ではなくましてや宝具でもない。ただの何の神秘ももっていない剣だ。さらに刃先をつぶし、刃引きをしているため怪我をすることはまずないだろう。

「さて、次はどうするかな？」

未だに剣を撃ち続けながら考えていた。試したいことは沢山あるが、ありすぎて困っている

「そつだな、テイルズでいくか」

剣群を撃ちつつ、ひとつの剣を投影する。青みかかった刀身に特徴的な鏢。アルベイン流剣士が持っていた剣、【エターナルソード】。時の剣と呼ばれる伝説級の剣だ

ソードパレルフルクローズ
「全投影連続層写停止」

剣の射出をやめる。そしてエターナルソードを正眼に構える

「さあ、来い！」

時谷 side end

ティアナside

「剣が止んだ？」

いきなり止んだ事に驚きつつ、時谷を見ると、一振りの剣を構えている

「剣だね。どうするティア？」

「このまま行くわよ。スバルはウイングロードを展開して私がフェイクシルエツトで攪乱するから隙が欲しいエリオと一緒に大きいのを叩き込んで」

「分かった！うおお！」

スバルはウイングロードを三本展開する。ティアナはフェイクシルエツトを発動してスバルの幻影を作る

「エリオ、準備いい？」

「はい！大丈夫です！」

「スバル、合わせてね！」

「おう！」

時谷の姿がはつきり見えるくらいの位置で停止する。カードリッジを二発、ロードする

「クロスファイヤー！シュート！」

5発の誘導弾が時谷に向かって飛んでいき、直撃した

「「え？」」

直撃したことに驚くスバルにティアナ、だが煙がはれるとそこには
無傷の時谷が立っていた

n e x t s t r i k e

strike 8（後書き）

くりふぁ「という事で今回はここまでになります。長くなるので前編と後編に分けることにいたしました」

時谷「いきなり、エターナルソードはなあ」

くりふぁ「しょうがないじゃん、書きたかったんだもん」

時谷「次回は直接戦闘か」

くりふぁ「時空剣技あるから負けないだろ？」

時谷「さて次回は！」

くりふぁ「うわ！スル された！」

時谷「作者がうるさいが、次回の更新は明日の予定だ」

strike 9 (前書き)

くりふぁ「昨日は更新出来ず、すいません」

時谷「ブレイブルーやってたもんな」

くりふぁ「ちょ！おま！ばらすなよ！しょうがないじゃん！ネタの回収に行ってたんだから・・・」

時谷「さて今回のお話は？」

くりふぁ「またさりげなく流されたorz、模擬戦後半です」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikers」
護る
為の力へ始まります」

strike 9

「ふゝ、危なかったな。当たる前に宝具、十二の試練ゴットハンドを発動して正解だな」

宝具【十二の試練ゴットハンド】は、Aランク未満の攻撃を無力化し、かつ11回までの自動蘇生の能力をもつ宝具だが、自動蘇生は外してある

「十二の試練ゴットハンド、解除」

追撃がないのを確認すると十二の試練ゴットハンドを解き、エターナルソードを構える。

見ると、ウイングロードを展開したスバルが突っ込んでくる。だが、スバルが3人いる。おそらくティアナのフェイクシルエットだろう。どれが本物のスバルかは分からない

「関係ないけどな」

エターナルソードを腰ために構えなおし、魔力を収束させていき、上空から迫る3人のスバルに向けて剣を振りぬく

「真空破斬！」

溜めた魔力を斬撃にのせて放つ、いきなり来た斬撃波を回避できる筈もなくすべてがスバルに直撃する。が

「なに？3人とも幻影だと」

じゃあ本物はどこに？、と思案しているとウイングロードが時谷を取り囲む。そのすべてのウイングロードからスバルが走ってくる

「無駄だ！ 守護方陣 ！」

スバルが右手のリボルバーナックルで時谷を殴ろうとするが、時谷は剣を地面に刺すと、そこを中心にベル力でもミッドでもない魔法陣が時谷の足元に展開される。

「うおおおお！」

スバルが勢いよく殴り掛かるが、見えない壁に弾かれる。弾かれた衝撃でフェイクシルエットが解除される

「そこか！」

未だに倒れこんでいるスバルに一瞬で近づき、斬り飛ばす。もちろんエターナルソードは刃引きされているため、怪我をする心配はない

「これでスバルは戦闘離脱な」

「うゝ、悔しいゝ」

スバルに剣を突き付け、降参させてティアナの撃破に向かおうとすると、火球が降り注ぐ。おそらくフリードのブラストフレアだろう、ということとは

「はああ！」

「エリオか！」

一瞬の気の緩みに気付いて攻撃してきたのだろ。ストラーダに搭載されたブースターで突撃してくる。どうしてこつも六課のメンバーは突撃思考が多いのか

「攻撃が真つ直ぐすぎるな！ 獅子戦吼！」

ストラーダの刀身を剣で弾き、軌道をずらし、左手に込めた魔力を放出する。放出された魔力は獅子をかたどりエリオを襲う

「うああ！」

獅子戦吼 をくらったエリオは吹き飛び、気絶する

「あとは、キャロとティアナか」

エターナルソードを握りなおす

時谷 side end

ティアナ side

「スバル！エリオ！」

あつという間に倒されてしまったスバルとエリオ、残ったのはキャロと自分のみ

「キャロ、ブーストお願い」

「は、はい！彼の朱の魔導師に強き力を！」

「ありがと、フリードと一緒に下がってて」

「はい！」

大きくなったフリードに乗り、空にあがる

「クロスミラージュ、カートリッジロード！」

『ロード、カードリッジ』

クロスミラージュから2発カードリッジが排出される

「クロスファイアア！シュート！」

魔力誘導弾を5個発射する。もちろん、当てるつもりはない。このクロスファイアは注意を引くためのもので本命は時間差発射する

「シュート！」

直射弾と誘導弾を混ぜて発射する

「（これで決まれば）」

ティアナside end

時谷side

「クロスファイヤ？剣じゃキツイな」

エターナルソードを破棄し、黒銀と白銀の双銃を握る

「【エボ二 & アイボリー】、ティアナは双銃だしな、合わせるか」

迫ってくる誘導弾を、2丁の銃で迎撃する。この銃の特性である連射と破壊力を生かし、撃ち落としていく

「なんか物足りなというか、手応えがないな」

そんなことを言っていると爆煙からオレンジ色の魔力弾が飛んでくる

「な！？時間差だと！ なんてな！」

急に飛んできたがそんなことは予測済みだった。何の問題なく撃ち落としていく

「（なかなか考えたな、まだまだのびるな）だが、これで終わりだ！」

エボ二 & アイボリーを連射しながらティアナに接近する

「クロスファイヤア！シュート！」

ティアナがクロスファイヤを撃ってくるがお構いなしに距離を詰める。大体50mくらいでエボ二 & アイボリーを破棄し、ラグナの大剣【ブラットサイズ】を召喚する

「これで終わりだ！」

一気に距離を詰め、ブラッドサイズを振るい、クロスミラージュを叩き落として刀身を鎌のように展開し首に突き付ける

「降参か？」

「くっ！・・・降参です」

「ごめんな、怖かつたろ？」

展開した鎌を大剣に戻し、腰にマウントする。ティアナに声をかける

「怖かつたです」

若干涙目になりながら睨んでくる

「リーダー撃破で模擬戦終了だ」

訓練シュミレタの電源をきる

「時谷く〜ん！」

呼ばれた方向を見ると、なのはが手を振りながらデイベインバスターを撃ってくる

「おい！いきなりなんだよ！」

咄嗟にラウンドシールドを展開して防ぐ

「模擬戦は許可したけど、激しいのはダメって言ったでしょ！」

「いや、全然激しくないし、大丈夫だろ？」

「十分激しいよ！キャロ以外ヘトヘトだよ！」

「え？」

FWたとを見ると、スバルは斬り飛ばされた衝撃で未だに立てず、エリオは気絶し、ティアナは魔力の使い過ぎと鎌を向けられた恐怖で泣きそうだ。キャロは小さくなったフリードと一緒に降りてきたところだった

「あゝ、やりすぎたごめん」

「もお！次からは気をつけてね？」

「はい・・・」

模擬戦は時谷の勝利で終わるがこの後なのはにこってりOHA
NA SIをくらった時谷であった

next strike・・・

strike 9（後書き）

くりふぁ「やっと終わった・・・」

時谷「戦闘描写ホントに苦手だな」

くりふぁ「周りの作品みて勉強しているんだが、なんかうまくいかないな」

時谷「ま、頑張れ、さて次回はやっとホテル・アグスタか？」

くりふぁ「いや、その前に1話挟む・・・かも？」

時谷「曖昧だなww」

くりふぁ「さて、次回の更新は明日の 予定 です」

登場武器宝具

【十二の試練】

登場作品：Fate¥stay night

概要

上記の作品のキャラ、バーサーカーのサーヴァントが使用する宝具。
Aランク未満の攻撃の無力化と十二回の蘇生能力を持つ宝具

【エボニー&アイボリー】

登場作品：Devil May Cry

形状

白銀と黒銀の双銃、白銀がアイボリー、黒銀がエボニー（だったか

な？
)

【ブラットサイズ】

登場作品：ブレイブBLAZBLUE コンティニウムCONTINUUM シフトSHIFT

使用キャラ：ラグナ「ザ」ブラッドエッジ

概要

白い幅広の刀身に黒い峰を持つ大剣。ラグナの師である六英雄のひとり獣兵衛の明友ブラッドエッジの形見

strike 10（前書き）

くりふぁ「どうもくりふぁです。更新が遅れてしまいすみません。
あと、によほほさん感想ありがとうございます！これからも頑張
つていきます！」

時谷「今回の話は？」

くりふぁ「いや〜サウンドステージ01をやろうと思ったんだけど、
聞いたことないし、ホテル・アグスタやりたいし」

時谷「個人的な願望かよ・・・」

くりふぁ「それじゃ」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikeS〜護る
為の力〜始まります」

F Wメンバーとの模擬戦の次の日、時谷ははやてに呼びだされていた

「シャルさん？ソレハ一体ナンデスカ？」

嫌な予感がした俺は思わず片言になる。その手にはアタツシユケースがある

「（そう言えば、ホテル内警備ということはなのは達はドレス姿だった、ということは）」

「はい、これ。時谷君のお仕事着よ」

シャルがケースを開けると、灰色のスーツが入っていた

「これを着ると？俺に？」

「「うん！」」

「・・・なんでさ」

思はずでた一言だった

場面は変わり、ホテル・アグスタロビー

「なのはたち遅いな、そんなに時間かかるか？」

『女性は基本的に時間がかかるものなのですよ』

「そんなもんなのか？」

『そんなものです』

俺がエクセアとそんな会話をしていると

「時谷く〜ん！」

後ろから呼ばれて振りかえると、そこには桃色のドレスを着たなのは、黒をベースにしたドレスのフェイト、そして白を基調としたドレスに身を包んだはやてがいた

「これは、皆随分と似合ってるな」

「ありがと時谷君」

「時谷も似合ってるよ」

「そうか？こんな服あんまり着ないからな」

フェイトに誉められ、若干鼻の下をのばす時谷、それを見たなのはとはやては

「（なんだろう、このもやもやした気持ちは何？よくわからないけど、後でお話なの！）」

「（あかんなあ、なのはちゃんが顔が悪魔モードにシフトしてるや

ん」

そんな事を考えていた、時谷はO H A N A S I フラグがたった。哀れな(b y 作者)

時谷 s i d e e n d

「クラールヴィントの反応！シャーリー！」

「来ましたよ、ガジェット？型30、35！」

「ガジェット？型4、5！・・・え？？型反応多数！6、7、8、9、10！」

屋上でセンサーを見ていたシャマルがロングアーチに通信を入れる、ガジェットの数を聞いたティアナの焦りを加速させる

「（数なんて関係ない！）シャマル先生！私にもモニター、貰えますか？」

「わかったわ、クロスミラージュに直接送るわ」

「ありがとうございます！」

時谷 s i d e

「F W たちは大丈夫なのか？ガジェットが来ているみたいだが？」

「大丈夫だよ時谷君、ヴィータちゃんやシグナムさんもいるし」

安心しきっているのは達を見た俺は少しばかり苛立ちを感じていた。いくらシグナム達が強いといっても、数で攻められれば敵がFWたちに迫る事もある。実際この後ルーテシアによってFWたちの近くにガジェットが召喚されてしまう

「俺はFWの援護に行くからお前らはここにいろ！」

「え！？ちょっと時谷君！？」

驚くのは達に背を向け、走りだす。そしてエクセアをポケットから取り出す

ロビーからでて、周囲を確認すると既にガジェットが召喚されていた

「くっ！間に合え！エクセア、セットアップ！」

『セットアップ、スタンバイ』

濃緑の魔力光に包まれる時谷、光が弾けるとバリアジャケットを纏っていた。拳を前に構える。そして言葉を紡ぐ

「第666拘束機関解放！次元干涉虚数法陣展開！」

俺の体から魔力があふれ出す。目に見えるほど体の周囲を揺らめいている

「見せてやるよ、？蒼？の力を！^{フレイ}蒼の魔導書^{フルー}、起動！」

エクセアのカバーが開き、レンズに紋章が浮かびあがる

「さあ行くぞ！」

ガジェットが固まっているところに向け、飛行する

「間に合うか、思わずやつちやっただから時間かかったな」

「いつもより全体的に能力が上がっていますから、間に合うはずですよ」

「なら、いいんだが」

FWたちが見えてくると同時にシグナムたちも見えてきた。シグナムやヴィータの方は問題なさそうだが、やはりティアナたちは苦戦していた。

「型は戦い慣れているがやはりAMFが邪魔をして数が減らせずにいる」

「っ！あれは！」

ティアナがエリオとキャロに指示をだすと、スバルに何か言っている

「まさか、クロスシフトか！やばい、急がねえと！」

さらにスピードをあげようとするが、これ以上上がらない

「クロスファイヤア、シュート！」

ティアナの周りにあった魔力弾が一斉に発射される。発射された魔力弾はガジェットを撃ち抜いていくが、一発だけ外れて、回避行動

に移っていたスバルに飛んでいく。突然で防御も間に合わず、スバルに魔力弾が当たり、爆発した

「スバル！」

ティアナは後悔した。自分の魔法が仲間を傷付けてしまった。そんな現実がティアナに突き付けられる

「ふう、危なかったな。スバル」

「え？」

スバルは当たる瞬間に目を瞑っていた。だが、いつまでたっても痛みが来ない。恐る恐る目を開けてみると、目の前には黒いバリアジヤケットの背中が見えた

「おい！時谷！大丈夫か！？」

「ああ、問題ないさ」

俺の無事を確認したヴィータはティアナの方に向き直り

「ティアナ！この馬鹿！無茶したうえ仲間を撃ってどうするんだ！」

「あ、え、わ、わたし・・・」

「あ、あのヴィータ副隊長、今のもフォーメンションのうちで」

「バカ！今のは直撃コースだ！」

「まあまあヴィータ、スバルとティアナは裏手の警備に行つてくれ、あとは俺とヴィータでやるから」

怒鳴りつけるヴィータを収めつつ、ティアナに言つがティアナは俯いたままだ

「聞えなかったか？なら分かりやすく言つてやろう。邪魔だから裏手に行けと言つた」

「っ！」

いきなり口調を変えて話し出した時谷に驚き、かつ、浴びせられた言葉に怒りと、絶望が襲つてきた

「時谷さん！そんな言い方ないと」黙れ、お前にも言つたのだが、理解できなかったか？」

スバルの言葉を途中で遮り、ティアナの時と同じ口調で言い放つ

「分かつたのならさつさと言け、貴様らは邪魔だ」

時谷は未だ動こうとしないスバルとティアナを転送魔法でホテルの裏手び跳ばす

「ヴィータ、行くぞ」

「あ、ああ」

ヴィータは気押されながらも、一緒にガジェットを撃墜していく。

それからすべてのガジェットを撃墜すると、俺は一人で隊舎に帰って行った

隊舎に着いた俺は自分の部屋にいき、ベットに倒れこむ

「疲れた、この後は・・・模擬戦か」

『今はお休みください。マスター』

「ああ、お休み」

そう言つて目を閉じた俺はすぐに眠りにつく

『あなたをこんなことに巻き込んでしまった事を、謝らせてください。時谷君』

エクセアがそう言っていたのを薄れゆく意識の中で聞いていた

next strike.....

strike 10（後書き）

くりふぁ「さて、ホテル・アグスタ、いかがでしょうか？そして長くてすいません」

時谷「あんま蒼の魔導書、活躍しなかったな」

くりふぁ「いや、あの文が書きたかったのさ（キリッ）」

時谷「はいはい、さつさと予告しろよな」

くりふぁ「次回はティアナとの絡みだな」

時谷「それじゃまた次回！」

くりふぁ「次回の更新は、明日か明後日の予定です」

登場武器

【蒼の魔導書】
ブルー
ブレイブルー

登場作品：BLAZBLUE
コンティニウム
CONTINUUM

シフト
SHIFT

使用キャラ：ラグナ「ザ」ブラッドエッジ

概要

ラグナの右腕に宿っている強大無比な魔導書。魔導書と言っても本の形をしている訳ではない。その能力は他者から生命力を奪う事が出来る。時谷が使うものは生命力ではなく、対象の魔力を奪う

いつの間にか2万アクセスを超えてましたspecial!!!(前書き)

いつの間にかアクセス数が2万を超えていました

いつの間にか2万アクセスを超えてましたspecial!!

くりふぁ「いえ〜い！祝アクセス数2万超え！」

六課メンバー「おめでとうございます！」

くりふぁ「いや〜、いつの間にか超えてたんだ」

なのは「なんでできずかなかったの？」

くりふぁ「え〜とですね、今日初めてアクセス解析やったんだw」

時谷「今日が初めてってww」

フェイト「なんでこんなダメな作者何でしょう？」

ティアナ「なんでいきなりこんな事を？」

くりふぁ「ホントは11話を書いてたんだけど、間違えてブラウザ閉じちゃって・・・」

はやて「それがホントの理由かいな」

くりふぁ「だって、あともうちょいで完成だったのに、全部パーになっただんだ！」

時谷「だからって諦めんのか？」

某元テニス選手「なんでそこで諦めるだよ！もっと熱くなれよおお

「！」

なのは「きゃ！いきなり大きな声が」

フェイト「なんか周りが熱くなってきたね」

くりふぁ「さて、ここまでお送りしてきた2万アクセス突破記念special！！今日はここで開きます」

全員「これからも応援お願いします！！」

いつの間にか2万アクセスを超えてましたspecial!!!(後書き)

このアクセス数を糧にもつと頑張っていきたいと思います

strike 11（前書き）

くりふぁ「感想の励ましを胸に、頑張ります！それと、プ キュア
の主人公の声優が水 奈々さんだったので歓喜しての投稿です」

時谷「なあこの作品のメインヒロインって誰なんだ？」

くりふぁ「一応、高町なのはだな」

時谷「ゆかりんかよ」

くりふぁ「だってなのは可愛いじゃん」

時谷「でも今回の話って…」

くりふぁ「はい！そこまで〜！今回のお話はなのはとティアナたちの
模擬戦だな」

時谷「流したな。それじゃ」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikeS〜護る
為の力〜始まります」

くりふぁ「因みに”一応”のヒロインです」

「さて、どこに居るかな？」

ホテル・アグスタの事件から、数日がたった。記憶が確かなら明日にはあの模擬戦がある

「お、いたいた」

隊舎横の林でティアナとスバルが練習していた

「何やってんだ？スバル、ティアナ」

「あ、時谷さん！」

「どうしたですか？こんな朝早くに」

「そうだな。新入りからのアドバイスだ」

「「アドバイス？」」

「ああ、無茶してる子供にな」

「子供！？確かにあなたより年下ですが、実戦経験は私達の方が上です！あなたに言われる事なんてありません！」

反発して言い返すが、時谷は冷静に言い返す

「じゃあ、あの”ミスショット”はその実戦経験の結果か？ならそ

んなもの、自らの実力とは言えないな。だから俺が強くてやろう」

「つよ…く？」

「ああ、お前だけじゃない、スバルとエリオ、キャロもだ」

「ホントですか！？時谷さん！」

強くしてやる。その言葉に目を輝かせながら詰め寄ってくる

「ただし、お前らのデバイスリミッターが一段階解除されてからだ」

「なんで、今じゃないんですか！？私は今、強くなりたいんです！」

「今のティアナに教えても無駄だ。今日の夜にでもお前が強くなりたい理由をなのは話してみろ、そうすれば今お前がどんなに馬鹿なことをしているかがわかるだろうな」

そう言った俺はスタスタと立ち去っていく。後ろではまるで俺など来なかったかのように練習が再開されていた

「ありゃ、話さないな。はあ魔王フラグ確定か…俺はどうすればいい？エクセア」

『マスターがしたいようにすればいいと思います』

「そうか、俺のしたいように…か」

じゃあ、ばつちり介入するか。いくらなんでも”あれ”はやりすぎだしな

そして、ティアナはなのはと話をすることなく、模擬戦の日を迎える

「それじゃ、2on1で模擬戦するよ！」

「「はい！」」

なのは達が模擬戦を開始している時、ヴィータやエリオ達はビルの屋上で模擬戦を見ていた

「ごめん遅れちゃった。もう模擬戦始まって？」

そこにフェイトが遅れてやってくる

「今はスターズの番」

「そっか、ホントはスターズの模擬戦も私がやろうと思ったんだけど」

「なのはの奴訓練密度濃いからな、そろそろ休まないと」

「なのは、部屋に戻ってもモニターに向かいっぱなしなんだよ？皆のフォーメーションを何度も確認してるんだよ」

「ホントに僕たちの事を見守ってくれてるんですね」

「ほんとに」

「（だが、その思いはエリオ達には伝わってるが、ティアナには伝わっていないぞなのは）」

「お、クロスシフトだな」

ティアナがクロスファイヤをなのはに放つが、違和感を覚えた

「なんかキレがなえな」

「うん、コントロールはいいみたいだけど？」

確かにコントロールはいいのだが、如何せんスピードがない

すると、クロスファイヤを避けていたなのはにスバルがウイングロードを展開して攻撃を仕掛ける

「っ！フェイクじゃない！」

フェイクだと思っていたスバルがフェイクではないと気付いたのはは、アクセルシューターを展開してスバルに向かって撃つ

「うおお！」

ズバルは自分に向かってくるアクセルシューターを回避せずにプロテクションを張って防ぐが、数発防ぎきれずにかすが関係なしに突っ込む

「はあ！」

勢いをつけて殴り掛かるが、アクセルシューターで減速を余儀なくされて威力が落ちていてなのはの防御を破れずに弾かれる

「ダメだよスバル！そんな危ない軌道」

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますから！」

その様子を屋上で見ていた他のメンバーは

「あれ、ティアナさんがいませんね？」

「どこにいったんだろ？」

すると、なのはの後ろに円状に展開されたウイングロードを駆け上がっていくティアナがいた

「（装甲を斬り裂いて！）一撃必殺！てええい！」

「（あの馬鹿どもが）」

再度突撃を仕掛けてきたスバルの拳とティアナの魔力刃がなのはにあたり、爆発する

「なのは！」

フェイトが叫ぶ

「（はあ、やれやれ、エクセアセットアップ）」

『All right』

エクセアを起動しバリアジャケットを装着する

「ん？どうしたの時谷？」

いきなりデバイスを起動した俺にフェイトが質問するが、俺は答えずになのは達の方角を見る

そんななかのはたちは

「どうしちゃったのかな二人とも…模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？
…訓練だけまじめにやって、本番でこんな無茶するんじゃない、訓練の意味ないじゃない。…私の訓練、私の教導、そんなに間違ってる？」

「え、あ、あの」

「くっ！」

唖然とするスバルを放置してティアナはダガ モードを解除して、
反対側のウイングロードに着地してカードリッジを二発ロードする

「私はもう傷つけないから！強くなりたいんです！」

ティアナは砲撃の準備をするが、それより早くなのはが人差し指を
ティアナに向ける

「少し…頭、冷やそうか」

「うわぁ！ファントムブレイッ！」

「クロスファイヤ、シュート」

ティアナより先に撃ったなのはの砲撃がティアナに直撃する

「ティアア！」

スバルはティアナを助けに行こうとするが、身動きが取れなくなる

「バインド！？」

なのはの方を見ると、色のない瞳でスバルを見ていた

「そこで見てなさい」

普段のなのはからは想像もできないような冷たい言葉がスバルに突き刺さる。そう例えるならホテル・アグスタの時の俺のような冷たさだ

その様子を見ていた俺は行動を起こす

「これだから子供は・・・ボソッ」

そう呟くと、その場から消えた。そう”消えた”のだ

「え？」

唯一その呟きを聞きとれたキャラは俺の方を見るがそこには俺は既
にいない

すでにボロボロのティアナは薄れている意識の中でなのはを見ると、もう一度クロスファイヤを撃とうとしている。ティアナは覚悟して眼を閉じる

「クロスファイヤ、シュート」

そして、二度目のクロスファイヤが放たれた。そして爆発した

「馬鹿か？貴様らは」

「え？」

覚悟して閉じた眼を開けると、黒いバリアジャケットの背中と大きな七枚の花弁を持つ花の様なものが見えた。その七枚の花弁を持つ花の様なものは【織天覆う七つの円環】^{ロ・アイアス}かの英雄アイアースが持っていた城壁7枚分の堅さを持つという大きな花を模った楯

「と・・き・や・・さん？」

ふらふらしているティアナを抱えあげ、スバルの側に着地する。そしてスバルのバインドを解除して、ティアナを渡す

「スバル、ティアナを医務室に連れて行け」

「は、はい」

スバルはティアナを連れて医務室に向かった。そしてなのは（魔王）の方を見る

「なんで邪魔するのかな？時谷君…」

「なに、自ら踏み出そうとせぬ子供に少しばかり説教を、と思っ
てな」

「子供？私が？あれはティアナが模擬戦で無茶するか」「お前は止
められたはずだ。気付いていたはずだ。朝に別で練習している事に、
そしてそれが訓練に支障をきたしていたことに」…それは「

「それに気づいていながら止めなかったお前は教導官”失格”だな」

「っ！」

”失格”その言葉はなのはに深く突き刺さる

「時谷君にないがわかるの！」

怒鳴りながらディバインバスターを撃ってくるが、再度”織天覆う
七つの円環”^{アイアス}で防ぐが、耐えきれず花弁が一枚散る

「わかるわけないだろ？お前が何も語らず、ただ相手が分かってく
れると慢心しているかなら。まあエリオやキヤロの様な純粋な子供
には伝わったようだが、ティアナのような難しい年頃には、自ら歩

み寄らねばいけないと何故分らない！」

”織天覆う七つの円環”^{ロー・アイアス}を破棄する。そして俺が持つ希少能力^{レアスキル}を発動する

「^{メタルギア}【鋼鉄歯車】」

そう言った瞬間に俺の体は光に包まれる

「^{ギア イグニッション}歯車起動、【ジェフティ】！」

光が収束して、弾けるとそこには機械の鎧を纏った時谷がいた

爪先が尖り、指先は獣のように鋭く伸びている。背中には羽のようなユニット。肩から手首にかけてまで、灰色のフレームで包まれている。左手の肘に六角形の板の様なものがついていて。そして右手には手首から肘まで伸びる大きな剣

「アクセルシューター！シュート！」

なのはは驚きつつも、アクセルシューターで様子見をするが、時谷が左肘のパーツを自らの前に構える。そしてアクセルシューターが時谷にあたりそうな所で障壁に阻まれる

「無駄だ、そんな攻撃じゃ俺には通らない」

「くっ！デイベイン・バスター！」

「無意味な事を」

アクセルシューターがダメならと思ったデイベインバスターも防がれる

「なんだ、エースオブエースもこんなものか」

「うるさい！うるさい！時谷君になにが分かるのよ！」

そう叫ぶと、大きく時谷から距離を取ってレイジングハートを掲げる

「全力、全開！スターライト！」

「バカが、リミッターの掛った状態でそんな砲撃を撃ったらどうなるのかわかんねえのか！」

グツと力を溜めるように全身に力をいれると、時谷の後ろの空間が歪む

「ゼロ・シフト 起動！」

ギョオン！という音とともに、時谷が消える。そんなことお構いなしになのは自身が持つ最強の砲撃魔法を発射する

「ブレイカアア！」

デイベインバスターとは比べものにならないほどの砲撃が放たれる

「だから、馬鹿だというんだ」

次に現れたのは、なのはの後ろだった

「いつの間に!？」

「お前も少し、頭を冷やせ」

右手に畳まれていた剣を展開して、なのはの首筋に叩きつける。

「がっ！」

脳を揺さぶられ、意識が遠のいていくのは。その瞳が俺を見ている

n e x t s t r i k e

strike 11（後書き）

くりふぁ「やっと終わった…」

時谷「なあ、なんでジェフティ？」

くりふぁ「カッコいいから」

時谷「単純明快だな、でもいきなりゼロシフトかよ。チートすぎるだろ」

くりふぁ「でもこれ以外考えられなかったんだよ。しょうがないじゃん」

時谷「ベクターキャノンでもよかったんじゃない？」

くりふぁ「それでもベクターキャノンだとチャージに時間かかるし、それ以前にZ・O・E・シリーズ知ってる人少ないような気がしてきた」

時谷「まあ、それは読者次第だな。それで次回は？」

くりふぁ「そうだな、なのはとティアナの仲直りとなのはの過去だな」

時谷「それじゃ次回の更新は？」

くりふぁ「リアルが忙しく、三日後か四日後になります」

登場武器

【織^{ロー・}天覆う七つの円環^{アイアス}】

登場作品：F a t e / s t a y n i g h t

使用キャラ：アーチャー

概要

アーチャーが持つ中でも最強の部類に入る楯。形状は淡い桃色の花弁が七枚開いている。その一枚には城壁一枚分の防御力を持つ。時谷のは発動する時に込める魔力で防御力は変わっていく

【鋼鉄歯車^{メタルギア}】

概要

時谷が持つ希^{レア}少^{スキル}能力のひとつ。能力はアニメ等のロボットに変身することができる。変形機構搭載のロボにもなれるが、変形は出来ない

博識な読者の皆様はお分かりだと思いますが、名前の由来は”アレ”です

Strike 12 (前書き)

くりふぁ「どうもくりふぁです」

時谷「ちよつと間が空いたな」

くりふぁ「すいませんリアルが忙しくて」

時谷「それじゃ、始めるか」

くりふぁ「今回は、なのはと時谷の仲直りだな」

時谷「あれ、ティアナとの会話は？」

くりふぁ「まあそれは見てのお楽しみという事で」

時谷「それじゃ」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikeS」
護る
為の力へ始まります」

「おっと」

気絶して落ちそうなのはをキャッチする。なのはを抱えてフェイトたちのところに戻る

「なのはは大丈夫なの？」

フェイトは焦りながら時谷に聞く、それに柔らかな笑みを浮かべて

「大丈夫、気絶してるだけだし」

なのはをエリオとキャロに頼んで医務室に運んでもらう

「なんであんなことしたんだよ？」

ヴィータはいきなり飛び去った理由を聞いてくる

「あゝ、そうだな、理由を言うならやりすぎだち思ってたからだ」

「やりすぎ？」

「ああ、一発目はまだしも、二発目は余計だ。あれじゃ下手したらティアナにトラウマにだってなるかも知れない、それに」

「それに？なに？」

「なのはにあんな事してほしくなかった」

「・・・・・・・・」

沈黙がビルの屋上を支配する。それからしばらくして

「それじゃ、俺はなのはの様子を見に行ってくるからな」

「待つて！私も…私も行く」

長い沈黙を見越して俺がなのはのいる医務室に向かおうとすると、
フェイトも行くと言い出す

「分かった。ヴィータはどうする？」

「あたしはシュミレタの後始末をしてから行くよ」

「そうか、後で来いよ？」

そう言つてヴィータの頭を撫でる。すると、顔を真つ赤ににして睨む

「頭を撫でるな〜！」

「悪い悪い、じゃあな」

いまだに顔を真つ赤にして怒っているヴィータをスルして、訓練
場を後にする。その頃なのはは…

時谷 side end

なのはside

「うつ、あれ？私一体…」

少しだるい体を起こし、あたりを見渡すと、どうやら医務室のようだ

「なんで医務室に……そっか、墜ちたんだっけ。なんで時谷君は最後にあんな、あんな」

悲しい顔をしたんだろう…

私がそんな事を考えていると、医務室の扉が開いてエリオとキャラの二人が入ってくる

エリオやキャラのような純粋な子供には伝わったようだが、ティアナのような年頃には自ら歩み寄らねばいけないと何故分らない！

時谷君に言われた言葉が胸にグサリと突き刺さる

「なのはさん！？どうしたんですか！どこか痛いんですか？」

「大丈夫ですか？」

「うん、ごめん。大丈夫だよ…でも、ちょっと一人にしてくれないかな？」

二人に言う。エリオとキャラは顔を見合わせた後、医務室から出て

いく。そして自分が寝ているベットの横のベットには自分が撃墜した自分の部下であり、教え子のティアナが寝ていた。

なんで、私は聞かなかったんだろう。この子が強くなりたがる理由を、いや知っていた。この子が力を求める理由を、でもこの子は私の教導の意味を知らないんだ。なのに自分の想いだけ押しつけて

そんな自暴自棄になっているなか、医務室の扉が再び開く。そこには自分を心配して来たであろう親友と、今は一番会いたくない人物がそこにいた

なのはside end

時谷side

時は少し遡り

「ん？、エリオにキャラか、どうしたんだ？」

フェイトと一緒に医務室に向かっていた俺は、医務室から出てきたエリオとキャラに声をかける

「あ、時谷さん」

「えーとですね、なのはさんが一人にしてほしいと言っていたので」

「そうか、ありがとう」

礼儀正しく御辞儀をして去っていく二人を見送ったあと

「一人になりたいんじゃないよね。また後で来ようか？」

フェイトが提案するが、そんな提案を無視して進む

「あ、待ってよ時谷！」

先に歩いている俺に小走りで追いつく。そして、医務室の扉を開いて中に入ると、こちらをじっと見るなのが居た

そして時は戻り

「なのは、怪我はない？傷とかついてない？」

親友が心配なのだろう。なのはに詰め寄り、いろいろ聞いていく

「だ、大丈夫だよフェイトちゃん！なんともないから！」

「ホントに？ならいいけど」

なのはが大丈夫なのを確認すると、フェイトはなのはから離れる

「なのは」

俺が声をかけると、ビクッと肩を震わせる

「まずは、謝らせてくれ。さっきはすまなかった。言いすぎた」

「ふえ？な、なんで時谷君が謝るの！？」

「いや、なのは気持ちも考えずにあんな言葉を…」

「そんな事ないよ！私がティアナに勝手に想いを押しつけてただけだし！」

「それでも、剣を叩きつけたし！」

「私だって！ディバインバスターやスターライトブレイカー撃っちゃったし！」

「俺だって！」

「そんな、私だって！」

その後、しばらく言い合いをした後

「はあ、なんで言い合いしてたんだっけ？」

「時谷君が、いきなり謝るからだよ？」

「そっか、自分でやっというてなんだが、俺のやった事を許してほしい」

「うん、分かったよ。私は時谷君を許してあげる。その代わりに」

「その代わり？」

「私がしたミスを、過ぎさってしまった事だけど許してほしいな」

なのは顔をに笑みを浮かべながら言う。フェイトはいつの間にか居なくなっていた

「分かった、俺はなのはを許すよ。でも、ちゃんとティアナと話すんだぞ？」

「うん」

「じゃあ、俺は部屋に帰るから」

「うん、またね」

そういつて出て行く時谷を見送るなのは

そんな会話をしている時谷となのはの横で寝ていたティアナはという

「（もう、こんな話されてたら起きられないじゃないですか！私はいつ起きればいいんですかあ！）」

そんな心の声をあげていた

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.
.

strike 12 (後書き)

くりふぁ「今回はちょい短いかな？」

時谷「なあこれって急展開すぎね？」

くりふぁ「書いてて思ったけど、お前の喋り方が安定しないな」

時谷「いや、それ以前にこれ、フラグ立ったよな？」

くりふぁ「さて、次回のお話はとうとう彼女が登場です」

時谷「また、流しやがって」

くりふぁ「次回の更新は大体三日後か四日後になります」

strike 13 (前書き)

くりふぁ「どうもくりふぁです！PVが3万を超え、ユニークが5千を超えました！」

時谷「こんな作者ですが、応援ありがとうございます」

くりふぁ「さて今回はなのはの過去話です

時谷「あれ？彼女の登場はどうした」

くりふぁ「ああ、でもあれに行く前に、なのはの過去をやっておきたいなのさ」

時谷「それじゃ」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikers」
護る
為の力へ始まります」

医務室からでた時谷は、ロビーに向かった

「スバルは、どこに居るかな？」

ロビーに着いてスバルを探してロビーを見渡すが、スバルはいなかった

「どこに行ったんだ？」

おそらく居るであろう場所は分かっているのだが、そこには行けない理由があった

「さすがに、女子寮に入るのは気が引けるしな」

どうするかと考えていると、デバイスルームからスバルが出てくる

「ん？おいスバル！」

「あれ、時谷さんじゃないですか、どうしたんですか？」

デバイスルームから出てきたスバルに声をかける

「ああ、お前にちょっと用があつてな」

「私に、ですか？」

「今日の朝、俺はなのはに話に行けって言ったのになんで行かなか

「ったんだ？」

朝のような刺々しい雰囲気ではなく、いつもの感じで聞く

「それは、ですね。私は行こうと言ったんですけど、ティアナが行かなくていいって言っちゃって」

「そうか、ありがとう」

スバルに礼を言ってから自室に戻る。そして、夜

ビーー！ビーー！

敵の出現を知らせるアラートが六課に鳴り響く。復帰したなのはを含めた隊長たちとFW達は屋上のヘリポートに集まっていた

「今回は空戦だから私とフェイト隊長、それとヴィータ副隊長で行くね。皆は六課で出動待機」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

「」「はい！」「」

「はい」

ティアナ以外は大きく返事をするが、ティアナ本人は俯きながら小さく返事をする。そんなティアナを見たなのは

「ティアナは待機から外れところか」

「そうだな、今日は魔力も体調もすぐれないだろうしな」

なのはに同意するヴィータ。それを聞いたティアナは顔をあげる

「言う事を聞かない奴はいらないってことですか」

「自分で言ってるわからない？ 当り前の事だよ？ それ」

「現場での指示はちゃんと聞いてます！ 訓練だってサボらずやります！ それ以外の場所での努力まで、教えられた通りじゃないとダメなんですか！？」

その言葉を聞いたヴィータがティアナに詰め寄ろうとするが、なのはがそれを止める

「私は、なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャラや時谷さんみたいな希少能力レアスキルもない！ 少しくらい無茶したって、死ぬ気でやりやなきや強くななんてられないじゃないですか！」

そうなのはに叫ぶティアナに、傍で見ていたシグナムがティアナの胸倉をつかんで拳を放つが

「何をする。 暁」

その拳を時谷が止める

「おい、なにやってんだ」

「このような馬鹿はなまじ付き合ってやるからつけあがるんだ」

「お前も馬鹿だよ!」

空いている左手に魔力を込めて、シグナムに向けて放つ

「くっ!」

咄嗟に障壁を張るが、それでも吹き飛ばされた

「「シグナムノ(さん)!」」

「おい!ヴァイス!もう出られるな!?!」

「乗り込んでいただければいつでも!」

「なのは、行け」

「でも、時谷君、シグナムさんが」

「さっさと行けって言うてんだろ!聞えねえのか!?!」

啞然としているのは達をヘリの中に強制転移させ、ハッチを閉める

「行け!ヴァイス!」

俺の言葉と共にヘリが離陸する。それを見送ると

「いきなりだな。暁」

立ちあがったシグナムが俺を睨む

「ああ？こんな精神状態が不安定な奴を殴ろうとする奴を馬鹿と呼ぶになんて呼ぶんだ？それにティアナもだ、お前もいつまでガキでいれば気が済むんだ？おい、まだエリオ達の方が大人だぞ」

「貴様っ！」

「時谷さん！」

シグナムが何か言おうとしたが、スバルに遮られる

「さっきのティアの物言いとか、それを止められなかった私はダメでしたけど、だけど、自分なりに強くなるうとするのとか！それに向かって努力する事って、そんなに行けない事なんですか！」

スバルが涙目になりながら、俺に言うが、それを俺は冷めた目で見る

「シャーリー、いるんだろ？出て来てもいいぞ」

「なんだ、ばれてたんですか」

ヘリポートの階段を上がってくるのは、六課のデバイスマイスター兼ロングアーチスタッフのシャーリーだった

「自主練習はいいことだし、強くなる事の努力もすごくいいことだよ?」

「持ち場はどうした?」

「メインオペレートはリイン曹長が居てくれますから、なんかもう見てられなくて」

「それじゃ、全員ロビーに行け。そこですべてを知るといい」

「そうですね。私が説明します。なのはさんの事と、なのはさんの教導の意味」

場所は変わり、六課のロビー。そこにはFWとシャーリー以外にシヤマルと時谷がい。そしてシャーリーが語りだす

「昔ね、一人の女の子が居たの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった」

そこまで言うと、ロビーにモニターが現れる。そこには茶色の髪を短くツインテールに結っている女の子が映っていた。当時9歳のなのはだ

「朝、友達と一緒に学校にいつて、暖かい家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送る筈に子だった。だけど、事件は起こったの」

モニターには傷ついたフェレットの様な生き物となのはが映っていた

「魔法学校に通っていたわけでも、特別なスキルがあったわけでもない」

映像は進み、白いバリアジャケットを纏ったなのはに黒い怪物が襲いかかる。次には獣の形をした怪物がなのはを襲っていた

「たまたま魔法を得て、たまたま魔力が大きかったってだけのたった9歳の女の子が、魔法と出会ってからわずか数カ月で、命がけの実戦を繰り返したの」

映像には、金髪のツインテールの女の子とデバイスをぶつけ合うなのはの姿があった。その映像を見たエリオとキャロは

「これ」

「フェイトさん？」

驚くスバル達

「当時のフェイトちゃんは家族環境が複雑だね。あるロストロギアを巡って、敵同士だったんだって」

シャマルが言うと、映像にはボロボロのフェイトと、一人の女性が映っていた

「この事件の中心人物はテストロッサの母、その名のとって、プレシア・テストロッサ事件。またはジュエルシード事件と呼ばれている」

そして、映像は海上での決戦に移っていた。そこにはフェイトに向けてスターライトブレイカを放つのはとそれを受けるフェイトが映っていた。

「収束砲！？こんな大きな…」

「たった、9歳の女の子が…」

「ただでさえ、大威力砲撃は体に酷い負担が掛るのに」

それを見たエリオとスバルにキャラが呟く。ティアナはそれを啞然として見ていた

「その後もな、さほど時もおかず戦いは続いた」

「私達が深く関わった、闇の書事件」

「襲撃戦での、撃墜未遂と敗北」

なのはの強固な防御が砕かれ、ダメージが限界を超え、リアクティブパージされるバリアジャケット

「それに打ち勝つために選んだのは…当時はまだ安全性が危うかったカードリッジシステム使用。そして、体への負担を無視して自身の限界値を越えた出力を無理やり引きだすフルドライブ、エクセリオンモード」

エクセリオンモードを起動して、銀髪の女性に突撃するなのは

「誰かを救うため…自分の想いを通すための無茶をなのはは続けた」

「……」

「だが、そんな事を繰り返して、体に負担が生じない筈もなかった」

「事故が起きたのは、入局2年目の冬」

場面は変わり、雪が降り積もり、黒煙が上がる場所に変わった

「異世界での捜査任務の帰り、ヴィータちゃんや部隊の仲間たちと一緒に出かけた場所。不意に現れた未確認体、いつものなのはちゃんならきつと何の問題もなく味方を護って落とせる筈だった相手」

砕かれたレイジングハートと、白いはずのバリアジャケットを赤く染めたなのはと、泣きながらなのはの名前を呼ぶヴィータ

「だけど、溜まっていた疲労、続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃった。その結果が…これ」

シャルマルが手元のボタンを押すと映像は切り替わり、包帯だらけで人工呼吸器をつけて眠っているなのはが映る

「なのはちゃん、無茶して迷惑かけてごめんなさいって私達の前では笑ってたけど」

無理やり立ちあがろうとするが、失敗、看護師に補助されてやっと車いすに座る。そして、棒を掴んで必死に歩くりハビリをするのはだが、足をつまずかせて転んでしまう

「もう飛べなくなるかもとか、立って歩くことさえ出来なくなるかもって聞かされてどんな想いだっただか」

俯くスバル達を見ながら、シグナムは言う

「無茶をしてでも、命を賭けてでも譲れぬ戦いの場は確かにある」

そこまで言うとしグナムはティアナを見つめ

「お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を賭けてでもどうしても撃たなければならぬ状況だったか？」

その言葉を聞いたティアナの脳内には先の事件での光景が思い出された。シグナムはまた、語りだす

「訓練中のあの技は、一体誰の為の、何の為の技だ？」

顔をあげていたティアナがまた俯く

「なのはさん、皆のさ自分と同じ思いさせたくないんだよ。だから、無茶なんてしなくてもいいように、絶対絶対皆が元気に帰って来られるようにって。本当に丁寧に一生懸命考えて」

シャーリーはそこでスバル達を見渡して

「教えてくれてるんだよ？」

そう言ったシャーリーはスバル達をもう一度見渡した後、シャマルやシグナムと一緒に去って行った

「シグナム、さつきはすまなかつたな」

その話を黙って聞いていた俺は去り際のシグナムに念話で先程の事を謝罪する

「いや、気にするな」

そう返事をして、シグナムは去っていく。残ったスバル達は今だ俯いているティアナを心配そうに見守る

「ティアナ」

俺は俯いているティアナに近づき

「え？」

右手を頭の上に置いて撫でる

「そろそろ、なのは達が帰ってくるころだろ？帰ってきたらなのはとちゃんと話すんだぞ？」

「……はい」

ティアナの返事を聞いた時谷は撫でていた手を下すと、ティアナは立ちあがり、走っていく

「さて、お前らも休め！」

残ったスバル達に部屋に戻るように促して全員を部屋に帰す

「さて、明日が楽しみだな」

そう言っつて、俺も部屋に戻り眠りに着く

翌朝、眼が覚めて訓練場に行く

「お、やってるな。それに、大丈夫そうだな」

そこには昨日より、元気な顔で訓練をするティアナが居た

「明日あたりに第一段階解除かな？それじゃ行ってくるか」

そう言っつて、俺は転移する

n e x t s t r i k e

strike 13 (後書き)

くりふぁ「さて、いかがでしたでしょうか？今回は頑張った方です」！

時谷「よくセリフ憶えてたな」

くりふぁ「ふふふ、すごいだろ！」

時谷「で？ホントは？」

くりふぁ「アニメ見ながら書きましたm(_____)m」

時谷「素直でよろしい」

くりふぁ「さて、次回こそは出てきます！次回の更新はまた三日後か四日後になります。」

strike 14 (前書き)

くりふぁ「更新が大幅に遅れて申し訳ありません！後輩の指導や自分の練習と試合が続いてしまい、本当にごめんなさい！」

時谷「皆さま、こんな作者ですが、どうか見捨てないでください。お願いします」

くりふぁ「さて今回のお話は」

時谷「時谷が転移した先とは、そして運命は動き出す」

時谷・くりふぁ「魔法少女リリカルなのはStrikers」
護る
為の力へ始まります」

転移したのは管理局本局。俺が本局に来るには初めてではなく、もう何度か足を運んでいる。その目的は

「お、時谷来たのか」

「ああ、クロノか」

本局の大廊下を歩いていると後ろから黒い提督服を着た男が声をかけてくる。彼はクロノ・ハラウン、フェイトの義兄で管理局本局の総務統括官であるリンディ・ハラウンの息子だ

「おいおい、ここではクロノ提督って呼んでくれって毎回言ってるだろ？」

「これは、失礼いたしました」

いたずらな笑みを浮かべて御辞儀をする時谷にクロノも笑みを浮かべながら

「はは、やっぱりちゃんとされると何か違和感があるな。やっぱり普通にクロノでいいさ」

「そうか？じゃあそうさせてもらっつよ」

「今日は何しに来たんだ？」

「分かってるくせに」

「ばれたか、まあついてこい」

そのまま二人は廊下を歩いて行くと、ひとつの部屋にたどりつく

「さて、着いたぞ」

部屋のドアを開けるとそこには、三人の老人がいた

「なあクロノ？」

「なんだ？」

「どうしてこうなった？なんで伝説って言われてる三提督がいる訳？」

「知らん、僕も連れて来いと言われたただだからな」

そこには、レオーネ・フィルス法務顧問相談役 ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥 ミゼット・クローベル本局統幕議長、管理局の黎明期を支えた伝説に三提督だ

「すまんね、わざわざ来てもらって」

「いえ、しかしなんで私がここに呼ばれたのですか？」

時谷は本局には入局するために足を運んでいた。そこでクロノと出会って知りあったのだ

「君が入局したいと聞いたのでね。その手助けをと思ってね」

「その代わり、俺に何をしろと？それほどの事をくれるです。それなりの事を要求するんでしょね」

そう言つてレオーネ達を見ると、苦い顔をしていた

「やつてもらふことは今と変わらんよ。機動六課に協力してくれないかな？君の力の事は知っている」

「そこまではれてるならしょうがない、分かりました。取引成立ですが、ひとつ条件があります」

「条件？」

「はい、条件ですが
ですか？」

なんですが、いかが

「ふむ、分かつたその条件を呑もう」

「では、自分はこれで」

時谷は三提督に御辞儀をして、クロノと共に部屋をでる。しばらく廊下を歩いていると、クロノが話しかけてくる

「それにしても、時谷も管理局員か。フェイトやなのは達を頼むぞ」

「任せとけ、全員護つて見せるさ」

「それじゃ、僕はこれで」

「ああ、またな」

そう言ってクロノは去って行った

「さて、帰るか」

時谷もまた、転移で六課の隊舎に転移する

時谷が転移で帰ってくると目の前にはスバル達がいた。何故か私服姿だった

「あれ？時谷さんどこ行ってたんですか？」

「ん？ああ、まあおいおい話すよ。それよりどこか行くのか？」

「はい！今日は休暇なので、クラナガンに遊びに行くんです！」

「そっか、気をつけてな」

スバル達を見送って廊下を歩いていると、前からはやてが歩いてくる。顔は笑顔だが、雰囲気というかオーラが違う

「なあ時谷君、ちょっとついてきてほしいんやけどええか？」

「いいけど、なんでだ？」

「まあまあええから」

はやての細い腕からは想像も出来ないほどの力で引っ張られる

「どこ行くんだった？はやて？」

そう言っている時谷を華麗にスル　してズンツズンツと進んでいく
はやて

「少し悲しい・・」

そうこうしていると、部隊長室前に来た。そのまま引きずられて中に入ると、初めて六課に来た時のシャマルとザフィーラ以外のメンバーが集まっていた。どうやらはやて以外は事情を知らないようで

「さて、時谷君」

時谷の手を離れたはやと他の皆も時谷の顔を見る

「これを説明してくれんやろか？ 暁 時谷 一等空尉？」

[illegible]

「ほっ」

シグナム以外は驚きの声をあげるが、シグナム自身は関心と同時に眼が輝いていた。このままではまた模擬戦を申し込まれかねない

「ど、どういふことなの！？時谷君！」

「そ、そうだよ！なんで時谷が階級なんて！」

「それにいつの間に管理局に入ったんだよ！」

「すべて説明してもらおうで！」

時谷に詰め寄ってくるのはたち

「いや、管理局に入ったほうが色々便利だと思ってちよくちよく本局に行く間にクロノと仲良くなって、そしたら今日三提督にあったら入局させてくれるて言うから六課の協力をする代わりに一等空尉の階級をくれと言ったらくれたんだ。そしたら提督たちがOKをくれて、今に至るんだ」

その後もクロノと出会った経緯などを話し終わり、なのは達が落ち着きを取り戻した頃合いを見計らい

「さて、改めて」

俺の言葉に皆まじめな顔になる

「暁 時谷一等空尉、これより機動六課に着任いたします！」

今までにないほどの真面目な顔で敬礼する

「ようこそ機動六課へ！」

はやてやフェイト達は普通に敬礼でかえすが、なのはだけは顔を赤らめながら敬礼していた

「どうしたなのは？顔が赤いけど、大丈夫か？」

「ふえ！」

顔が赤いなのはを心配して、なのはのおでこに自分のおでこをあてる。すると、なのはの体温がグングン上がっていく

「熱があるじゃないか！早くシャマルのところに行かないと！」

「だ、大丈夫だから！別に風邪とかじゃないよ！」

「本当か？ならいいんだが」

そんななのはと俺を見ながらはやてとフェイトは

「あゝ時谷君は天然さんなんかな？」

「なのはが、なのはが、なのはが、なの

」

と呟いていた

それからみんなで食堂に移動して昼食をとっているとテレビから、演説が聞えてきた。管理局の地上本部のトップ、レジアス・ゲイズ中将が地上の防備について演説していた

「このおっちゃんまだこんな事言ってるのな」

ヴィータが呆れるようにパンを口に運ぶ

「レジアス中將は昔から武闘派だからな」

シグナムも自分のパンを頬張る。フェイトもテレビ画面を見るとある事に気付く

「レオーネ相談役も一緒なんだね」

「お、ミゼット婆ちゃんもいるじゃん」

画面にミゼットが映ると嬉しそうに顔をあげる

「さて、そろそろか」

「ん？何が？」

俺の呟きに問いかけるのは

「まあ、見てなって」

すると、はやての方を見る、それからすぐにはやての前にモニターが現れる

「こちらライトニング4！緊急事態につき、現場状況を報告します！サードアベニューF-23の路地裏にてリックと思しきケース発見、ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人」

「女の子は意識不明です」

「指示をお願いします！」

モニターははやての前だけではなく食堂の壁に大きく拡大され表示されると、そこにはエリオに抱えられた金髪の小さな女の子がいた。それを見たはやてはすぐさまロングアーチのもとに向かい、なのはは指示を飛ばす

「スバルティアナ、ごめんお休みは一端中断」

「はい！」

「大丈夫です！」

モニター越しに返事をする

「救急にの手配はこつちです。二人はそのままその子とケースを保護、応急手当をしてあげて」

フェイトがキャロとエリオに指示する

「「はい！」」

ロングアーチのもとに辿り着いたはやても各所に指示を送る

「全員待機態勢！席を外している子たちは配置に戻ってな！」

「はい！」

「安全確実に保護するよ、レリックもその女の子も！」

「了解」

リンとシャーリーが返答する

「なのは、俺はどうすればいい？」

「じゃあ、女の子を保護した後、ヘリの護衛についてくれるかな？」

「了解した」

その後、なのはとフェイトそれにシャルルを乗せたヘリはエリオ達の所に向かう。俺は転移で行くからいい、と断った

「行くぞ、エクセア」

『はい、マスター』

エクセアの応答を聞いた時谷は転移する。場所はスバル達の所だ

一方その頃、少女の応急処置を終えたエリオとキャロはスバル達の到着を待っていた。すると

「エリオ、キャロ！」

路地の入口からスバルとティアナが走ってくる

「スバルさん！ティアさん！」

ティアナはキャロに抱えられている少女を見る

「この子か、また随分ボロボロに」

「地下水路を通ってかなり長い距離歩いて来たんだと思います」

「まだ、こんなにちっちゃいのに・・・」

スバルが悲しそうに眼を細める

「ケースの封印処理は？」

「それならキャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思います。それえから、これ」

エリオがケースを持ちあげると、ケースには鎖が巻きついていたが違和感がある

「ケースはもう一個あった？」

「いま、ロングアーチに調べてもらってます」

「隊長たちにシャル先生、リイン曹長がこっちに向かってくれるみたいだし、とりあえず現状を確保しつつ周辺警戒ね」

「・・・はい！（うん！）・・・」

「いい判断だなティアナ」

いきなり声が聞えた。声の聞えたビルの屋上から誰かが飛び降りてくる

「誰ですか！」

クロスミラージュの銃口をあやしい人影に向ける

「おいおい、俺だ」

「なんだ〜時谷さんか〜」

時谷の後ろからスバルの声が聞えたので振りかえると、マツハキヤリバーを構えていた

「なあスバル、それは洒落にならないだろ」

「あれ、時谷君、もう来てたの？」

路地の入口からシャマルとなのはとフェイトが歩いてくる。シャマルの手には救急セットらしき箱を持っている

「シャマルか、なるべく早く済ませてくれ」

「どうして？ガジェットは来ないんじゃないの？」

「ケースはもう一つあるから、それによってくるかも知れないからな」

「分かったわ」

「ごめんね皆、お休みの最中だったのに」

「いえ」

「平気です!」

「ケースと女の子はそのままヘリで搬送するから、皆はこっちで現場調査ね」

「」「」「はい!」「」「」

時谷と喋っていたなのもFW達に指示を出す

「それじゃ、危険な反応もないしバイタルも安定してるから、時谷君この子をヘリまで抱いてつてくれる?」

「俺が?まあいいけど」

そう言つて、少女に近づく

「よっこいしょつと(ヴィヴィオの登場と同時にナンバーズも出てくるな。たしかセインとクアットロとデイエチだったか?どちらにしろ、砲撃なんて撃たせないけどな。それにしても軽いな、こんな少女に計り知れないほどの重荷を背負わせているスカリエッティ、俺はお前を許さんぞ)」

少女を無事にヘリの運びこむと、時谷はそのままヘリに乗らずに

「俺は後ろからついていくから」

「うん、分かった」

なのはたちはへりに乗り込む

そしてロングアーチではガジェットの反応を感知していた

「ガジェット来ました！地下水路に数機つつのグループで、総数16、20！」

「さらに海上方面、12機単位が5グループ！」

報告を聞いたはやてとグリフィス

「多いな」

「どうします？」

「そやな・・・」

はやてが決断に悩んでいると、通信が入る

「スターズ2からロングアーチへ、こちらスターズ2。海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今、現場に向かっているそれからもう一人」

「108部隊、ギンガ・ナカジマです！別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？」

これを聞いたはやては嬉しそうな笑みを浮かべながら

「うん、お願いや。ほんならヴィータはラインと合流、協力して海上の南西方向を制圧」

これをラインは即答でかえす

「南西方向、了解です！」

「なのは隊長とフェイト隊長は北西部から」

「了解」

「ヘリの方はヴァイス君とシャルと時谷君に任せてええか？」

「お任せあれ！」

「しっかり護ります！」

「了解だ」

はやては次に待機していたギンガにも指示をだす

「ギンガは地下でスバル達と合流、道々別件のほうも聞かせてな」

「はい！」

指示を聞いて、ギンガは走りだす

そしてFW達は

「さて皆！短い休みは堪能したわね！」

「お仕事モードに切り替えてしっかり気合いれていこう！」

「「はい！」」

スバル達は己のデバイスをセットアップして地下水路におりていく。ビルの上で待機していたのはとフェイトも自らの愛機をセットアップし、空へと飛んでいく。ヘリではバリアジャケット姿のリインが出撃しようとしていた

「気をつけてね？」

「はいです！」

ヘリのハッチから外に出たリインは

「ヴァイス陸曹もよろしくですよ？」

「うっす！」

「ストームレイダーと時谷君も二人を護ってあげてほしいです！」

『Alright my friend』

「ああ、頑張つてこいよ」

「はいです！」

リインはヴィータのもとへ急ぎ、ヘリは六課に急ぐ。そんななか、スバル達との合流に急ぐギンガから全体通信が入る

「私が呼ばれた事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドなんです。丁度5、6歳の子供が入るくらいの、それと、近くに何か重いものを引きずった後のようなものがあつて、それをたどって行こうした最中、連絡を受けた次第です。それからこの生体ポッド、少し前の事件でよく似たものを見た覚えがあるんです」

「私も…な」

ギンガの言葉にはやてが同意する

「人造魔導師計画の素体培養機。これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素体として作りだされた子供ではないかと」

「人造魔導師って？」

ギンガの言葉に疑問を浮かべるキャラ

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に投薬とか、機械

部品の埋め込みで後天的に強力な魔力や能力を持たせる。それが人造魔導師」

それに答えたのは意外にもスバルだった。普段のスバルからは考えられないような難しい言葉をすらすら述べる

「倫理的問題はもちろん、今の技術じゃいろんな部分で無理が生じる。コストも合わない。だからよっぽどわかしている連中じゃないかぎり、手を出したりしない技術の筈なんだけど」

『Coming movement reaction perception and gadget drone』

そんななか、ケリユケイオンがガジェットの接近を知らせる

地下でスバル達がガジェットと戦闘をしている頃、空のなのは達も善戦していた

「おっし、いい感じだ」

「リインも絶好調です〜!」

「さっさと片付けて、他のフォーローにまわらねえとな」

「はいです!ん?」

リインはヴィータの背後から迫る機影を確認する

「あれは」

「ん？増援！」

そのころ、なのは達の方にもガジェットの増援が来ていた

「この反応…」

「くっ」

そしてはるか上空にはピッチピチのボディースーツにマントをつけた女が浮かんでいた。足元には魔法陣とは違うテンプレートと呼ばれるものを展開している

「クアットロのインヒューレントスキル【シルバーカーテン】、嘘と幻のイリュージョンでまわってもらいませよ」

ロンググーチでは異常な事態が発生していた

「航空反応増大！…これ、嘘でしょ！」

モニターの半分が赤い点で埋まっていた

「なんだ、これは！」

「波形チェック！誤認じゃないの！？」

すぐさまチェックを開始するがその結果は…

「問題、出ません！どのチェックも実機としか！」

「なのはさんたちも目視で確認出来るって」

報告を聞いたはやては立ちあがり、グリフィスの方を見て、目で合図を送る。その意図を理解したグリフィスは頷く

「これ、実機と幻影の構成編隊？」

「防衛ラインを割られない自身はあるけど、ちょっとキリがないね」

迫りくる攻撃を、オーバープロテクションという、自分全体を包み込むプロテクションのなかにフェイトをいれて耐えていた

「ここまで派手な引きつけをするってことは」

「地下か、ヘリの方に主力が向かってる」

「なのは！私が残ってここを押さえるから、ヴィータと一緒に」

「フェイトちゃん!？」

フェイトの提案に驚くのは

「コンビでも普通に空戦してたんじゃ、時間がかかりすぎる。限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる!」

「それはそうだけど…」

「なんだか嫌な予感がするんだ」

「でもフェイトちゃん…」

フェイトをなのはが心配そうな目で見ると

「割り込み失礼!」

二人の間にはやてから通信が入る

「ロングアーチからライトニング1へ、その案も限定解除申請も部隊長権限で却下します」

「はやて?」

「はやてちゃん!？なんで騎士甲冑?」

「嫌な予感は私も同じでな、クロノ君から私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ、ちゆうことで、なのはちゃんとフェイトちゃんは地上に向かってヘリの護衛。ヴィータとリィンはFW陣と合流、ケースの確保を手伝ってな?」

「了解！」

「すまんが、割り込ませてもらうぞ」

そこに時谷も割り込む

「はやての限定解除なら俺が却下する。今から砲撃を撃つから退避しろ」

「うっ、そんな、酷いで時谷君」

「俺をなめるな」

そう言っで通信をきる

「時谷君が撃つって言ってた砲撃って何だろうね？」

「さあ、でも、これだけの数をかたずけるだけの砲撃って」

「あれかな？」

既に退避していたのはは空を見る

「な、なにあれ…」

昼だと言っのに、空には無数の光が輝いている

「ちょ、ちよつと！？時谷君！？」

「なんだ？」

「あれ何！？」

「ああ、着いたか、【アサルトセル】って言って、まあ衛星砲みたいなもんだから気にするな」

「う、うん。って気にするよ！」

その時、海上のガジェットに砲撃が降り注ぐ。ガジェットを殲滅するべく放たれる何条もの光

「これじゃ、私達いらないんじゃない？」

こんなものがあつたらなのはたち魔導師はお役御免だ

「そんなことはない、そいつらは非殺傷なんてないしな。人間相手に使うと殺してしまう可能性があるんだ」

「へえ」

なのはとフェイトがそろって感心する。だが

「フェイトちゃん！あれ！」

なのはが叫ぶ、前方からまたガジェットが迫ってくる

「時谷、こっちにガジェットが来たから、ヘリはお願いね」

「なんだと！くそっ、【アサルトセル】の召喚の為に今はヘリから

離れてるんだ！」

「「えっ!?!」」

「間に合え！」

通信を切って急いでヘリのもとへ向かう

ここはとある廃墟ビルの屋上、そこに、先程まで空にいたクアット口ともう一人の茶髪の少女、デイエチが布に包まれた長い棒状のものを抱えて立っていた

「デイエチちゃん?ちゃんと見えてる?」

「ああ、遮蔽物もないし空気も澄んでる。よく見える。でもいいのかクアット口、撃っちゃって、ケースは残るだろうけどマテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

「うふふ、ドクターとウノ姉様曰くあのマテリアルがあたりなら本当に聖王の器なら砲撃くらいじゃ死んだりしないそうだから大丈夫だそうよ」

クアット口言葉を聞いたデイエチは棒状のものに巻きついている布をとると、そこから、大きな大砲が現れる。イノメスカノン、デ

イエチの固有武装の大型狙撃砲だ。後ろでクアットロに通信が入っているが、デイエチは自分には関係ないといった感じでイノメンスカノンへリに向けて構え、チャージを開始する

「インヒューレントスキル【ヘビーバレル】発動、後、12秒、1、10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、（ごめんね…）発射！」

カウントダウンが終わり、砲撃がへリに向けて発射される。そして爆発した

「てんめえ！」

ルーテシアを尋問していたヴィータがロングアーチの報告を聞いて掴みかかる

「ちょ、副隊長！落ちついて！」

スバルが止めに入るが

「うつせえ！おい！仲間が居んのか！どこに居る！？言え！」

「ん？」

ギンガは妙な音が聞えた方向を見ると、人の腕が地面から生えている。それはエリオのほう向かっている

「エリオ君！足元になにか！」

「え！？」

ふと、足元を見るといきなり地面から少女が出て来て、エリオの持っていたレリックケースを奪い、また地面に消えていった

「くっ！」

消える直前にティアナが発砲するが間に合わず逃げられてしまう

「くそっ」

ヴィータとティアナそれにスバルも少女が消えた方に向かう

「あ、あれ！」

キャロがルーテシアの方を見ると、また地面から現れた少女がルーテシアを抱えて地面に潜っていく。ヴィータが慌てて捕まえようとするが失敗、逃がしてしまう

「こっちもです。逃げられました」

先程までいたアギトにまで逃げられていた

「反応、ロストです…」

ラインが悔しそうに言う

「くそっ！」

ヴィータは地面に拳を叩きつける

「…ロングアーチ、へりは無事か…？あいつら、墜ちてねえよな！」

場面は再びクアット口達に戻る

「ふふ、どうこの完璧な計画」

「黙って、今命中確認中……………あれ、まだ飛んでる！？それにあれは？」

「ふう、やれやれ。スターズ2とロングアーチへ、こちら暁 時谷、防御に成功した」

へりの前には織天覆う七つの円環を展開した時谷が居た

「あら」

「こつちもフルパワーじゃないとわいえ、まじで」

「「っ！」」

クアットロとディエチは屋上から飛び退くとそこに大量の魔力弾が降り注ぐ

「なに！？」

煙がはれてビルを見ると約半分が消し飛んでいた

「そこまでだ淫乱女ども」

声が聞え振り返るとそこには時谷がいた

「早い！」

「ええゝあそこからどうやってここまで？」

クアットロとディエチは逃走しようとするが

「甘い！天の鎖よ！」
エルキドゥ

逃げようとする二人を何処から現れた鎖が二人を縛る

「くっ！」

「えゝん、なにこれゝ！」

「無駄だ、神すら逃れる事の出来ない鎖だ。お前ら戦闘機人では逃れられる筈がない」

コツコツとわざと靴の音を鳴らしてゆっくりと迫ってくる。戦闘機人だろぅが元は人がベースだ。恐怖は感じるだろぅ、拘束された状

態でしかもにやにやしながら迫ってくる男に恐怖を感じないわけがない

「さて、お前らに天の鎖は勿体ないな。50くらいのプロテクトを掛けたバインドで十分だろう」

時谷は天の鎖を破棄して、バインドをかけようとするが

「はあ！」

突如右から蹴りが飛んでくる

「ちっ！ト レか！」

ギリギリでプロテクションを張り、防御する

「なぜ貴様が私の名を知っているかは知らんが妹は返してもらっぞ」

そう言ったト レは二人を抱え、離脱する

「ま、最初から捕まえるつもりはないけどね」

どうやら、レリックもスバル達のアイディアで奪われずにすんだらしい

「さて、帰るか。明日にでも会いに行くか」

俺はそのまま六課に転移した。保護した少女、ヴィヴィオの事を心配しながら

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.
.

strike 14 (後書き)

くりふぁ「さぁヴィヴィオが登場しました！今回は結構長めになりました。そして改めてお詫び申し上げます」

時谷「なあこのままいくと俺父親フラグじゃね？」

くりふぁ「さぁ、どうしようかなあ？」

時谷「なんだその意味ありがたな笑みは」

くりふぁ「まあ、今回はFW達の強化のお話です」

時谷「それではまた次回」

くりふぁ「更新はまた遅くなってしまうです。合宿があるので」

登場武器

【アサルトセル】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

地球の衛星軌道に無数に浮かぶ衛星軌道砲。アサルトセルが原因で人類は宇宙へ出る事が出来ないでいた。時谷はこれをミッドの軌道上に召喚し、操っていた

strike 15 (前書き)

皆さまお久しぶりですくりふぁです。今回の更新が一カ月以上もあいてしまい、誠に申し訳ありません。壁にぶち当たったと言いますか、生意気のもスランプに陥ったりしていました。もうひとつお知らせになりますが、この小説をページから大幅に書き換えを行います。身勝手ですがご了承ください

ヴィヴィオの保護から翌日、訓練場にはいつもの様に訓練をしているのは達が居た

「それじゃ、ティアナは2ndモードの練習しようか」

「はい！……でもなのはさん？」

「ん？なに？」

「なのはさんって砲撃魔導師ですよ？私の2ndモードってダガーですよ、クロスレンジならフェイト隊長なんじゃないんですか？」

ティアナは疑問に思う。ティアナの言う通りなのはは基本的にロングレンジからミドルレンジで戦う砲撃魔導師だ。それにフェイトにしても鎌や剣、斧などダガーとは戦い方や立ち回りが違う

「まあ少しくらいなら教えることは出来るけど、実践はちょっと難しいね」

「じゃあ、俺が教えようか？」

そこで、一緒にいた俺が提案する

「時谷君が？でも時谷君って剣とかじゃなかったっけ？」

「まあ見てなって、召喚【ベルヴェルク】」

俺の手には依然なのはを助けた時に使った双銃だ

「あれ？でも時谷君の双銃ってダガーついてないよね？」

「ん？ああ、魔力刃を出せばいいしな」

そして待たせているティアナのところに向かう

「まあ、ティアナの場合ダガーは所詮補助だから教える事はあまり多くないんだ」

「多くない？」

「そうだ。覚える事は少ないさ、技をひとつ教えるだけだ」

「ひとつだけですか…」

ひとつと聞いて残念そうな表情を浮かべるティアナ

「そんな顔するな。今から教えるのはティアナ自身やスバル達を護る為の技だ」

ガジェットの？型を一機配置する

「見てろよ」

？型を銃撃で牽制する。？型がアームを伸ばすが、それを剣で弾き、
？型に突撃する

「【ヴァルキリーベイル】！」

？型の前まで一気に接近し、右の銃でバインドを撃ちこみ動きを止める。左の銃を連射しながら魔力刃を突き刺しそのまま引き裂く。右の魔力刃を横薙ぎに振るい、左右両方の魔力刃でX字に斬り裂き、両方の銃を前方に構えて連射する

「と、まあこんな感じだけど」

「いえ、こんな感じと言われても、これが基本なんですか？」

「ああ、この技からどう応用するかはティアナ次第だ」

時谷はティアナに向き直る

「まあ習うより慣れろだ。今から？型を出すから、やってみろ。因みに練習用だから攻撃はしてこない。まずはゆっくり動きを確認しながらやるんだぞ？」

「はい！」

ティアナが停止状態の？型に突撃する

「はあ！」

右の銃でバインドを撃ちこみ動きを止める。左の銃を連射しながら魔力刃を突き刺しそのまま引き裂く。右の魔力刃を横薙ぎに振るい、左右両方の魔力刃でX字に斬り裂き、両方の銃を前方に構えて連射するが

「あれ？」

「型は未だに稼働していた

「どうしたティアナ？」

「あの、時谷さん、ガジェットが壊れてないんですが」

「ああ、俺とティアナじゃ一発に込めている魔力が違うからな」

「え？どれくらい込めてるんですか？」

詰め寄るティアナ、時谷はあたふたしている

「あ、あのティアナさん？」

「なんですか？」

「その、ち、近いんだけど」

「へっ？」

ティアナは俺に言われて初めて自分の顔が俺の顔の至近距離に居る事に気づき、慌てて顔を離す。その顔は赤くなっていた

「あ、あの、ごめんなさい！」

「気にするな。込めてる魔力だったか？大体なのはデイベインバスターくらいかな」

「なのはさんのディバインバスター並みですか？」

「ただmティアナじゃそんなに魔力を込めたらすぐに魔力切れを起こすから、そこをどうするかはティアナ自身の工夫だな」

「そうですね、分かりました。私は練習に戻ります」

練習を再開したティアナを遠目で見た後、なのはのところに向かう

「なのは、ちよつといいか？」

「ん？何？時谷君」

丁度キリがいいのか、なのは達は休憩していた

「昨日の女の子の事なんだが、今からちよつと聖王病院に行つて様子を見てくるよ（確か今日がヴィヴィオが脱走する日の筈だ）」

「あ、じゃあ私も行くよ」

「訓練は大丈夫なのか？」

「うん、ヴィータちゃんにお願いするから」

「分かった、それじゃ車を六課の前に持ってきておくから、準備ができたら来てくれ」

「それじゃ、準備してくるね！」

隊舎に戻っていくなのは、おそらくシャワーを浴びに行ったのだろう

「俺も準備するか」

その後、フエイトに事情を話して車を貸してもらい隊舎の出口で待つ

「本来ならここでシグナムが同行する筈だったけど、やっぱり原作とは少し違うのか」

そんな事を考えていると車の窓がノックされる

「ごめん！ちよつと遅くなっちゃった」

「気にするな。そんじゃ行くか」

なのはが助手席に乗り込んだのを確認し、車を発進させる。

「時谷君って車の運転出来たんだね」

「まあ、前に居た世界で免許持ってたからな」

そのまま高速道路（？）を走っていると、なのはの前にモニターが現れる

こちら聖王教会のシャツハ・ヌエラです。申し訳ありません、昨日こちらに保護した少女なのですが、さっき病室を見たらいなくなっていました。申し訳ありません。他の患者既に避難を完了しています

「避難？たかだか4、5歳の女の子にどんな対応をしてるんだ？そんな事より女の子を搜索すべきだろ。違うか？」

あなたは？

シャッハがいきなり話に割り込んだ時谷に向かって言う

「つい先日機動六課に着任した暁 時谷一等空尉だ」

聖王教会のシャッハ・ヌエラです。しかし、万が一の事も「万が一も億の一もない。ただの女の子だろうが」ですが

「シスターシャッハも悪気はなかったんだからそこまで言わなくても……」

「4歳や5歳くらいの女の子をまるで危険物のような対応するのが悪気がないで済むのか？」

「それは……でも」

「まあここで言い合っても意味ないからな。急ぐぞ」

シャッハからの通信をこちらから切り、スピードをあげる。もちろん法定速度は守っている

「ここが聖王病院か」

「うん、行こう」

車を病院の駐車場に止めて、病院の入口に向かうとそこには紫色の髪をしたシスター服を着た女性が立っていた

「お待ちしておりました」

「シスター・シャッハ？女の子は見つかりました？」

「いえ、いまだに搜索中です」

「それじゃ、なのはとシスターは一緒に探しに行ってくれ」

シャッハとなのはを見送り、時谷は中庭に向かう。中庭にたどりつくくと、通路脇の草むらから金色の髪に紅と翡翠のオッドアイの少女が出てくる。あきらかに脅えている

「えーと、君の名前は？」

「……ヴィヴィオ」

「そうか、いい名前だね。それでヴィヴィオは何をしてるのかな？」

「うん」「逆巻け！ヴェンデルシャフト！」

ヴィヴィオから話を聞こうとした瞬間向かいの窓からシャッハがデバイスを起動させて、俺の前に降り立つ。ヴィヴィオは脅えて尻持

ちをついてしまい、手に持っていたウサギの人形を落としてしまう

「シスターシャツハ、何やってんだお前は！」

前に立つシャツハの後頭部に魔力を軽く込めたデコピンをいれる。
デコピンされたシャツハは前のめりになる

「な、何をするんですか!？」

「こんな小さな女の子に武器なんか構えるんじゃない！」

後頭部を押さえ、涙目になりながらこちらに向く

「そんな顔しないでくれ、罪悪感が半端ないじゃないか」

未だに涙目なシャツハから、ヴィヴィオに向き直る

「驚かせてごめんな。はい、これ落としたぞ？」

落ちていたウサギの人形を拾って汚れをはたき、ヴィヴィオに渡す

「ありがとう……」

「どういたしまして。で？ヴィヴィオは何をしてたんだ？」

「あのね、いないの」

「いないって、誰が？」

「ママとパパ……」

「それは大変だ。じゃ一緒に探そうか？」

「（コクッ）」

そしてヴィヴィオの手を握り、歩き出す。なのはと合流してそのまま原作通りにそのままヴィヴィオは六課で保護する事になった

六課に帰って来て、疲れたのかヴィヴィオはすぐに眠ってしまい、なのはが自分の部屋に連れていった。そして翌日の朝にそれは訪れた

「うええええええええええええええええん！！！」

六課の宿舎に木霊する叫び声、その叫び声で起きる

「ん、ヴィヴィオが泣いてるのか」

まだ眠気が抜けない体を起こし、制服に着替え叫び声のする方向に向かう。そして辿り着いたのはなのはの部屋だった。扉が開いていたので中に入ると、スカートの裾を掴まれながら泣いているヴィヴィオにあたふたしている管理局の白い悪魔こと高町なのはがいた

「不屈のエース・オブ・エースにも勝てへんものがあるんやな」

後ろを振り向くと泣き声を聞きつけたのか、はやてとフェイトが居た

「朝起きてから離してくれなくて」

「任せて、なのは」

フェイトは未だになのはのスカートを掴んで離さないヴィヴィオに近づいて、落ちていたウサギの人形を持ってヴィヴィオの前に掲げる

「こんにちわ」

フェイトはやさしくヴィヴィオに喋りかける

「ヴィヴィオはなのはさんの事は好き？」

「…うん」

「でも、ヴィヴィオが好きななのはさんが困ってるよ？ヴィヴィオはなのはさんを困らせたくないよね？」

「うん」

「それじゃ少しの間なのはさんはお仕事に行っちゃうけど、ヴィヴィオはいい子で待ってられるかな？」

「うん、でも」

「でも？」

「さっさと行って来い」

「は、はい」

「いつてらっしゃい！」

なのはとフェイトはヴィヴィオに見送られはやくと共に部屋を出ていく

「それじゃ、ヴィヴィオちよつとの間あそこに居るお姉ちゃん達と遊んでくれる？」

「パパもどっか行っちゃうの？」

ヴィヴィオは泣きそうな目で見

「大丈夫、すぐに帰ってくるから。待っててくれるか？」

「うん、わかった」

「それじゃ、スバル達、頼んだぞ」

「……はい！」「……」

ヴィヴィオの世話をスバル達に頼み、俺は転移する。

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.
.

Strike 15 (後書き)

今回のお話はどうでしたでしょうか？前書きでも言いましたが、ページ目から書き換えを行います。登場人物などは変わりません

でわまた次回：はいつになるか分かりませんw

登場技

【ヴァルキリーベイル】

登場作品：ブレイブルーBLAZBLUE コンティニウムCONTINUUM シフトSHIFT

使用キャラ：ノエルⅡヴァ ミリオン

概要

本来は至近距離からの銃撃を浴びせる技なのだが、時谷は独自に考えたモーションを使っている

strike 16 (前書き)

どうもくりふぁです。更新がまた一カ月遅れてしまいすみませんでした。m(┐┐)m

友人にこの小説を読んでもらったところ、自覚していましたが駄作と宣告されました。いやぁまさにその通り、落ち込んでいる自分に喝をいれてこれからも頑張っていこうと思います。これからもよろしく願います

残酷な表現が含まれます

俺が転移したのは時空管理局の地上本部なぜここに来たかというと

「これはこれは、レジアス中将。お久しぶりです」

「ん？ああ暁か、何の用だ？」

地上本部の長たるレジアス・ゲイズ中将に会いに来ていたのだ。初めて会ったのは六課に配備されるときにばったり会ったしまった。その時はレジアス中将は俺を嫌っていた。当り前と言えば当たり前だ。いきなり現われて一等空尉という異例の階級、そして確認されているだけでも二つの希少能力レアスキルを持ち、過剰戦力とまで言われる機動六課への配備。他にもあげれば色々ある。そしてその後レジアス中将に呼びだされて一番最初に言われた言葉は

「お前は何者だ」

魔力を持たないレジアス中将でも感じる事のできるほどの魔力量を持っていれば聞かれて当然である。それに対する俺の回答は

「ただの新人り局員ですよ」

そう答えると、レジアス中将は怒りを露わにした。そして、地上の守りについて語り始める。ただの局員に言っても無意味なはずだが、日頃からのストレスや周りからのプレッシャーで心が弱っていたのだろう。

「違うな、間違っているぞレジアス」

すべてを聞いた俺は某チューリップ仮面風に答える

「海に戦力が集まっているのではない。地上の魔導師が弱くなったのだ。今の陸上魔導師隊のほとんどは魔法による身体強化魔法しか使わない。確かにそれでも戦う事は出来るが勝つ事は出来ない。勝つためには魔導師自身が鍛えなければいけない。兵器と言うガラクタに頼るな！兵器を使うにしても、使う人間が優れていなければ意味がない。なに、やる事は簡単だ陸士の訓練メニューに筋肉トレーニングや徒手格闘を加えれば幾分かはマシになるろう」

レジアス中將は俺の言葉を聞いて放心状態だった

「ふ、ふ、ふははははははは！」

いきなり笑いだした。俺は意味が分からずに今度は俺がポカーンだった

「気にいったぞ！暁 時谷！お前が言うのも最もだ。よし」

と、まあそんな感じで気に入られちゃったわけなんだが、その後「ところで、娘を嫁にもらってくれないか？あれもあれで可愛いところがあるのだが」

「お断りします」

「まあまあ、そう言わずに」

「だから嫌ですって！」

このやり取りを一時間近く続けてやっと解放された

「どうしたの？ 暁さん」

少しトリップしていたらしく心配したオーリスが俺の顔を覗き込む

「なんでもないですよ」

「ところで暁、そろそろ観念して娘を嫁に貰う気はな「ないです」
む、だがわしは諦めんぞ」

「お、おとう、じゃなくて、中将！」

「ぬはははは！ で今日はどうしんだ？」

「ここでは話ずらいから、中将の部屋に行きましょう」

レジアス中将の執務室に入り、レジアス本人は執務席に座り、俺は
対面にあるソファーに座る

「それで？何の用だ？」

「ええ、少し話がありまして」

「さて、話し方はいつも通りでいいぞ。ここにはわしとお前しかない」

「そうか？助かる。畏まった話し方は苦手だな」

言い終わると同時に真剣な顔になる。レジアスも察したのか真剣な顔になる

「話とわな、レジアス。戦闘機人や最高評議会から手を引け」

「っ！知っていたのか…」

「調べればすぐに分かる事だ」

「それはお前限定だろうに」

レジアスが呆れ気味に言う

「そうかもな、で？どうする？手を引くなら最高評議会はすぐに始末する」

「さて暁！それが何を意味しているのか理解しているのか！？」

「管理世界の混乱か？そんなのあんな奴らに管理されなくても管理世界の人たちは生活していける。それにお前が居るだろ？」

「わしにそこまでの手腕はない。だが、戦闘機人の事だけは手を引くわけにはいない」

「何故だ？スカリエッティの事か？」

「そこまで知っていたか。別にわしは戦闘機人を戦力にするつもりはない」

「なんだと？」

予想外の言葉に驚く。原作ではレジアスは戦闘機人を戦力として使う為に計画に参加していたはずだ

「わしは戦闘機人の技術を医療に転用できると考えているのだ。今でも義手などはあるが、元の腕のように動くわけではない。だが、その動きを機械に制御させれば元の腕のように動かす事が出来る。足を無くしたものも再び立って歩く事が出来る。だが機械が故に拒否反応が出てしまう、その点をクリアする為にわしは戦闘機人計画に参加しているのだ。いくら暁、お前の言葉でもこればかりは譲れん」

そう語るレジアスはとても優しげにそして確固たる意志を持った目をしていた

「そうか、分かった。だが最高評議会の脳みそ共だけは始末させてもらう。あと腐った上層部もすべて排除するさ」

「だがそう簡単にはいかんぞ？」

「まあ任せとけて」

「そうか、気をつけるよ」

「そうだとすると、機動六課に休暇をくれないか？あいつら働き詰めだからな」

「うむ、わかった。三日くらいでいいか？」

「ああ、ありがとうな」

俺はレジアスに背を向けて部屋をでる。そして転移で帰らず、歩いて帰る事にした。レジアスと話込んでしまったのか、外は既に暗くなっていた。そして公園が見えてくる。これなんてフラグ？ねえフラグ？

「そしてフラグ回収か…」

丁度公園に差し掛かると人気がなくなる

「強層結界か、はてさて何が出てくるやら」

そう言っていると、目の前に五人の人影が現れる。その手にはアームドデバイスであろう。槍が二人に剣が二人、銃が一人だ

「一応聞くが何の用だ？管理局最高評議会直属の暗殺部隊さん？」

「貴様を殺しに来た」

「それはご丁寧にどうも」

俺はいい加減に返すが、全く動じずに言い放つ

「貴様は危険だ。ここで死んでもらう」

黒いコートを着た魔導師はそれぞれのデバイスを構える

「やれるものならやってみろ。貴様らが相手にしているのがどれほどのものか知るがいい」

エクセアをセットアップし、干渉・莫耶を投影し構える。

「はっ！」

まず槍の二人が仕掛けてくる。その槍さばきは確実に急所を突いてくる

「カードリッジロード」

もう一人の槍使いがカードリッジをロードする。弾丸が排莢されるとき、刀身に炎が纏う

「（変換資質か、厄介だな）」

「暗炎斬」

声からして男だろう。男が槍を振るう。そこから炎を纏った魔力刃が放たれる。迫りくる魔力刃を干渉で弾くが、それと同時に干渉が碎ける

「干渉を碎く威力を持つか、つくづく厄介だな」

残った莫耶を破棄し、禍々しい雰囲気を放つ魔槍【刺し穿つ死棘のゲイボルグ槍】を構える

「その心臓、貰い受ける！【刺し穿つ死棘のゲイボルグ槍】！」

目の前にいる男の足元を突く

「どこを狙って………なん……だと。なぜ……お……れの胸に刺さ……っている？」

男の足元に向けて突いた筈の槍が男の心臓を穿いている

「これは「必ず心臓に当たる」という、因果を持つ槍だ。どこを狙っても必ず心臓を穿つ」

「く、そ」

まず一人

「さあ、次はだれだ？」

再び魔槍を構えて黒服の奴らを見据える

「はあ！」

銃以外の奴らが攻撃を仕掛けてくる。剣戟を弾き、槍をかわし、剣を弾く。そして

「二人目」

剣を弾き素早く槍を引き、心臓を貫く。槍は男の体を貫通している

「がはっ！」

貫いている槍を引きぬく、引き抜くと同時に鮮血が飛び散る

「くっ！」

後ろにいる銃を持った魔導師が魔力弾を放つが、すべて弾き返す。その隙に剣と槍を持った魔導師が斬りかかってくるが、受け流し槍を横薙ぎに振るう。一人は右手の肘から先がなくなり、一人は左手首が吹き飛ぶ。再び魔力弾が飛来するがバックステップでかわし銃の魔導師に肉薄する

「いやっ」

「っ！」

キンッ！という金属音が響く、銃の魔導師に怪我はなく、デバイスが斬り裂かれている

「（女！？それにこの声は）」

「くっ！」

女の魔導師は逃げ出すが俺は追わずに残った魔導師二人の方に向き直る

「まだやるか？」

俺の言葉に臆することなくデバイスを構える

「死ぬぞ」

「仲間を殺され黙っている訳にはいかん」

「黙れ！貴様らは何人殺してきた！その人の家族や周りの人達の幸せをどれだけ奪った！」

「それが任務だ」

「じゃあ、死ねよ」

【ゲイボルグ刺し穿つ魔槍】を消す。ここぞとばかりに魔導師が斬りかかってくるが、すべてかわし大きく後退する

「【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】」

俺の後ろに赤い扉が開かれていく、出てくるのは幾多の剣群。それもただの剣群ではない、すべてが聖剣や魔剣と言われる代物だ

「ありがたく思えよ。貴様らには過ぎた代物だ」

すう、と右手をあげる。魔導師たちは危険性に気付いたのか剣と槍を構えて接近してくるが、もう遅い。俺は右手を魔導師に向けて振り下ろす。それを合図に後ろに控えていた剣群は魔導師たちに向けて射出される。魔導師たちは迫る剣群を弾こうとするがデバイスが壊れてしまう。防ぐ手立てを失った魔導師たちに容赦なく剣が突き刺さる。腕を引き裂き、足を貫き、胴を串刺し、眼球を抉り、首を穿つ

「終わりか、怨むなら貴様らを派遣した最高評議會を怨め」

そこには乱立する劍群

「さて、帰るか」

【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）を閉じると劍群も消える。
残ったのは物言わぬ屍があるだけだった

「その前にこれ（・・・）をどうにかするか。そうだな脳みそに送り
つけるか」

俺は転移魔法を発動させると、物言わぬ屍は消え去った。そこにあ
った血痕も綺麗に消えている

「これで良しと（だが、さっきの女は……ま、そんなわけないか）」

考えるのをやめ、強層結界が解除された公園を去る

六課に着いたのは丁度夕食時だった

「あ、パパー！おかえりなさい！」

「時谷君！どこに行ってたの？」

「ああ、ちよつと地上本部にな。それよりただいま」

俺がほほ笑みながら言うとなのはは顔を真っ赤にする。なんでだ？

『（マスターが原因なんですけどねえ）』

エクセアが何か言っているが気にしない

「ヴィヴィオたちはもう夕食は食べたのか？」

「うん！パパは？」

「ん？パパは食べてきたから大丈夫だよ」

「じゃあ時谷君、私はヴィヴィオを寝かしつけるから」

「ああ、お休み」

「お休みパパ！」

手を振りながらなのはと歩いていくヴィヴィオ。いつも寝る前にはヴィヴィオの頭を撫でるのだが、今日はしなかった。この血に汚れた手でヴィヴィオに触るわけにはいかない

「（だが俺はこの手を穢してでも、ヴィヴィオや六課の皆を護って

みせる。この先何人の人をこの手で殺す事になっても」

今日、四人殺した。前の世界ではありえない事だ。人の行き死にが自分の分別で決まるなんて、この護る為に得た力は殺戮に使うこともできる。護る為に殺す。この矛盾を抱えて衛宮士郎は英雄となつて戦つたのだろう。どんな事になっても俺は壊れない、護りきつてみせる。俺が生きている限り

n e x t s t r i k e

strike 16（後書き）

くりふぁ「終わった！自分で書いててきつかったなあ」

時谷「この小説ってギャグないよな」

くりふぁ「うーん、この小説はシリアス系を目指してるからなあ」

時谷「ここまで来てコンセプト発表かよ」

くりふぁ「今回も遅れてしまい申し訳ありません。この小説で理解できなところがありましたら、感想に書いていただければ幸いです」

時谷「ではまた次回」

くりふぁ「読者様に感謝を申し上げます」

s t r i k e 17 (前書き)

今回の話はオリジナルになります。

突然の休暇に驚く六課メンバー、舞台はミッドチルダから海鳴へ！

海鳴休暇編

「休暇？」

朝、部隊長室に行つて昨日レジアスから許可をもらつた休暇について話すと、はやては驚愕の表情を浮かべる。こんな感じだ(。o。)

「ああ、昨日地上本部に行つたときに許可を貰つて来たんだよ」

「なあ時谷君？許可出したのってレジアス中将やよね？」

「そうだけど？それがどうかしたか？」

「ありえんやろ！あのおっさんはここ（六課）の事を疎ましく思つとるんよ！？」

「それなら関係ないぞ？俺とレジアスは友人だからな」

「友人！？それ以前に呼び捨てかいな！」

「まあ、それは置いといて、はやて達が休まないからな。それに、ここに来てから面倒を見てくれたお礼として、俺からささやかなプレゼントだ」

「うっ、それを言われると辛いわ、うんそやね。スバルたちもこの間の休暇はオシヤカになつてしまたし、ここはありがたく頂くとするわ」

「期間は明日から三日間だから海鳴にでも行つたらどうだ？」

「海鳴？まあ休暇ならあそこが一番やね。じゃあ今日中に滞在場所は確保しておくよ」

「じゃあ俺は訓練を見に行ってくる」

はやてに休暇の事を伝え終わり、そのまま訓練場に向かう。そこにはいつものように訓練に励むスバル達がいた

「なのは、ちょっといいか？」

「ん？時谷君か、おはよう」

「おはよう、なのは。ちょっと皆を集めてくれないか」

「うん、いいけど。ちょっと待ってね」

なのはが皆に念話を飛ばす。今日はフェイトも朝の訓練に参加していた。いつもは執務官の仕事でいないのだが、タイミングいい。そうしていると皆集まっていた

「さて、全員揃ったな。今日はお知らせがあつてきた。いい知らせと悪い知らせ、どっちから聞きたい？」

「うーんいいお知らせがいいです！」

俺が聞くとスバルが答える

「いい知らせからだな。実は明日からの三日間が休暇になりました！」

俺がそう言っているとシグナムを除いた全員がポカーンとした顔になる

「えーと、ねえ時谷？」

「ん？なんだフェイト」

「どうして急にそんな事に？」

「それはな、この間の休暇はオシヤカになったからな。俺が上につて休暇をもらってきたんだ」

「ねえ時谷君、休暇の間六課はどうするの？」

「それは地上本部から一個中隊を借りる事にしてるから大丈夫だ」

「あの、時谷さん」

ティアナが律儀に手をあげて発言する

「なんだティアナ」

「休暇と言っても、具体的にはどうするんですか？」

「ふ、聞いて驚くなよ？ 休暇を過ごす場所は地球、しかもなのは達
の生まれ故郷の海鳴市だ！」

「ええええええ!？」

「と、時谷君！？なんで海鳴市なの！？」

「たまには親に顔を見せてこい、と俺が勝手に思ったからだ」

「で、でも時谷、滞在場所はどつするの!？」

「いま、はやてが確保してくれてる」

あわあわしながら、聞いてくるなのはとフェイト。その後ろでスバル達は何やら楽しそうに話している

「ねえねえティア!地球だよ地球!」

「分かつてるわよ!いちいちはしゃがない!」

「フェイトさんの生まれ故郷かあ、楽しみだねキャラ?」

「うん!楽しみだねエリオ君!」

とりあえず皆嬉しそうだ。その顔を見れば俺もうれしくなる

「それじゃ、悪い知らせだ」

「悪い知らせ?」

「ああ、明日から休みだが、明日のデスクワークの半分は今日中に終わらせる事だ。これが出来なきゃ休暇なしだ」

「え?」

「ふえ?」

「はい？」

「え？」

「え？」

「え？」

上から、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、エリオ&キャロだ
「そうゆう訳だから、今日は昼からの訓練はなしにしてデスクワークになる。がんばれよ」

「あ、あれ時谷君は！？」

「俺は昨日の内に終わらしたからな（まあ書類処理はエクセアがやっただけだな）」

「ずるい！」

なのはとスバルが何か言っているが気にせず訓練場から隊舎に戻り、食堂に向かう

「パパ〜！」

「ん？」

呼ばれて振り返ると、こっちに向かって走ってくるヴィヴィオが走ってくる

「転ぶなよお」

「うゝん！きゃう！」

言ったそばから転びそうになる。すぐさま足に魔力を込めてブースターのように放出してヴィヴィオの正面に周り、抱きかかえる

「大丈夫かヴィヴィオ？」

「うん、ありがとうパパ！」

そのまま脇に手を入れて肩車をする

「たかゝい！」

「しっかり掴まってるんだぞ？」

「はい！」

そのままヴィヴィオを肩車したまま食堂に向かう。食堂に着くと、もうなのは達が食事していた。席を見渡すがどこも空いていない

「時谷くゝん！ここ空いてるよ！」

なのはがこちらに手を振っている。ヴィヴィオもなのはに手を振り返す

「それじゃ失礼」

「うつんそんなことないよ」

料理をヴィヴィオと俺の分を取ってきて席に着き、ヴィヴィオを肩から降ろして膝に乗せる

「ヴィヴィオ、あゝん」

焼き魚を小さくして箸でヴィヴィオの口に運ぶ

「あゝん！んゝおいしい！」

「そつか、よく噛んで食べるんだぞ」

「はい」

自分の分も食べつつ、ヴィヴィオに食べさせていく

「時谷君本当のパパみたいだね」

「そつか？出来るだけパパになろうと頑張ってるんだがな」

「なら、ヴィヴィオの保護責任者になったら？」

「保護責任者ってあれか、フェイトがエリオやキャロの時にしてたやつか？」

「うん、それで私が後見人になるよ」

「ねえパパ？」

「ん？なんだヴィヴィオ」

布巾で口の周りを拭いたヴィヴィオが聞いてくる

「ほごせきにんしゃってなに？」

「そうだな、ヴィヴィオのパパになるってことだよ」

「パパはもうヴィヴィオのパパだよ？」

「そうだな、ヴィヴィオにはちょっと難しいかな」

「じゃあ、こうけんにんっていうのは？」

「それはね、なのはさんがヴィヴィオのママになるってことだよ」

後見人のことはなのはが説明する。この説明だと

「うーんと、時谷パパとなのはママ？」

「なんだヴィヴィオ？」

「な〜にヴィヴィオ？」

「ママとパパはふうふなの？」

「ふ、夫婦！？」「」

ヴィヴィオの言葉で俺となのはに衝撃が走る。いやいやいやいや、夫婦っておいおいおい

「ヴィ、ヴィヴィオ？その言葉は誰に聞いたのかな？」

「アイナさん！」

「ア、アイナさんか」

アイナさんはこの六課の女子寮の寮母をしている人で、基本的に俺が居ないときにヴィヴィオの世話をお願いしている

「アイナさんが、なのはさんがママになったらパパとふうふだねっていった」

「ふ、夫婦なんて、その〜時谷君に迷惑なんじゃ」

「いや、別に迷惑ってわけじゃないが、なのはは嫌じゃないのか？」

「べ、別に嫌じゃないよ！……むしろ、嬉しいくらいで」

「ん、何か言ったか？最後らへんが聞えなかったんだが」

「気にしないで！な、なんでもないから！」

「そうか、とりあえず、ヴィヴィオ？なのはママと俺は夫婦じゃないって、ヴィヴィオを護ってくれる人だよ」

「ん〜、ヴィヴィオよくわかんない」

「またまたヴィヴィオには難しいな」

食べ終わった食器を片づけて、俺の部屋に戻る。部屋に着くとヴィ
ヴィオは机に向かい絵を描き始める。俺はリクライニングチェアに
座り本を読み始める。今頃なのは達はデスクワークに追われている
だろう。

「（それにしても、なのはと夫婦か。悪い気持はしないな）」

そんな事を考えながら、今日を過ごしていく。明日は海鳴に出発だ

n e x t s t r i k e

strike 17（後書き）

どうもくりふぁです。珍しく短期間での投稿です。

今回はいかがでしたでしょうか？楽しんでいただければ幸いです

前回に載せ忘れた武器紹介

登場武具

【刺し穿つ死棘の槍】ゲイボルク

登場作品：Fate/stay night

使用者：ランサー

概要

ケルト神話における大英雄、クー・フリーンが使用したと言われる赤い魔槍。

因果を逆転し「敵の心臓に命中している」という事実（結果）を作った後に攻撃（原因）を放つ【刺し穿つ死棘の槍】ゲイボルクと槍に宿る呪いを最大開放し投擲して使用する【突き穿つ死翔の槍】ゲイボルクが技としてある

【王の財宝】ゲート・オブ・バビロン

登場作品：Fate/stay night

使用者：ギルガメッシュ

概要

「宝具の原典」と呼ばれるさまざまな宝具を宝物庫に保管しており、それを湯水のように撃ちだしたり、使用することができる。

s t r i k e 18 (前書き)

今回は一端時谷の視点から離れ、時谷が転生したあとの女神と時谷の妹、紗耶の話になります。

結構シリアスにしようと頑張りました

お兄ちゃんが死んだ。その事を聞いた時は悪い冗談だと思った。あのお兄ちゃんが私を置いて消えるなんてありえない、お兄ちゃんはいつも私を護ってくれていた。そのお兄ちゃんが死ぬなんてありえない。

だけど、お兄ちゃんの亡骸を見て、それが真実だと思い知らされた。冷たくなった体、白くなった肌、二度と開く事のない瞼。そして、私に二度と笑うかけてくれる事のないその唇

「お兄ちゃん！嘘だよな？お兄ちゃんが死んじゃうなんてあり得ないよね？ねえ、答えてよ…お願いだからさ」

私がお兄ちゃんの亡骸に泣きついていて、扉から小さな女の子とその母親らしき人物が入ってくる

「あなたたちは？」

「その男性に娘の命を救われた者です」

「その子が、兄が最後に護った子ですか…」

私はそう言っ、小さな女の子を睨む。こいつがお兄ちゃんを殺したんだ！こいつさえいなければお兄ちゃんは死なずに済んだのに！

「ねえ、お姉ちゃん」

「なに？」

冷たく、突き放すように言う

「お兄ちゃんにありがとうって言いたいんだけど、だめ？」

「うん、いいよ」

私は何故かお兄ちゃんの側を離れた。本当は嫌なのに、何故かそこを退いてしまった

「お兄ちゃん、この間はたすけてくれてありがとう！」

小さな女の子はお兄ちゃんの手を握りながら言う。そして私の中にあったこの子への憎悪が消えていく。こんな小さな子に対してなんでこんなにも怨みを募らせていたのだろう。お兄ちゃんは昔から誰かを助けてばかりだった。お兄ちゃんは昔からこう言っていた

「僕はみんなをまもりたいんだ。せめて僕が見ているところだけでもまもっていききたいんだ」

こう、言っていた。お兄ちゃんはこの子を護ったんだ。文字通り命懸けで、女の子はお兄ちゃんから離れて母親のもとに行く

「娘の命を救っていただき、ありがとうございました」

そう言って親子は帰って行った

「ねえお兄ちゃん？」

私は再びお兄ちゃんに歩み寄る

「あの子、お兄ちゃんが護ってくれたおかげで助かったんだよ？でも、死んじゃ意味ないよっ！」

私はまた崩れ落ちる。その時、私の背後が光始める。光が収まった後その方向を見ると、白い翼に、白い綺麗な服、ロングストレートの金髪。まさに女神という印象を持つ女性だった

「あ、あなたは誰ですか？」

「あなたたちで言う神に当たります」

「は？神様？馬鹿なんじゃないの？」

「そう思ってもらって構いません。私はあなたに謝っても許してもらえないような事をしてしまいました」

「謝る？何についてよ」

「あなたのお兄さん、暁 時谷君の事についてです」

この女は何を言っている？なんでお兄ちゃんの事？私がそう考えていると、自称女神の口から驚くべき言葉が飛び出す

「時谷君を殺したのは、私です」

その言葉を聞いた瞬間、私は女に掴みかかっていた

「あんたが、あんたがお兄ちゃんを殺したの！？ふざけないで！なんでお兄ちゃんを殺したの！？何かお兄ちゃんが悪い事した？して

ないわよね！それどころか、いろんな人を護ってきたお兄ちゃんが死ぬ理由なんてどこにもない！」

「そうです。私の”手違い”で殺してしまいました」

パンツ！私は女の頬を張り倒していた

「手違い？そんなくだらない事でお兄ちゃんは死んだの！？あんた、神様なんでしょ？じゃあお兄ちゃんを生き返らせてよ！」

「無理です。一度死んだ魂は蘇りません。ですが、時谷君は生きています」

はあ？この女は何を言っている？ここに亡骸があるのに生きてる？

「時谷君はこことは違う世界で生きています」

「違う…世界？」

「そうです。こことは違う、言っなれば並行世界です」

「並行世界？」

「はい、例えば 時谷君が死ぬ事のない世界、あなたが生まれていない世界 などの様々な可能性の世界です」

「じゃあ、お兄ちゃんは生きてるの？」

「はい、生きています。そして彼は転生する前にこう言いました。その世界の人達を護る。」と」

その世界の人達を護る。か、相変わらずなんだね

「すべて、私の責任です。本当にごめんなさい」

「そうですか、さっきは叩いてすみません」

「いえ、当然だと思います」

「あの女神さん、私もその世界に行けますか？」

「それは…出来くはないですが、でもいいのですか？二度とこの世界には戻れませんよ？」

「ちょっと待っててください」

私は女神さんにそう言って安置室をでる。向かう先は、父が居る病室。母が死んだ後、父は男手ひとつで私とお兄ちゃんを育ててくれた。だが、お兄ちゃんの死を聞いて倒れてしまった。理由は今までの疲れが溜まってた過労とお兄ちゃんが死んだことによる心労

「お父さん？入るよ」

中に入るとベットの背もたれを起こして本を読んでいる父がいた

「ん？どうした紗耶」

「うん、あのねお父さん。私、ちょっと行かなきゃいけないところが出来たんだ」

「そうか、それは時谷の所か？」

「っ！お父さん！？」

「昨日な、夢に白い翼の生えた女性が出て来て謝って来たんだ。息子さんが亡くなったのは私のせいですってな。でも同時に時谷が生きている事を知ったんだ。お前の所にも来たのか？」

「うん、でもお兄ちゃんの所に行くとか帰ってこれないかもしれないんだって」

私は嘘をついた。今まで父に嘘をついた事はない。かもじゃない。帰ってこれないんだから

「そうか、行てきなさい紗耶。父さんは大丈夫だから」

「いいの？」

「ただ、時谷に会ったら、伝えてほしい。お前の父はいつまでも息子のお前を愛していると」

「うん、分かった。絶対に伝えるよ！」

父はニコツ、っと笑って、私の頭を撫でる

「行つといで、俺の可愛い娘よ」

「うん、行ってきますー！」

私は勢いよく飛び出し、安置室に戻る

「これでいいんだよな。明希^{あき}」

お父さんがそう言った言葉を聞きとる事は出来なかった

私が安置室の扉を開くと、女神さんがさつきと変らない所に立って
(浮いて?) いた

「どこに行っていたんですか?」

「お父さんの所、行つといでだつて」

「いいんですか? 本当にもう二度とこの世界には戻る事は出来ない
んですよ?」

「うん、大丈夫! お兄ちゃんに伝えなきゃいけない事があるし」

「分かりました。因みに、念の為、時谷君同様に特殊な力を与える
事が出来ますが…どうしますか?」

「ホントですか!?」

私は目を輝かせて女神さんを見る。俗に言うオタクに部類される兄
の影響で私もゲームやアニメなどにどっぷりなのだ

「え、ええ(あれ?なんで兄妹両方ともオタクなんでしょうか。ま
あ私も言えませんが)」

「じゃあ、BLAZBLUEの武器能力全部と、能力使用による反動がない体を私にukればいいよ」

「ふふ」

「何？」

「時谷君も似たような事をお願いしていたので」

「そうなんだ」

「では、行きますよ」

女神の言葉と共に目の前が真っ白になる。今、会いに行くからねお兄ちゃん！

s t r i k e 18 (後書き)

と、言うわけでやっと伏線回収です。

そりゃあもう、チートにします！次の登場はいつになるか分かりませんが、近いうちにだそうと思います

ではまた次回お会いしましょう

読者の皆様に感謝を申し上げます

strike 19 (前書き)

どうもくりふぁです。今回のお話はとうとう海鳴に休暇旅行です！

では、「魔法少女リリカルなのはStrikers」護る為の力〜
始まります

転送特有の浮遊感がなくなり目を開けると、そこはどこかの部屋のようだ

「はやて、ここは？」

まあ大体予想はつくが

「ここは私やなのはちゃんの友達のアリサちゃんがもつとる別荘やですよねえ、部屋をでて一階のロビーに向かうと、金髪の女性と淡い紫色の髪をした女性が立っていた

「なのは！フェイト！はやて！久しぶり！」

「三人とも久しぶりだね」

「アリサちゃん！すずかちゃん！久しぶり！」

「アリサ、すずか、久しぶり」

「少しの間、お世話になるで」

「そっちの子達がなのはの教え子？」

「うん、皆自己紹介しようか」

「ティアナ・ランスターです！よろしくお願いします」

「スバル・ナカジマです！お世話になります！」

「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします！」

「キャロ・ル・ルシエです。こっちはフリードリヒ、フリードって呼んでください」

紹介されたフリードはクキュー！と元気に返事をする

「うん！皆元気でよろしい！」

「よろしくね」

「それで」

そう言つてアリサが俺を見る

「あんたは？」

「ちょ、アリサちゃん！メールで送ったでしょ！」

「ふゝんこいつがなのは言つた時谷つて奴？こんなヒョロヒョロした奴が？」

「アリサちゃん！」

「はは、気にしないでいいぞなのは、そうだ俺が暁　時谷だ。よろしくなバニングスさん、それと月村さんも」

「アリサでいいわ」

「私も、すずかでいいよ」

「じゃあ、よろしくなアリサ、すずか」

アリサは満足そうに頷いて、ニコリと笑う

「部屋は好きに使ってくれて構わないわ。それと、この屋敷の裏に海があるから、部屋に荷物を置いたら海に行ってきたら？」

「そやね、よっしゃ！皆水着に着替えてビーチに集合や！」

はやての言葉を聞いたスバル達は各々の部屋に行き（いつの間に決めたんだ？）、準備を始める。俺もなのはに言われた部屋に行き荷物を置いて水着に着替え、パーカーを羽織る。そしてロビーに戻ると、大量の荷物があつた

「これは、もしや」

荷物の塊を見る。クーラーボックス、パラソル、レジャーシート、etc。その荷物の中のひとつ、クーラーボックスの上にメモが置いてある

>時谷君へ。この荷物をビーチに運んで来てくれるとうれしいわあ
byはやてく

「人をなんだと思ってるんだ？はやての奴は」

とりあえず、すべての荷物を王の財宝にしまい、ビーチに向かうと既になのは達は海に入って遊び始めていた

「ビーチボールは持ってたのか。だが、これは眼福だな」

これは男の性、いたしかたなく目が水着に行ってしまう。なのははピンクのビキニタイプ、フェイトは黒かと思いきや、黄色のビキニ、代わりにはやてが黒のビキニを着ている。スバルは水色のスポーツ水着でティアナと泳いでいる。ティアナはオレンジのスカートタイプの大人っぽくしているが、オレンジな為少し子供っぽさが抜けない。エリオは赤に黄色いラインの入ったトランクスタイル、キャロは…何故にスク水？そしてなんで白？誰だあんなすば（ry:ゲフンツゲフンツ。ヴィヴィオは緑のワンピーススタイルだ。うん、すば（ry:ゴホツゴホツ、皆それぞれの個性が出ている

「ここらへんでいいか」

王の財宝からさつきしまった荷物の中からレジャーシートを取り出し、広げて砂浜に敷く。四隅に空いた穴に杭を打ち込み固定する。次にパラソルを取り出しレジャーシートの真ん中に空いた穴にパラソルを突き刺し、開く。クーラーボックスをパラソルの日陰に置きその他の荷物もすべて置く

「ふう、これで全部か」

「パパ〜！」

レジャーシートに座り、一休みしようとするヴィヴィオに呼ばれ

る。ヴィヴィオは俺の方に走ってきて、俺の前で止まる

「どうした？ヴィヴィオ？」

「パパ！ヴィヴィオのみずぎ、にあってる？」

「ああ、とても似合ってるよ」

そこ、ロリコンとか思った奴は後でブラック・オンスロットな

「えへへえ、ほめられたあ！」

「ほら、なのはママと一緒に遊んでくるといい」

「うん！パパは？」

「ん？パパは今からちよつと釣りに行ってくるよ」

「おさかなさんをつるの？」

「ああ、じゃあ、行ってくるな」

「うん！」

なのはの元に走って行くヴィヴィオを見送り、海岸の右端にある岩場に向かう

「ここらへんかな」

手ごろな岩に座る

「トレース、オン
投影、開始」

手にするは、幻想の釣り竿。釣り糸は宇宙クジラの髭を使い、フレームは軟鉄とコバルト、それにチタンの合金。釣針はオリハルコン

「我ながら素晴らしい釣り竿だ。ミミズがないから疑似餌でいいか」

疑似餌のセットを終え、竿を振りかぶる。狙いは磯から50mの地点。そして腕を振るう

「ハッ！」

疑似餌は狙った場所に行き、ポチャンと音を立てる

「後は待つのみか」

そして、待つ事1時間

「来ない…だと？」

さらに1時間

「何故だ…」

さらにたつ事、2時間

「何故、来ない…俺が悪いのか…」

さらに1時間

「諦めよう。そうだな諦めよう。俺は面倒が嫌いなんだ」

俺は釣り竿を破棄し、剣を投影し、待機させる

「こうなりや乱獲だ。圧倒的物量の前にひれ伏すがいい……この魚介類共が！」

「あれ、時谷君？なにやって、って何してるの！」

なのはが俺の腕を掴んでくる

「離せなのは！俺はこの海の魚介類を全滅させるんだ！乱獲じゃあ
！」

「やめてってば！」

「ちくしょお！」

「はあ、なんであんな事したの？」

「だって、4時間待っても魚が掛からなかったから、いつそ剣を撃ちこんで乱獲しようかと」

今俺は正座をしてなのはの前にいる

「いくら掛らなかったからって、剣を撃ちこんじゃダメでしょ！次にあんな事やったディバインバスター三連発だからね！」

「はい、すみません」

「パパ？どうしたの？」

なのはの O H A N A S I が終わるとヴィヴィオが俺に寄ってくる

「ああ、パパな、お魚獲れなかったんだ」

「うん、パパ、よしよし」

ヴィヴィオが俺の頭を撫でる。なるほどこれが俗に言うママいい子く、ヤバイな。破壊力が

「ありがとうヴィヴィオ」

俺は立ち上がり、ヴィヴィオを抱きかかえる

「よし、昼飯食べに行くか」

「うん！」

そのままヴィヴィオを抱えてレジヤースhirtの方へ向かう

「あ、待ってよ時谷君！私も行くよお！」

「お、帰ってきたんやね」

「ああ、はやてか、昼飯ってどうすればいいんだ？」

レジャーシートに戻つてくると、俺やなのは、ヴィヴィオを抜いたメンバーは集まっていた

「今、アリサちゃんが用意してくれてるみたいやから、もう少しやね」

「そっか」

「ヴィヴィオ、おなかすいた」

「もう少しだから待っててな？」

「はい」

ヴィヴィオはそう言ってエリオ達の所に行き、話始める。エリオとキャロがちらちらこちらを見ていることから多分さっきのOHA NA SIについて聞いたのだろう

「みんなお待たせ！」

アリサが大きな箱を持ってこちらに歩いてくる

「アリサ、俺が持つよ」

俺はアリサに近づき、持っていた箱を受け取る

「あら、ありがとう」

「気にするな、男だからな」

そのままアリサと一緒にレジャーシートに戻るとヴィヴィオがこちらに寄ってくる

「パパ！ごはん？」

「そうだぞ、だからちょっと待っててな」

レジャーシートに箱を置き、箱を開くとそこには重箱が三つ入っていた

「重箱？」

「ええ、これだけあれば足りるでしょ！」

「そうだな。うちの大食らいがこれで足りればいいがな」

俺はその可能性を危惧しつつ、重箱を広げる。中には大量のおにぎりが入っていた。ひとつの重箱が五段あったから大丈夫だろうと思っていた時期が俺にもありました

「これ、おいしいねエリオ！」

「はい！」

言わずと知れたスバルとエリオの二人ががつがつ食べていく。既にひと箱が犠牲になった

「パパ！おにぎりって！」

「はいはい、中は何がいい？」

「うーん、おさかなさん！」

「えーと、これが、はい」

「ありがとう！」

俺はおにぎりの中から鮭のおにぎりを取ってヴィヴィオに渡す。中身をどう見切るかって？解析魔術を使ったのさ。そして、三つの重箱、計十五段あったおにぎりが綺麗になくなった。食べ終わった重箱は重ねて箱に仕舞い、レジャーシートの隅に置いておく

「みんな集合！」

なのはが号令をかける

「どうしたんですかなのはさん？」

「うん、いくら休みだからと言って訓練しない訳にもいかないからちょっと食後の運動がてら、少し訓練しよっか」

何を言い出すかと思えば、俺がとった休暇の意味がない

「パパ？」

「ん、なんだい？」

「ママたちなにするの？」

「いつもやってる訓練だよ」

「きょうはお休みじゃないの？」

「その筈なんだけど、なんでだろうな」

なのはの方を見ると、スバル達に指示を出している。どうやら沖にある岩まで泳ぐというものらしい。俺とヴィヴィオを除いた全員が準備体操を終え、海に入り、泳ぎだす

「じゃあ、ヴィヴィオは俺と一緒にここで待ってるか？」

「うん！」

なのは達が帰ってくるまでヴィヴィオと一緒に砂浜で山を作ったり、浮輪っで海に出たりしていた。途中で桃色の砲撃や金色の弾丸やオレンジ色の砲撃など、色々飛んできたがすべて【破魔の紅薔薇^{グレイ・ジャルグ}】で掻き消す

「（なんで競泳で魔法が飛んでくんだよ）」

俺はそう思いながら、時は夕方まで流れ、なのは達が帰って来た。因みに目標の岩は何故か少し削れていた。誰だ削ったの

「お前ら、なんでそんなに疲れてるんだよ！あきらかにこんな時間がかかる距離じゃないだろ！それとなんで岩が削れてるんだよ！」

帰って来たなのは達は砂浜でぐったりしている

「パパ、あのいしはねなのはママがドーンってしてたよ？」

「お前か！」

「だって！」

「だってもない！どうして軽めでディバインバスターが出るんだよ！」

「だって、スバルが一番になりそうだったから……」

「教え子が勝つのが嫌なのか！」

「そうじゃないけど負けたくないもん！」

「はあ、とりあえず皆風呂に入るなり休むなりしてろ。夕食は俺が作っておくから」

「ふえ。いいの？」

「いいから、任せておけって」

「うん、お願いね」

ノロノロと皆起き上がり屋敷に歩いていく

「ヴィヴィオも行ってきたな」

「はーい！」

トテトテとなのはの後に着いて行くヴィヴィオ。それを見送り、レ

ジャーシートの片付けを始め、片付けた荷物の王の財宝に仕舞い、アリサに確認し厨房を借りる。冷蔵庫の中身を確認すると、さすがバニングス家、さまざまな食材が揃っている。

その中から、まず野菜と肉を取り出し、一口大に切っていく。かなり多めに作っておく。スバルとエリオがいるのと、先程の訓練で疲れて腹をすかせている事だろう。肉は塩ダレを絡めておく。切った野菜をフライパンで炒めていく。ある程度野菜に火が通ったのを確認してから肉をいれ炒めていく。肉にもしっかり火が通ったのを確認し、さらに盛り付ける。さらにもう一皿作っておく。この野菜炒めは【サーマルハンド定温保存】で温かいままで保存しておく

次にマグロの塊を取り出し、こちらも食べやすいサイズにさばいていく。切った刺身を円形に盛り付けていく。外円部から赤身、中トロ、大トロ、中央にネギトロの塊を添える。同じものをもう三皿作るそれを台車に載せて、テーブルに配膳していく。

「さて、そろそろみんな来るかな」

俺がそう呟くと、食卓の部屋の扉が開き、なのは達が入ってくる

「いい匂いだね」

「お腹減ったあ！」

「時谷さんすいません。御飯作っていただいて」

「気にするなティアナ。俺が勝手にやった事だから」

「ほな、みんな席に着いてや」

はやての言葉にぞろぞろと席についていく

「それじゃ、いただきます！」

「……………いただきます！」……………」

それからすごかった。作った野菜炒めはスバルとエリオの腹に収まって行き、刺身もどんなくなっていく。フリードには味が濃くなく薄く味付けした肉と、軽くつけた刺身を用意した

「……………ごちそうさまでした……………」

「お粗末さまでした」

食べ終わった食器は台車に載せてバニングス家の人に運んでもらった

「さて、スバル達は早めに寝るんだぞ。明日もあるからな」

スバル達を部屋に返し、ヴィヴィオはフェイトが部屋に連れて行き、寝かしつけている

「さて、俺はちょっと散歩してくるよ」

「うん、あんまり遅くならないようにね？」

「ああ」

なのはにそう言って屋敷を出て、近くにある林に向かう。少し林を進むと開けた場所にでた。そこで空を見上げると、そこには凜と輝く月があった

「きれいな月だな。そう思わないか？」

そう言って後ろを見る。そこには……

n e x t s t r i k e

s t r i k e 19 (後書き)

すいません。今回はとても長くなってしまいましたm(――)m
次回は海鳴休暇編第二部です！はたして時谷の後ろにいた人物とわ
？

strike 20 (前書き)

どうもくりふぁです！

やっと20話です。今回のお話は海鳴市編中編です。
はたして時谷の後ろに現われた人物とわ？

「そうだと思わないか？」

俺はそう言つて後ろを振り向くと、森から人影が出てくる

「そうだね、だが私は君の方が興味がわくな」

「何故お前がここにいる。ジェイル・スカリエッティ」

そこに居たのは今ミッドを騒がせている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティその人だった。すぐさま黒鍵を投影してスカリエッティに投擲するが、スカリエッティが手に着けた手甲で弾かれる

「いきなりだなあ、今日は襲いに來たのではないよ。娘たちも連れていないし」

「不用心だな。この場でお前を捕まえる事も出来るのだが？」

「それは大変だ。だが、君は今ここで私を捕まえるなんて事はしないだろう？」

こちらの考えを読んでき、笑いながらこちらを見る

「なんだ、ばれていたのか」

俺は手に持っていた黒鍵を破棄する

「なあに、当てずっぽうさ。確証はなかった。ただ君に頼みたい事

があつた」

「頼みたい事？」

原作とは違う展開にまたも驚く、レジアスだけでなくスカリエッテイすら原作と違うのか

「その頼みたい事とは？」

「私は最高評議會を殺し、私は【ゆりかご】を発動させる。その為には聖王の器が必要だ。だが君が居ては彼女を【ゆりかご】に乗せられない。そこで相談なん」だが、断る！「…最後まで聞きたまえ」

「俺の前で堂々と誘拐宣言か？もしヴィヴィオに指一本でも触れてみる。貴様ら全員この世に髪の毛一本も残さず消し去ってやる！」

「最後まで聞けと言っているだろう、そう言うと思って解決策はある。あの子の髪の毛か爪があればいい。それもダメなら、彼女を攫うしかない。だが、私を殺しても構わない。その変わり、娘たちは殺さないでほしい」

真剣な表情で語るスカリエッティ、その顔は一人の親の顔だった

「髪の毛一本ならどうにかしてやる。だが、何故【ゆりかご】を起動させる？」

「ミッド、いや、管理局の全体に危機感を持たせる為さ。私はその為に生れてきたような物だからね」

「いいだろう、だが【ゆりかご】はその後破壊させてもらう。そう

すれば俺と言う恐怖が生まれるだろ？ベルカ時代の兵器【ゆりかご】を破壊した奴ともなれば、管理局の上層の腐った連中も慌てて俺を困いこもつとする。そうすればいつでも上層の不正を暴露しても口封じは出来ない」

「ハハハ！君は面白いな、ではもうひとつ、頼みたい」

「なんだ？」

「娘たちを頼みたい。私は娘たちに無理やりプログラムしてやらせたと言うつもりだ。そうすれば娘たちの罪は軽くなるだろう」

「いいだろう。その頼みこの暁 時谷が承った。それとこれが髪の毛だ」

「どこから出したんだい？」

「ヴィヴィオが、前にお守りをくれてなその中に入ってたんだ」

「いいのかい？」

「自分で欲しがっておいて何言ってるんだ。まだ入ってるから大丈夫だ、問題ない」

「そうか、じゃあ私はこれで帰るよ」

「ああ、じゃあな」

スカリエッティは森の中に戻っていった。おそらく転移していったんだろう

「さて、そろそろ俺も帰るか…っ！」

屋敷に帰ろうとすると、上空から何かが飛んでくる。それを転んで交わすと、そこには何かが刺さっていた

「これは、剣？」

地面に刺さっていた剣は茶色く鈍く光る剣

「これは、いや、そんな筈がない」

「対象確認」

「っ！」

声を聞いて空を見ると、そこには銀色の刃の翼、足は剣の形、手にも剣がある

「バカな！ムラクモユニットだと！」

そこには【BLAZBLUE】に登場するキャラの一人で、（二ユー）というキャラがいる。そのキャラの能力は【ソードサマナー】^{ドライン}、その名の通り剣を召喚して攻撃する能力である。俺の投影剣と違い、任意の位置に剣を召喚することができる厄介な能力だ。そして、原作のとの決定的に違うところがある。原作のは銀髪なのだが、目の前にいるは煌びやかな金髪だった

「システム起動」

と思しき人物は、そう唱え、腕をだらりと下げる。感情はこもっていない、それこそ機械を相手にしているように感じる。そしてだらりと下がった腕が上がると同時に俺の目の前の地面から剣が一直線に俺を斬り穿たんと迫る、それを右に交わし、【鋼鉄^{メタル}の歯車^{ギア}】を発動する

「^{ギア}歯車、^{イクニッション}起動！」

俺が選択する歯車^{ギア}はスーパーロボット大戦OG2に登場する「ヴァイサーガ」、姿は全体的に見れば騎士だが、よく見れば尖った濃紺の装甲に鋭い目付き、深紅のマントを纏った異形の騎士

「（どうしてここにムラクモユニットが居るのは分からないが、取り合えず機能を停止させる！）」

「対象の武装を確認。迎撃、迎撃」

茶色の剣が無数と言えるくらい飛んでくるが、こちらも迎撃する

「【烈火刃】！」

こちらも無数の苦無を飛ばす

「【地斬疾空刀】！」

左手に持つ^{ごだいけん}五大剣を抜き放つと同時に、剣を振り、衝撃波を飛ばす。だが、その衝撃波を　は身をひねり交わす

「召喚」

μがまた腕を振り下ろすと同時に巨大な剣、【カラミティソード】が上から落下してくる

「くっ」

未だに剣が降り注ぐ中、飛来する剣を弾いていると、そこに【カラミティソード】が俺に落下してくる。だが落下してくる速度はゆっくりなので他の剣を弾きながらも交わせる

「はぁ！」

一度距離を取り、烈火刃を放つ。μはそれを背中のウイングを自身の前面に展開し、凌ぐ

「これで！【奥義・光刃閃】！」

その隙に突撃し連撃を加えて高速移動で一瞬で の背後にまわり、剣を腰だめに構えて居合の要領で一閃する

「機能停止、機能停止、停止、停止、停止、停止、停止」

が機能停止したのを確認すると、俺は【鋼鉄^{メタル}の歯車^{ギア}】を解除する

「それにしてもなんでここに が居るんだ？」

そう言つて を見てみると、いきなり が飛びあがる

「っ！（しまった！）」

「【蒼の継承者】解除」

がそう言つと、 のムラクモユニットが弾け飛び光の粒子になる。
その光の粒子の中から出てきたのは俺がよく知る少女。三編みに纏
めた金色の髪、開かれる瞳は澄んだ緑色をしていた。彼女の名は【
暁 紗耶】。俺が前世に残してきた妹だった

「さ、紗耶なのか？本当に？」

「うん、お兄ちゃん！」

紗耶が言つと同時に俺は溜まらなくなり、紗耶を抱きしめる

「お兄ちゃん、痛いよ？」

「ごめん、でも、もう少しだけだから」

「うん。分かった」

その後しばらく紗耶を抱きしめたまま約30分くらいたつてから紗
耶を解放する

「紗耶、なんでお前がここに居るんだ？」

「それが」

「それは私が説明しましょう」

声のした方を見るとそこには女神が居た

「なんでお前がここに？」

「あなたの妹さんがあなたの所に行きたいと望んだからです」

「じゃあ、紗耶は向こうに戻るのか？」

「いえ、無理です」

それを聞いた俺は、全身の血が湧き上がるような熱に襲われる。すぐさま【ブラッドサイズ】を取りだし、女神の首筋に突き付ける

「なら、何故連れてきた！お前は謝ってくると言っただじゃないか！戻れないのに連れてくるなんてどういふつもりだ！」

「違うのお兄ちゃん！私は戻れないって分かっててお兄ちゃんの所に来たの！女神さんは悪くないの！」

「じゃあ、父さんはどうなる！」

「お父さんも許可してくれたの！」

「なっ！父さんがそんな事を？」

「うん、もしかしたら戻れないかもって言ったら、行ってきなさいって言うてくれたよ？それとお兄ちゃんにお父さんから伝言」

「伝言？」

俺は女神に突き付けていた【ブラッドサイズ】をしまい、紗耶の目を見る

「うん、お前の父はいつまでも息子のお前を愛している だって」

「そっか（ありがとう、父さん）」

「では、私はこれで」

「ああ、さっきはすまなかったな。頭に血がのぼってな」

「いえ、気になさらないでください」

そう言つて、女神は消える

「紗耶はこれからどうする？」

「聞かなくても分かるでしょ？私はお兄ちゃんと一緒にいるよ！」

「そっか、また護るものが増えたな」

「お兄ちゃん、やっぱり人助けしてるんだ」

「ああ、今、護るものが多くな。大変だが、何としても護りきつて見せるさ」

「そっか、じゃあ私もお兄ちゃんの支えになりたいな」

「はは、お前じゃまだまだだよ」

「むっ」

紗耶は俺の言葉に頬を膨らませる

屋敷に着いて扉を開けると、金色の弾丸が飛びこんでくる

「おかえりパパ！」

「ただいま、ヴィヴィオ」

俺は飛び付いて来たヴィヴィオを抱き上げる

「パ、パパあ！？」

「ん？ねえパパこのお姉ちゃんだれ？」

「このお姉ちゃんはパパの妹だよ」

「ちょ、お兄ちゃん！この子誰！？誰の子なの！」

「あれ、時谷君帰ってきてたんだ」

「ああ、ただいまなのは」

奥の廊下からなのはが出てくる。そして俺の横にいる紗耶に視線を送る

「ねえ、時谷君。その子、誰？」

なのはは後ろに黒いオーラを出しながら聞いてくる

「ああ、この子は俺の妹の紗耶だ。偶然森を歩いてたら会ったんだ。どうやら紗耶も次元漂流者らしい」

「そうなの！？良かったね。偶然森で会えて」

「ああ、それより紗耶を六課で保護したいんだがいいか？」

「うん、大丈夫だと思うよ。あとではやてちゃんに許可をもらえば」

「そうか、じゃあ俺はもう寝るよ。ヴィヴィオも寝ちゃったみたいだからな」

ヴィヴィオはいつの間にか俺の腕の中で規則正しい寝息をたてていた

「うん、妹さんは時谷君の隣の部屋でいいかな？」

「ああ、紗耶もそれでいいか？」

「うん！」

「あ、自己紹介忘れてた。私は高町　なのは。なのはってよんでね」

「暁　時谷の妹の暁　紗耶です」

なのはと紗耶の二人は、握手を交わす。何故か二人の笑み黒く感じる

「（何故かこの子とは対立しそうなもの）」

「（あなたにお兄ちゃんは渡しません）」

こんな事を二人が考えていた事に俺が気付くのはもっと後の事である

ヴィヴィオをベッドに寝かる

「さ、積もる話もあるがそれはまた明日な」

「うん。お休み、お兄ちゃん」

紗耶が部屋から出るのを見送り、窓を見る。そこには綺麗な満月が輝いていた

「（随分護るものが増えたもんだな。六課はもちろん、スカリエツティに頼まれたナンバーズ、そしてヴィヴィオ、それに紗耶も。すべて護るのはキツイが、俺は誓ったんだ。すべて護ると、せめて自分の周りの人達だけは護ってみせるさ……）」

俺もベッドに入る。するとヴィヴィオが服を掴んでくる。そして安心しきった顔をして、眠っている。ヴィヴィオの頭を撫でながら俺も眠る

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.

Strike 20 (後書き)

遅くなつてすいません！

今回は戦闘が少ししかありませんが、如何せん日常パートの描写も酷いww

そんなこんなで今回は海鳴市編後編です

ご質問等がありましたら、言っていたできれば答えていきたいと思っています！

登場武器・技

【ごだいけん五大剣】

登場作品：スーパーロボット大戦A

使用機体：ヴァイサーガ

概要

火・水・地・風・光の五属性を宿した剣。鞘に入れ左手に保持して装備する

【烈火刃】

登場作品：スーパーロボット大戦A

概要

着弾すると炎上する苦無を無数に投げつける技

【地斬疾空刀】

登場作品：スーパーロボット大戦A

概要

左手に装備した剣を振り、その衝撃波で攻撃する技

【奥義・光刃閃】

登場作品：スーパーロボット大戦A

概要

標的に向かって突撃し、無数の連撃を加え怯んだ所で背後に回り込み、居合いの要領で一閃を決める。ヴァイサーガの奥義

strike 20.5 (前書き)

どうもくりふぁです！

やっとテストや資格試験も終わり、更新ができます！

と言っても今回は時谷と紗耶の紹介になります。女神や時谷の父親の事も紹介していきたいと思います

Strike 205

アカツキ トキヤ
暁 時谷

身長 186cm

体重 不明

魔力 EX

デバイス 簞手型インテリジェントデバイス『エクセア』 待機状態はRHと同じ球体宝石型で色は翡翠色

希少技能 『無限の幻想』：あらゆるアニメ、ゲーム、漫画等の能力や武具を使用、召喚する事が出来る

『神体』：宝具の使用や、様々な技の反動に耐えゆる体を持つ

『鋼鉄の歯車』：さまざまなロボットになる事が出来る。サイズは人間と同じ、だが変形機構を持ったロボットにもなる事が出来るが、変形は出来ない

容姿・概要

肩ぐらで乱雑に切られた白髪にスラッと整った顔、細いようでありと筋肉のついた体、高い身長が特徴。

目は翡翠色

家族構成は妹が一人に両親は、母親は妹を産んですぐに死亡。父親は子供二人を男手ひとつで育てあげた

イメージCV：読者の皆様のご想像にお任せします

アカツキ
サヤ
暁 紗耶

身長 155cm

体重 不明

魔力 SSS

デバイス なし

希少技能 『蒼の継承者』：ブレイブルーに登場する武具能力を使う事が出来る

『神体』：アークエネミーの使用するに必要な対価を無くす為と、能力使用による反動を防ぐ

容姿・概要

母親譲りの金髪を腰まで伸ばし、三編みで一本にまとめている。小さい時から兄に面倒を見てもらっているため異様なほど兄が大好き目は澄んだ緑色

過労で倒れた入院中の父を懸命に看病している。兄が死んだ事にショックを受けていたが女神と出会い、兄が別の世界で生きている事を知り、自分行くと言い出し、父からの伝言と兄会いにゆく為に兄と同じなのは世界に旅立つ

イメージCV：近藤 佳奈子

女神

身長 165cm

体重 神の為なし

魔力 EXオーバー

容姿・概要

金色の髪を持ち、エメラルド色の瞳をしている美しい女性、白い布のような服に純白の翼をしていてまさに女神と言った容姿をしている。

時谷をなのはの世界に転生させた張本人。時谷を転生させた手続きを済ませたあと、時谷の父と妹の紗耶の元に姿を現し時谷を殺してしまった事を謝罪する

イメージCV：田中 理恵

アカツキ ユキヤ
暁 幸也

身長 188cm

体重 60kg

容姿・概要

白い髪を短く切り揃えていて、瞳は黒い。時谷と紗耶がまだ小さかった頃に妻の明希を失った。その後、妻を失った悲しみを抱えつつもまだ小さな時谷達を育てる為に懸命に働く。忙しい中家事や子供

の世話も忘れない父親の鏡のような性格。兄のいる所に行くと言った紗耶を笑顔で見送る

イメージＣＶ：小山 力也

アカツキ
アキ
暁 明希

身長 165cm

体重 45kg

容姿・概要

容姿は紗耶をそのまま成長させて胸が大きくなった感じ。常に笑顔が絶えなかった。元々体が弱く、紗耶を生んですぐに亡くなった。

イメージＣＶ：田中 理恵

s t r i k e 2 0 . 5 (後書き)

今回は紹介の回という事でこんな感じな出来になりましたw

現実こんな両親が居たらいいですねえ

次回は紗耶とスバル達の顔合わせです

strike 21 (前書き)

どうもくりふぁです！

テストの追試が終わってやっと投稿できます！

先日学校のイベントでパントマイムを見に行ったのですが、とても面白かったです！人間って体一つでいろいろできるんだなぁと思いました

後書きの誤字を修正しました(12/23)

翌日の朝、一緒に寝ていたヴィヴィオを起こして一緒にロビーに行くと、そこにははやて達と紗耶が居た

「みんなおはよう」

「あ、時谷君おはよう」

「あ、おはようお兄ちゃん！」

「紗耶もいつの間に起きてたんだ？」

「うん、他の皆さんにも会っておきたかったし」

「そうか、それではやて、紗耶のことなんだが。なのはから聞いていると思うが紗耶は俺の妹で次元漂流者だ。六課の方で保護を頼みたいんだが、いいか？」

「了解や、手続きはこっちでしておくわ」

「ああ、頼んだ」

「あ、そうだお兄ちゃん」

俺とはやてが話している間にヴィヴィオと遊んでいた紗耶がこちらを向く

「ん？なんだ？」

「ちょっとお願いがあるんだ」

「お願い？俺でできることなら叶えてやるぞ」

「ほんと？じゃあ、力試しに付き合って！」

「力試し？構わないが、紗耶は戦えるのか？」

「お兄ちゃんは昨日何と戦ってたっけ？」

「ああ、そういえば何なんだあれは」

「それはまた今度！いいから行こ！」

「ちょ、ちょっと待ってっ、はやて！ちょっと模擬戦してくるから！見に来るなら来てもいいぞ」

はやてに言いつつ紗耶に引っ張られる。そのまま屋敷を出て、砂浜に向かう。砂浜に着いたら砂浜一帯に強化結界を張る。ふと横を見ると六課メンバーが揃っていた

「ルールは？」

「うーんじゃあ、使う能力は一つだけでどちらかが降参したら負けつてのは？」

「いいぞ」

「いくよ！【蒼の継承者】発動！（ニュー）！」

「勝てると思うな！【鋼鉄の歯車^{メタル}】発動！歯車起動！^{ギア}【白い閃光^{イクニッション}】！」

紗耶はムラクモユニットを装着する。俺は全身が白い装甲で包まれたネクスト、ホワイトグリントになる。両手にライフルを装備している。大きく左右に突き出したブースターユニットの両端には分散ミサイルポッドが付いている

「いくぞ、紗耶！」

「覚悟してね！」

掛け声を皮切りに、互いに戦闘を開始する。紗耶はソードサマナーを駆使して牽制の剣を飛ばしてくる。その剣をネクストに搭載されているQB^{クイックブースト}を使い交わしながらライフルを発射する。だが、打ち出された弾丸は剣に迎撃されて撃ち落とされる

「やるな！」

「まだまだ！【レガシーエッジ】！」

紗耶の言葉と共に、弾幕がさらに濃くなる。さすがに避けきれずに剣が直撃しそうになるが、当たる寸前で消える。いや正確には”蒸発”しているのだ

「なんで！？」

「紗耶、忘れたか？ネクストにはP A^{プライマルアーマー}があるだろ？」

「覚えてるけど、さすがにみんなが居るところで展開する!？」

剣や弾を撃ちあいながら会話する

「これコジマ粒子じゃなくて魔力だし」

「ずるい!」

「性質似てるだけだから無害だしな」

弾を撃つつPAで剣を蒸発させていく。が、さすがに物量が多く蒸発しきれずに数発胴体に当たってしまう

「く、多すぎる。だが!」

ライフルでの射撃を止め、両肩のミサイルポッドを起動する。そして紗耶をロックオンし、ミサイルを発射する。発射されたのは2発だけだが、紗耶に近づいたときにミサイルに変化が起きるミサイルの周りのカバーがパージされ、中から小さなミサイルが現れ、発射される。紗耶は急に増えたミサイルに対応できずにミサイルの雨にさらされる

「やったか？」

爆煙が晴れるとそこには無傷の紗耶が居た。いや正確には紗耶と”もうひとつ”

「ありがとう、ニルヴァーナ」

【機神ニルヴァーナ】、主人を護る矛と盾。だがその性質は

「なんでニルヴァーナが動くんだよ…そいつは”殺意”に反応して動く筈だ」

そう、本来のニルヴァーナは主人の殺意に反応して敵に攻撃する人形だ。それが殺意なしに動いている

「これが私の能力、【蒼の継承者】、アークエネミーや能力を自在に操る事が出来る」

「厄介だな。それにアークエネミーの同時使用も可能だったりするんだろ？」

「さあ、どうかっな！」

紗耶が腕を振ると、紗耶の正面に穴が空き、そこから鎖の先端に蛇型の鉤爪がついたアンカーが射出される。俺がなのは助けた時に使ったアークエネミー、【ウロボロス】だ。驚きはしたが、ライフルで撃ち落とす

「面白い！じゃあ、これならどうだ！」

両手のライフルと両肩のミサイルを同時起動させる。ライフルを紗耶の周りに撃ちこみ逃げ場を削る。そしてわざと逃げ道を作っておく、ニルヴァーナで銃弾を防いでいた紗耶はその逃げ道に逃げ込むそこに

「もらった！^{ファイヤ}発射！」

逃げ道に飛び込んだのを確認するとともに、起動させていたミサイ

ルを撃ち込む。嵌められたと気付いた紗耶は慌てて回避行動をとるがライフルの弾幕がそれを許さない

「ニルヴァーナ！」

回避が無理だと悟り、ニルヴァーナを遠隔召喚する。召喚されたニルヴァーナは両手で紗耶を包む

「迂闊だぞ！」

紗耶からはニルヴァーナの腕で俺が見えていない。ミサイルの爆煙に紛れ、OBで急接近する

オーバードフースト

「でも、この距離じゃライフルは使えないね！」

「どうかな」

俺はニヤリと笑い、ネクストに搭載されている切り札、アサルトアーマーAAを起動する

「はあ！」

今までホワイトグリントを包んでいたPAを高密度に展開し、それを一気に解放する

解放されたPAは強力な衝撃波になって紗耶を襲う。いくらニルヴァーナとてAAは耐えきれず、機能停止を起こす。防御を失った紗耶はその衝撃波をもろにくらってしまう

「きゃああー！」

AAをくらった紗耶は大きく吹き飛ぶ。ムラクモユニットも耐えきれずにパージされる

「降参するか？」

倒れている紗耶にライフルを突き付ける

「まだ…だよ」

紗耶は腕を振り上げる。俺は本能的に危険を感じ、距離をとる

「これで…終わり！【巨人カケミカツチ】！」
ハイランダー

紗耶がそう叫ぶと、空が光る。空を見ると巨大な魔力砲がチャージされていた

「まさか、待機させてたのか！」

「注意力散漫だねお兄ちゃん」

「くそっ！（どうする、どれなら防げる！？…慌てるな、冷静になれ）」

必死に思考を巡らせる。どんな機体ならあれを防げるか、防ぐ手段はどうするか、そして思考が完結する

「ギア チェンジ歯車変更！【エヴァンゲリオン初号機】！」

全身が紫色をした細身の体。一見貧弱そうに見えるが、その細い腕

にはクツキリと筋肉がついている

「ATフィールド、全力展開！」

今まさに発射されようとしている魔力砲に向けて両手を掲げる。そして俺の目の前に波紋を浮かべた薄い壁が展開される

「タケミカヅチ、発射！」

紗耶の声と共に破壊を齎す砲撃が放たれる。両手に力を入れて来る衝撃に備える

そして、砲撃がATフィールドに直撃する

「くっ」

例え様のない衝撃が両手に響く、だが、ATフィールドはタケミカヅチの砲撃を受け止めている

「はああああ！」

砲撃の照射が終わり、余剰魔力が爆発する

「これで決まれば……………」

そんな…」

風が吹き、煙が消える

「残念だったな。齒車^{ギア}変更^{チェンジ}、【ジェフティ】」

未だ啞然としている紗耶にゼロシフトを使い、背後にまわり、ブレードを展開して突き付ける

「俺の、勝ちだ」

「うん、私の負けだよ」

こうして紗耶との模擬戦は終わった

next strike……

Strike 21（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は登場したものが多かったですね。まあわざとですがw

登場武器・機体

ホワイトグリン

【白き閃光】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

アーマードコア・フォーアンサーに登場するボス的な機体
両手のライフルを連射しつつ隙があればAA（後述）を使用する
パイロットは不明

【機神ニルヴァーナ】

登場作品：BLAZBLUE CONTINUUM SHIFT

使用キャラ：カルル・クローバー

概要

使用者の殺意に反応して敵を攻撃する自動人形オートマトン

攻撃方法はその両手から鋭く伸びている爪で敵を引きさく

一定量のダメージを受けると機能を停止し、自己修復を開始する

ハイランダー

【巨人タケミカヅチ】

登場作品：BLAZBLUE CONTINUUM SHIFT

概要

衛星軌道上に存在する兵器、視認できないほどの上空から都市ひとつを破壊できるほどのレーザーを発射することができる

その威力故に連射が効かず、もう一度発射するのに数年かかるが、

紗耶の能力と有り余る魔力により毎時一発で撃てる

【エヴァンゲリオン初号機】

登場作品：新世紀エヴァンゲリオン

パイロット：碇 シンジ

概要

言わずと知れたロボット。おそらく知らない人はいないであろう人類の前に現われた”使徒”と言われる敵を倒すために作られた人造人間（人間と言ってるが人工筋肉などを使っている為、カテゴリー人間になっている）

他にも零号機や弐号機などさまざまなバリエーションがある

用語紹介

【ネクスト】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

人型起動兵器。パイロットであるリンクスと機体をコジマ粒子という特殊粒子をかいして思考をフィードバックするAMSにより従来の機体より高いパフォーマンスを可能とした機体

だがそのコジマ粒子は人体にとても有害であり、常にその有害粒子に晒されているリンクスは基本的に短命である

ブライマルアーマー

【PA】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

コジマ粒子を薄い膜状に自機の周りに展開し、防御力を高めるこの膜に当たった実弾は蒸発し、レーザーは威力が半減してしまう時谷はコジマ粒子のかわりに魔力で代用している

オーバーードブースト

【OB】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

通常のブースターとは違い、コジマ粒子をチャージする事で爆発的な加速を得る事の出来るシステム

チャージ時間がある為少し隙が出来てしまう

その代わり長時間の加速が可能

クイックブースト

【QB】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

チャージしたコジマ粒子を一気に解放して、爆発的な加速を得る事が出来るが、OBと違いチャージ時間が短い為一瞬しか加速を得る事が出来ない。だがその加速力を利用して敵の弾丸やミサイルの弾幕を回避する

アサルトアーマー

【AA】

登場作品：アーマードコア・フォーアンサー

概要

プライマルアーマーを攻撃に転用した技術。周囲を一掃する大爆発を引き起こすが、一時的にPAを展開できなくなる。爆発には敵からの攻撃を無効化する効果もある

strike 22 (前書き)

アクセス解析をしたらいつの間にか10万を突破していて驚きましたw

こんな駄文でも読んでくれる方が居るのはうれしいことです! 本当
にありがとうございますm (<|> m

これからがんばっていきます! (^-^)

「覚悟してね？」

「がんばってえ！パパ〜！」

下からヴィヴィオの声援が聞こえる。今俺の目の前には金色の死神がいる。なんでこうなったのだろうかと思い出してみる。それは確か今日の朝のことだった

（数時間前）

朝起きてから走りたい気分だったので屋敷の周りを走る。そして部屋で汗を流して食堂に向かうと、丁度なのはがヴィヴィオを連れて朝食を食べにきていた

「おはよう、なのは」

「おはよ時谷君」

「パパ！おはよう！」

「うん、おはよう」

ヴィヴィオが元気に挨拶をする

「丁度よかった。時谷君も一緒に食べよ？朝食、まだでしょ？」

「ああ、ご一緒させてもらっよ」

少し早めのせいか、まだ人はやて達は寝ているようだ。

俺はなのはとヴィヴィオから何が食べたいかを聞き、注文し、料理ができるのを待っている

「おや、曉さんじゃないですか」

「ん？ああ、 balan 料理長」

話しかけてきたのはこの機動六課の食堂の長、そして今回の旅行について貰って来ている balan 料理長だった

「今日はおひとりで？」

「いや、なのはとヴィヴィオが一緒だ」

「そうですか、まるで親子のようですね」

「よしてくれよ。まだそんな歳じゃないって」

「別にいいじゃないですか、ヴィヴィオちゃんを養女にでもしたらどうです？」

「俺はそれでもいいと言ってるんだが、なのはが、な」

「引き取り先を探してるんですけどつけ？」

そう、なのはは原作道理にヴィヴィオの引き取り先を探している。
が、なかなか見つからず困っているようだった

「まあ仮に引き取り先が見つかったとしてもヴィヴィオちゃんは嫌がるでしょうね」

「かもな」

「あ、料理、できましたよ」

「ああ、ありがとう」

「いえいえ、後、ヴィヴィオちゃんのからはピーマンは抜いてあります」

「おいおい、あんまり甘やかすなよ」

「子供は笑っている方が可愛いですから、あとこれを」

そう言って balan 料理長はもうひと皿料理を出す

「ん？これは？」

「フェイトさんが向こうに見えたのでついです。フェイトさんは朝は同じものしか食べませんので」

そう言われてなのはの方を見るとフェイトも一緒に座っていた

「そうか、ありがとな」

俺が礼を言くと balan 料理長はニコツツと笑って厨房に帰っていった
俺は皿を四皿抱えてテーブルに向かう

「あ、おかえり時谷君、あれ？そのお皿は？」

「これはフェイトのだってさ、balan 料理長がついでで作ってくれたんだ」

「そうだったんだ、ありがと時谷」

「礼は俺にじゃなくて balan 料理長に言ってやってくれ」

「うん、後で言ってくるよ」

「それと、ヴィヴィオ？」

「なにパパ？」

「balan 料理長がピーマン退けておいたって」

みんなの分をおきながら、ヴィヴィオに言う

「ほんと！？balan さ〜んありがとう！！」

ヴィヴィオは厨房に向かって大きな声でお礼を言う。すると balan

料理長がひょこつと出てきてヴィヴィオに小さく手を振る

「いただきます!」

ヴィヴィオが手を合わせてから朝食を食べ始める

「いただきます」

俺たちも食べ始める

「そついえば時谷?」

「なんだ?」

フェイトが話し掛けてくる。いやな予感がする

「まだ、私と模擬戦してないよね?この後模擬戦しよ?ね?」

バトルマニア
戦闘狂降臨!じゃなくて、目を輝かせながら俺に詰め寄るフェイト、
いや、ね?って言われても

「ちょっとフェイトちゃん、時谷君に近づきすぎだよ?」

「あ、え、あ、の、こ、これは」

フェイトが顔を真っ赤にして俺から離れる。と同時にヒュッつと音がしてその方向を見ると包丁が飛んできていた

「危なっ!」

咄嗟に顔を傾けて避ける。飛んできた方向を見ると、バルン料理長がとつても”いい笑顔”でこちらを見ていた

「（まで、俺が何をした！？なんか怒らせるようなことしたっけ！？）
「

（バルン料理長はフェイトのことが好きです。フェイトも満更でもない様子）

「で、模擬戦してくれるの？」

「まあ、それは構わないがいつから始める？」

「じゃあ、十時頃にしよう」

「わかった」

「じゃあ」

そう言つてフェイトは去って行った

（回想終了）

「それじゃいくよー」

フェイトがバルディッシュを構えて、得意の高速機動でバルディッシュを振るう

「トレース 投影、オン 開始」

腰に剣を投影する。【逆刃刀・真打】不殺を志した剣士が折れてしまった愛刀の代わりに手にした刀

「はっ！」

フェイトのバルディッシュの斬撃を回転して回避に背後に回る

「【龍巻閃】！」

そのまま回転の勢いを殺さずに抜刀とともに背中に向けて斬りかかる

「くっ」

フェイトは振った勢いを殺さずに一気に距離を離す。そして振り返り様にフォトンランサーを8発、待機させる

「撃ち抜け、ファイヤ！」

待機していたフォトンランサーが主の言葉に従い俺を撃ち抜かんと高速で殺到する

「当てられると思うな！」

8発のフォトンランサーの内、6発を弾き、2発は回避する

「はあ！」

フェイトはバルディッシュをサイスフォームにして斬りかかってくるのを真打で防ぐ

「強いね、時谷」

「お褒めに預かり光栄だ、な！」

鍔迫り合いの状態から力を込めてバルディッシュを弾き、刀を振るが、避けられる。俺は諦めずに空いた距離を詰めつつ、刀を納刀する

「【双龍閃】！」

フェイトに近づき抜刀するが、回避される。だがこの技の真価はここからだ

回避したフェイトに対して更に踏み込み、鞘を振るう

「なっ！」

完璧に避けきったと思っていたフェイトは鞘による打撃をまともに受け、ビルの壁を破壊してビルの中に吹き飛ぶ。そこでまた真打を納刀し、魔力弾を待機させる。その数50

「殲滅せよ！ファイヤ！」

50もの魔力弾がビルの壁を更に破壊しながらフェイトを仕留めんと撃ち込まれていく

「これで、終わりか」

黙々と煙が立つ。これで終わりかと思っただ

「なかなか骨があるじゃないか」

煙の壁を突き破り、フェイトがザンバーフォーム（カラミティではない）のバルディッシュを振るってくる。それを納刀状態の真打で防ぐ

「さっきのは危なかったよ？でもあんまり甘く見ないでほしいかな」

「そうか、じゃあ本気で行くぞ…」

一度距離を空け、居合いの構えをとる

「今から放つのは龍の閃き、かわせるか？」

「かわさないよ。迎え撃つ！」

フェイトもザンバーを構える

「撃てるものならな！【天翔龍閃】！」
あまかけるりゅうのひらめき

「撃ち抜け雷神！ジェットザンバー！」

光速の斬撃と神速の抜刀、勝負は明らかだった

「俺の…勝ちだ」

「うん、私の負けだよ」

その言葉を最後にフェイトは崩れ落ち、落下する

「おっと」

それを急いでキャッチする。フェイトの顔を見ると満足気に笑いながら眠っていた。俺はそのままフェイトを抱えながらなのはとヴィオオの所に向かう

「パパ〜!」

フェイトをなのはに預けるとヴィヴィオが飛び付いてくる

「パパすごいね!」

「ありがとうヴィヴィオ、さてそろそろお昼だから御飯食べに行こうか」

「うん!」

そう言って抱きつく力を強くしたヴィヴィオを抱っこしながら食堂に向かう。その後、ヴィヴィオを降ろした所でまた包丁が飛んできたのは忘れよう

next strike.....

Strike 22（後書き）

今回はフェイトとの模擬戦でした！いかがでしたでしょうか？
個人的にはうまく書けているつもりなのですが（汗

ご質問などがあれば気軽に聞きください。全力でお返事いたします

登場武器・技

【逆刃刀・真打】

登場作品：るろうに剣心

使用者：緋村剣心

概要

志々雄一派の十本刀の一人、“天剣”の宗次郎に真つ二つにされた
逆刃刀と同じ製作者、新井赤空が最後に打った刀

285

【龍巻閃】

登場作品：るろうに剣心

使用者：緋村剣心

概要

回転による遠心力を利用した技。相手の攻撃をかわし、そのまま回
転しながら相手の背後に回り込み、後頭部や背中に打ち込む技

【双龍閃】

登場作品：るろうに剣心

使用者：緋村剣心

概要

二段構えの抜刀術、抜刀がかわされた場合に無防備になる為、斬撃
の勢いを利用した鞘での次撃に繋ぐ二段技

あまかけるいゅうのひらめき

【天翔龍閃】

登場作品：るろうに剣心

使用者：緋村剣心

概要

超神速の抜刀術、本来右足で行う抜刀術と違い、抜刀の瞬間に左足を踏み出すことによって”神速”の抜刀術を”超神速”に昇華させる。

初撃をかわされたとしても、超神速の刀が空を切ることによって弾かれた空気が敵を打ち据えて行動を阻害し、さらに空気が弾かれてできた真空空間が元に戻ろうとする作用が相手を引き寄せ、回転による遠心力も加えたさらに強力な二撃目で斬る、二段構えの抜刀術

strike 23 (前書き)

どうもくりふぁです！

今年初めての投稿になります。この小説を書き始めてもう半年近く経ちますが、まったくポイントが伸びないw

いえ、正確には伸びているのですが、更新が不定期なため、落ちたリ上がったりしていますw

お気に入り登録は順調に増えています。うれしいです！

今年もがんばって更新していこうと思います！

フェイトとの模擬戦を終えて屋敷に戻ると、みんな揃っていた。みな口々にさっきの模擬戦についての感想を言う。さっきの技はなんだの剣で斬ったのになんで斬れていないだの模擬戦しようだの（by シグナム）

「いいからもちつけ、じゃなくて落ち着け！あと模擬戦はしないぞ」
そう言うとシグナムは若干しょんぼりしながら去っていく。模擬戦の事しか頭がないのだから

「そうではやて、今日はどうするんだ？」

「ん？そやね、そんじゃ今日は自由行動にしようか。観光するなりなんなりしてええで」

そしてその場は解散となった。それぞれの予定を立てながら部屋に戻っていく。どうやらスバルとティアナと紗耶は街に観光に行くようだ。エリオとキャロは仲良く散歩に出かけるらしい。はやてとヴオツケンリッターの面々は世話になった人に会いに行くらしい。そして俺となのはとフェイトはというと

「たっただいまー！」

なのはの実家こと、高町家が経営する喫茶店『翠屋』に来ていた事の発端はなのはがヴィヴィオを紹介しに行こうと言い出したことである。初めに俺は断った。行ったら確実にシスコンに斬られそう

になるからだ

だが、ここでののはの一言

「ヴィヴィオのパパでしょ？」

こう言われてはぐうの音もでない。さらに

「パパは来てくれないの？」

とどめの一言だった。無理だよ…あんな目で（涙目＋泣きそうな顔）見られたら断れない。因みにこの場にフェイトはいない。なんでも執務官の仕事が入ったそう。バランス料理長と一緒にやる執務官の仕事なんてどんなことだろうな

「おかえりなさいなのは！」

「お母さん！」

なのはは店の奥から出てきた女性と抱き合う。店の奥から出てきたのは高町 桃子さん。なのはの母親だ。だが、抱き合う姿はどう見ても姉妹にしか見えないが親子なのだ。

「おかえりなのは」

店の奥からもう一人男性が出てくる。この人が高町 士朗さんなのはの父親だ

「ただいまお父さん！」

「ねえなのは？そちらの女の子と男の人は？」

桃子さんが俺とヴィヴィオを見て言う。その桃子さんの言葉に士朗さんもこちらを向く

「初めまして、暁 時谷といいます。なのはさんと一緒にお仕事をさせていただいています。それでこの子が」

「ヴィヴィオです！よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします。元気ね」

桃子さんがヴィヴィオの前で膝を曲げてヴィヴィオの頭を撫でる

「暁君か、よろしく」

士朗さんが手を差し出す。それを握り返す

「はい、こちらこそ」

「あれ？お父さん、お兄ちゃんたちは？」

「ああ、多分家の道場にいるだろう」

「ありがと！ちよつと言ってくるね！」

なのはは笑顔で店を出ていく。ヴィヴィオは桃子さんに抱っこされている

「暁君、少し聞きたいんだが」

「時谷でいいですよ。なんですか？」

「君はあの子をどう思っている？あの子は僕でもわかるくらいに特別な何かを感じる。それも多くの人間がその力を利用しようとするだろう。君もその一人なのかい」

士郎さんがそう質問してくる、その質問に俺は自分の考えを言う

「あり得ませんね、断言します。俺はヴィヴィオやなのはを護るために今の仕事場にいます。むしろ逆ですよ。利用しようとする奴がいるなら、たとえこの手を血に染めても護ります。俺がヴィヴィオをどう思っているかでしたつけ？泣き虫で、寂しがり屋で、甘えん坊な可愛い娘ですよ」

ヴィヴィオを利用する？何を馬鹿なことを、そんなことするくらいならそんな世界、俺が消す

「その言葉を聞いて安心したよ。それで？なのはの事はどう思っているんだい？」

「どうって、仲間ですよ？」

「そうじゃないさ、異性として、だよ」

「んな、そ、それは」

「ははは！そんなに慌てなくてもいいだろう？なんなら僕の事はお義父さんと呼んでくれたまえ」

「なに言ってるんですか！まだそんな気は」

「まだ？ほうじゃあ後々は」

「う、でもなのはがどう思っているかわかりませんから」

「そうかな？君と会話しながら店に入ってきたなのはの顔はとても
幸せそうだったよ」

「そうなら嬉しいですね」

「パパ」

士朗さんと会話しているとヴィヴィオが俺の服の裾を引っ張っていた

「ん？どうしたヴィヴィオ？」

「なのはママ帰ってきたよ」

店の扉を見るとなのはと、黒髪の男性と同じく黒髪の女性がいた

「ふうん、この人がなのはの言ってた人？」

「うん、暁 時谷君だよ」

「そっかあ、私は高町 美由希、なのはの姉です。で、こっちが」

「高町 恭也だ。これだけは言っておく、お前になのはは渡さん！」

なんか宣言されたが、恭也さんの横に桃子さんが立っていた

「きよ・う・や？あなたにちょっとお話があるから来なさい」

「ちよ、か、母さん！なんで！？」

「い・い・か・ら、来なさい」

「…はい」

そのまま恭也さんはズルズルと引きずられていった。おそらく『お話をされるのだろう。ご愁傷さまです

「で、この子がヴィヴィオちゃん？」

「うん、そうだよ」

「うーん！可愛い！」

そう言ってヴィヴィオを抱きしめる美由希さん

「そうだ時谷君」

「なんです？」

隣に居た土郎さんが話しかけてくる

「少し手合わせ願いたいんだが」

「嫌です。絶対に嫌です。謹んでお断りします」

「そこまで嫌かい？」

たまったもんじゃない、誰が好き好んで戦闘民族高町家の長と戦わなければいけないんだ

「嫌ですよ。っ！すいません。ちょっと出てきます」

俺は外から敵意のある気配を感じた

「ん？っ！なるほどここは僕に任せてくれ」

士郎さんも感じたのか、素直に聞き入れてくれた

「はい、お願いします」

俺は翠屋を出ていく。外に出て、近くの公園まで行って結界を張ると、数名の魔導師が現われる

「誰だ？何が目的だ」

「我々は『クリサリア』反管理局組織だ」

「で？その反管理局組織が何の用だ？」

「貴様にはここで消えてもらっ」

魔導師が各々のデバイスを構える。基本的にはミッド標準型が大半だが、一人二人カスタムタイプがいる

「来な…、相手をしてやる」

バリアジャケットを展開し、拳を構え、魔導師達に突っ込む。魔導師達が魔力砲や魔力弾を撃ってくるが、魔力砲は回避して魔力弾はパリイする

「ふんっ！」

魔導師のデバイスを掴み、引き寄せながら喉に肘打ちをいれる。そのまま顔面に裏拳を叩き込み、気絶させる。すぐさまその場を飛び退き、放たれた魔力砲を回避する。砲撃を撃ってきた魔導師に近づき、デバイスを弾き飛ばし鳩尾に拳をめり込ませノックダウン

「こいつ！」

魔導師の一人がカスタムデバイスを振り被り、殴り掛かってくるが体を反らして左腕の関節を外して首筋に手刀をいれ意識を刈り取る

「援護しろ！俺が行く！」

残ったのは三人、カスタムデバイスの魔導師と標準型が二人残っている。魔力砲と魔力弾が撃ちこまれるが、すべて回避し、突進する。カスタムデバイスの魔導師がデバイスで突きが繰り出されるが、すべて弾く

「これをかわすか、ならこれなら！」

魔導師はデバイスの先端に魔力弾をセットする。魔力弾を警戒して構えるが、魔導師はそのまま突きを繰り出し、俺の眼前で魔力弾を発射した

「なっ!？」

突然過ぎてかわせず、腕でガードするが腕が耐えきれず弾かれる

「もらった!」

隙だらけの俺に先程と同じく魔力弾がセットされたデバイスを突き出されて魔力弾が発射される。が、上体を大きく反らして、回避しデバイスを両手で掴む

「なんだと!？」

その状態からデバイスを軸にして左足で体で支えて右足で魔導師の首筋に蹴りを蹴り込み昏倒させる

「なんなんだよ…あいつ」

「くそっ逃げっ!？」

逃げようとする魔導師をバインドで補縛する。補縛した魔導師に近づく

「さあなんで俺の事を狙うのかと何故俺がここにいた事が分かった?」

顔に笑顔を浮かべながら俺は手に黒光りする物を構えながら聞く。

魔導師達が廃止した子供でも人を殺せる道具、拳銃。その中でもハンドキャノンと言われるデザートイーグルにマグナム弾を装填しながらしっかりと魔導師達の眉間に照準を合わせる

「い、言う！言うから殺さないでくれ！」

「おりこうさん、さあ言え」

「三編みをお下げにした女が教えてくれたんだ！管理局の強力な局員が居る、その局員を倒せば名が挙がるって言われてな」

「（三編み、お下げ、女、クワットロか）他には何か言ってたか？」

「ああ、あんたを倒した暁には兵器提供してくれるってな」

「そうか、残念だったな俺を倒しても名は挙がらないぞ。俺そんなに有名じゃないしな、そうだな、この場は見逃してやろう。ただし条件がある」

俺は魔導師を見逃す代わりにある条件を提示する

「条件？」

「ああ、俺の名をできるだけ広める。たったこれだけだ。俺のことは”蒼”と呼べ。そして轟かせろ。この”蒼”の名をな」

魔導師に殺気を叩きつける

「わ、わかった！」

そう言つて魔導師の二人は倒れた三人を抱えて飛び立っていった

「これで俺の名前が広まるな。こうすればなかなか手を出してこないだろう（それにしてもスカリエッティの指示じゃないとすればクワットロの独断か？あの眼鏡め、髪をおろして眼鏡はずせば美人だからって調子に乗るなよ（まったく思つてキレる理由になつていない）。この俺にケンカを売ったことを後悔させてやる）」

俺はあの腐れ眼鏡を叩きのめす決意を固めて翠屋に戻る

「ただいま」

「あ、時谷君お帰り、それと静かにね」

なのはにそういわれてなのはを見ると、イスをくつつけてそこにヴィヴィオを寝かして膝枕をしていた

「そういうことが、うんわかった」

そつと寝ているヴィヴィオの頭をなでる

「そうだ、お父さんたちが、今日はもうお店閉めるから家に来てくれだつて」

「そうか、それじゃ行こっか」

俺は寝ているヴィヴィオを起こさないようにおんぶして翠屋を出る。なのはも俺に続いて翠屋をでて、扉に鍵をかける。そのまま二人並んで高町家に向かう、空はいつの間にか夕日色に染まっていた

n e x t s t r i k e

strike 23 (後書き)

すいません、いつの間にか年を越して、すでに前回の投稿から一か月以上たつてしまいました。スランプとまではいきませんが、新年からいろいろ忙しく、レポートや課題など、もう嫌になりますw
そろそろ部活に後輩が入ってきます。今の一年生の指導が終わったと思ったらまた後輩が入部してくると思うと、時がたつのが早いと感じます

では、また次回！

strike 24 (前書き)

どうもくりふぁです！今回は投稿が遅れてしまい申し訳ありませんでしたm(_____)m

今後はなるべく早く更新していこうと思っています（注：あくまで思っているだけですw）

如何せんネタがない、困るとすぐに戦闘を入れてしまうw

さて今回はスバルの強化です。短くなるかもしれません

先ほど翠屋をでて数分、俺は高町家の前に居る。しつかりした門に奥には道場らしきものが見える。俺となのはは門をくぐり、玄関を開け中に入る

「ただいま」

「お邪魔します」

ヴィヴィオを起こさないように慎重に抱きなおし高町家に足を踏み入れる

「あら、おかえりなさい。ヴィヴィオちゃんは寝ちゃったのね」

玄関からリビングに行くと、夕飯の支度をしている桃子さんが出迎えてくれた。やはり三児の母には見えない。ヴィヴィオと並べてやつと母親に見えるだろう。人間って不思議だな

「ただいまお母さん、ヴィヴィオが寝ちゃったんだけど」

「じゃあ、とりあえずはあなたの部屋に寝かせておいたら？」

「うん、じゃあそうするね」

なのははリビングを出ていく、おそらく今言ったなのはの部屋にヴィヴィオを寝かせにいったんだろう

「ねえ、時谷君？」

「はい？」

なのはがりビングから出ていくの見送ると桃子さんが話しかけてくる。その目は、まるで小さな子供を心配してやまない母親の目だった

「あの子は、なのはちゃんとやってる？」

桃子さんのその言葉には、多分だがいろいろな意味があるんだろう。仕事のことや私生活など、あげればきりがないだろう。それをすべて含めて俺は答える

「俺と一緒にいたのはここ数週間ですから、傍から見たらちゃんとやっているように見えるでしょうね。でも、俺から見たらなのはに周りが頼りすぎだと思いますよ」

俺が言えたことではないが、アニメを見てた時から思っていたことだ。小学生のころからエースと言われ期待を寄せられ、それに答えようと必死に頑張つて、そのせいで怪我をしてもまだ魔導師であり続けようとしている。とてもじゃないがあんな小さな肩にどれだけの期待という重荷が背負わされているんだろうか。それはフェイトやはやてにも言えることだ、エリオやキャラ口に至ってはまだ友達と遊びまわってもいい年頃だ。有能、その一言だけで戦場に出されるのだ。それを止められない自分が殺したくなるほど悔しかった、今までではただのアニメの中での話だったが、今の俺は当事者なのだ。どうにかしてやりたい、でも自分にはそんな権力もなければ力もないいくら神から力を貰ってもそれは破壊の力だ。だからせめて、エリオたちが無事でいられるように、俺はその破壊の力のすべてを尽くして護つて見せる。俺が持っている力は”護るための力”だ

「だから、出来ればですが、俺がなのはに頼られるようになりたいです。いえ、なって見せます」

俺は桃子さんに俺が固めた決意を伝える

「そう、なのはをよろしくね。時谷君」

「はい」

「あれ？時谷君にお母さん、今なんか話してた？」

そこにヴィヴィオを寝かしつけたなのはリビングに戻ってくる

「いや、なんでもないよ」

「ええ、何にも」

そういつて桃子さんと笑いあう

「ん？」

それをキョトンとした表情でいるなのは

「なのはそろそろ戻らないと」

「え、でもヴィヴィオが」

「そっか、うーん、どうしようか？」

「なんなら今日は泊まっていけば？」

俺となのはが悩んでいると桃子さんが提案する。確かにそれならなのは問題ないだろう

「じゃあ、なのははそうするといい。俺は戻るから、はやてにも俺から言っとくし」

「なんで？時谷君も泊まっていけば？」

「俺はいいよ。やりたいこともあるし」

「そう？じゃあお言葉に甘えて、お母さん！今日の晩御飯なに？」

目をキラキラさせて桃子さんに晩御飯の献立を聞くなのはは年相応の笑顔をしていた

「それじゃ俺はこれで」

「ええ、いつでもいらっしやい」

「機会があれば」

俺は桃子さんに挨拶し、高町家を出て宿泊先の屋敷に戻る

「ただいま〜っと」

「あ、時谷さん！お帰りなさい」

俺が屋敷に戻ると、中にいたのはスバルだけだった

「ああただいま、他の皆は？」

「エリオとキャロとフェイトさんは買い出しで、部隊長たちはまだ帰ってきてません。ティアは今部屋で寝てます」

「そうか、丁度いいスバルちょっと外にでろ」

「？、はい」

俺はスバルを連れて屋敷を出ると、屋敷前の砂浜に向かった

「あの〜時谷さん、これから何するんですか？」

俺はスバルに聞かれたので答える

「ああ、ティアナにはもう教えたから次はスバルの番ってことさ」

「もしかして、この間言ってた強くしてやるってやつですか？」

「まあ、そういうことになるな。ま、ティアナにも教えたのは一つだけだからスバルにも一つだけだけだな」

「一つだけ、ですか」

どこかで聞いたことのある言葉が聞こえたのでスバルのほうを見る。
そこにはこれまたどこかで見たような顔浮かべていた

「お前らやっぱりいいコンビだ」

「え？」

「ティアナに教えた時も、一つだけって言ったらお前と同じ台詞で
今のお前みたいな残念そうな顔をしたんだよ」

「そうなんですか」

「確かに教えるのは一つだけだが、ティアナにはそこからお前なり
に応用しろって言ったがな、多分スバルも応用できるさ」

「応用ですか、私そこまで頭よくないんで、自信ないです」

「そうだな、そうやって自分を卑下にしてちゃあだめだ。自分では
きくと思えば結構でできるものさ」

「そういうものですかね」

「そういうものだ。さて着いたぞ」

着いたのは目的地の砂浜よりちよとはずれにある岩場だ

「ここで何をするんです？」

「まあ、見てろ。あ、それとバリアジャケットは展開しておけ」

俺は俺自身の身長より大きい岩の前に足を肩幅開いて立つ

「【タイラン！

左足を踏み出し、炎を纏った左手で岩を打ち上げる。そして落ちてくる岩に向かって、左手とは比べ物にならないほどの炎を圧縮し、右足を踏み出し、右手で岩を殴ると同時に圧縮した炎を開放する。

レイブ】！」

爆発に近い力の影響を受けた岩はたちまち爆散した

「す、すごい…」

「と、まあこんな感じだ。射程はお前のデイベインバスターよりも短いから注意しろよ」

「あ、あの時谷さん。私炎なんて出せないんですけど」

「それは炎の部分を魔力に置き換えるんだ。お前はデイベインバスターで収束はできてるから、あとは収束のさらに上の凝縮した魔力を開放すればいい。ただし砲撃みたいに撃つとダメージが全部通らないから、砲撃のような”点”の開放じゃなくて”面”で、砲撃よりも広範囲に拡散させる感じだな」

「感じと言われても」

「習うより慣れろ！実際にやってみるぞ。そうだなあ……あそこの岩が丁度いいだろ」

俺が見つけたのは先ほどの岩より二回りほど小さな岩だ

「まず、両足を肩幅に開く」

スバルが肩幅に足を開いたのを確認する。いつも思うが、足の露出高くないか？防御もくそもあったもんじゃないぞ。まったくけしからん。ティアナの絶対領域もだ、狙つてるとしか思えん。これはあの狸の策略かいぞ、もっとやr（ry（注 時谷君はもとはヲタクですからこのような思考を持ち合わせています。ちなみに作者も同感ですby作者）

「次に両手に魔力をためる。左は収束でいい。カードリッジは大体二発だな」

「なんで両手なんです？」

「最初から圧縮し始めたほうが楽だろ。因みに左が収束なのは敵を怯ませるのににそんなに全力でなくてもいいからだ」

「怯ませる？打ち上げるんじゃないんですか？」

「打ち上げたら、相手に体制を立て直す隙を与えるから空戦魔導師じゃないお前は打ち上げず、怯ませて一撃にすべてを込めて撃てばいい。今は練習だから打ち上げるんだ」

「はい！」

スバルはカードリッジを二発、ロードされる

「よし、次は左足を踏み出してから左手で岩を打ち上げる！」

スバルはグツと踏み込み、左手で岩を高く打ち上げる

「視線はそのまま真っ直ぐ！落ちてくる岩を視界に入れた瞬間に右足を踏み込み、右手でインパクト！」

落下してくる岩に、スバルは右足を前に踏み出し、右手に凝縮した魔力を岩が目の前に落ちてくると同時に右手のナックルのスピナーを回転させ突出し、開放する！ 綺麗に円形状に開放された空色の魔力は岩全体を捉え、爆散させた

「で、できた…できたあ！」

その場でピョンピョンとジャンプするスバル

「よくやったな。上出来だ。あえて言わなかったのによくナックルのスピナーに気付いたな」

「はい！面で解放しろって言われて、普段は収束しやすいように回転させるんですけど、放出と同時に回転させればいいかなって思ってた」

やはりこれも才能だろう。あの一瞬で気が付くなんてな

「今のイメージを忘れるな。きっとこれはお前自身や仲間を”護るための力”になるだろう」

「はい！」

「それじゃ戻るか、そろそろはやてたちも帰ってきてるだろ」

そういつて俺は屋敷に戻るために岩場をあとにする

「待つてくださいよお！時谷さ〜ん！」

その俺の後に続くスバル。俺とスバルはうす暗い道に戻っていった

n e x t s t r i k e

Strike 24 (後書き)

今回はスバルの強化のはずが、なのはの話までw
他の作者様はバレンタインネタを書いているがすごいと思います
自分には想像もできないほどバレンタインの経験がないのでw

登場技

【タイランレブ】

登場作品：GUILTY GEARシリーズ

使用キャラ：ソル"バットガイ

概要

本文では左手からだったがこの技は本来右手でアッパーを繰り出し、
左手で殴る技ですが、スバルのナックルが右についていることから、
今作では左手からになっています

strike 25 (前書き)

どうも、くりふぁです！ISのシャルロットが可愛すぎて生きるてるのが辛い今日この頃です。シャルロットちゃんマジ天使。そして杏子ちゃんマジ聖女

最近ISの二次創作が増えてきました。アニメ放映前は4、5作品くらいしかなかったはずですwその作品を見てると書きたくなってきますねw私は二作品も連載するなんて器用なマネはできないのでこの作品を完結させてからです

今回のお話は海鳴編終了です

一か月近く開けてしまいすいません>m(_____)m<

俺とスバルは屋敷に戻り夕食を食べ終え、特にそれと言ったイベントもなく休暇最終日の朝を迎えた。俺は最終日の予定を話す為、ロビーに全員を集めていた

「さて、今日で休暇も最終日を迎えたわけだが、今日の予定なんだな。昨日のように自由行動にしようかと思ったんだが、それもつまらないので意見を募ろうと思う。何かいい案はないか？」

皆を見渡すが、これといった事が思いつかないように誰も声を上げない

「誰もいないのか？何もないなら俺の特別訓練コースに一日中付き合ってもらうことになるが、構わんか？」

「ねえお兄ちゃん。その特別訓練コースって具体的にどういうの？」

「そうだな、俺が作った高濃度AMF空間で魔力制限バンドと重りをつけての体力、魔力強化や本気の俺との模擬戦をここにいるのが12人だから、一人ずつ2時間ぶつとうして休憩無しでやるとか、他にもいろいろあるが？」

「前者はまだしも、後者はただのやりただけじゃないの？それ」

俺の案に疑問を浮かべる紗耶

「よく分かったな。さすがは俺の妹だ、確かに俺との模擬戦は、た

「だ俺がやりたいだけ。なんなら二つをミックスしてもいいぞ」

「そこまで行くと虐めの域だよ」

「そうか？…んっ？」

会話に割り込むようにモニターが開く。そこに映っていたのは

「なんだクロノか、なんの用だ？」

「ああ、休暇中にすまないな。緊急事態だ。現在ロストロギア、『黯ノ書』を所持した次元犯罪者グループが海鳴市に逃げ込んだ。こちらでも搜索はしているが、奴らの一味に相当な手練れに結界師がいるらしく、レーダーはすべてダウン。センサーも同じ状況だ。そこで機動六課に出動要請がだされた。僕は休暇中だからと渋ったんだが、結局こうなってしまった。頼めるか？」

「だ、そうだが？どうするはやて？」

「そやね、そんな危険な連中がここに来とるんやったら無視はできない。みんな休暇は中止や！隊長は出動準備！今回は空戦やからFWは今回は待機や。シャルとザフィーラもうちとここに待機して指示をだす、シグナムとヴィータと紗耶ちゃんはここの直援をお願いや」

「……………了解！……………」

「はやて、俺は？」

「時谷君はなのは隊長達に着いてってあげてな。二人が無事でいら

れるように」

「了解した」

屋敷中にアラート音が鳴り響く。俺が設置しておいたセンサーが反応したのだろう。そこまで広くは展開していないため、もう近くまで来ている可能性が高い

「はやて！もう近くまで来てる可能性が高い！俺は先に出るぞ！」

「お願いや」

その返事を聞くが早いのか、俺はバリアジャケットを展開し、屋敷を飛び出す

「あれか」

屋敷から数百メートルの海上に三人の人影が見えた

「お前らが次元犯罪者だな？」

「確かに、だが我らは貴様に用はない。聖王の器を渡してもらおうか」

「聖王の器？はて、なんのことだ？」

「恍けるな！貴様らがヴィヴィオと呼んでいる少女のことだ！」

そう言つて俺に剣型のアームドデバイスを向ける。大体50代前半といった歳だろう

「その名前を、お前みたいな奴が呼んでいい名前じゃねえ！」

俺はすぐさまベルヴェルクを召喚し、アームドデバイスを持つに向けて連射するが、三人の魔導師は散開して、回避する。はやての言っていた通りの手練れのような。なんとかなのは達が到着するまで時間を稼ぐしかない

「おい」

敵の一人が指示を出す。すると、結界魔導師が結界を張る。解析したが、相当強力なもので破るのは難しそうだ

「3対1か、弱い奴のやる事だな」

「貴様を殺せるなら構わんさ”蒼”よ」

「ほう、その名を知つて尚、俺に挑むか」

敵の一人が銃型のデバイスを構えて俺に狙いをつける

「てめえを倒して、女どもは全員捕まえて、男は皆殺しだあ！」

「聞かなくても分かるが、捕まえてどうする？」

俺の問いに結界魔導師は厭らしい笑みを浮かべて

「全員犯して孕ませる！」

そう宣言した瞬間、すぐさま【ウロボロス】を召喚し、銃型のデバイスを持った奴を縛りあげる

「死ね」

「な、いつの間に！」

「喋るな、屑が！」

絡めた【ウロボロス】を更に締め上げ、一気に鎖を引き戻し、ズタに引き裂く。引き戻した鎖を再度射出し、体を貫く

「な、この…俺が」

鎖を引き抜く。魔導師は血を流しながら海に落ちていく

「さあ次は誰だ？」

【ヴェルベルク】を召喚する

「どこを撃ち抜かれない？5秒以内ならリクエストに答えるが？」

俺はヴェルベルクを構える。魔導師を睨みつける

「はぁ！」

剣で切り掛かってくるが、それを銃身でいなして銃身で殴りかかって吹き飛ばし、そのまま銃撃で追撃するが、剣で弾かれる

「甘い！」

袈裟切りから逆袈裟に切ってくるが、剣の腹を撃って軌道をずらし、かわす。すぐさま銃撃するが、結界魔導師の防御魔法で防がれるが、そのまま連射して固める

「くっ」

剣の魔導師は連撃で固められ、結界師は防御に専念していて周囲の結果は消えている。このままでは膠着状態だ。そう”このまま”では

「デイベイン・バスター！」

そこに桃色の砲撃が結界魔導師に直撃する。結界魔導師は無防備なところに砲撃を撃ち込まれた為、昏倒して海に落ちる

「時谷君！」

「なのはか！フェイトは！？」

「敵の捕縛に回ってもらってる」

「そうか、さああとはお前一人だが？」

「くくく、くはははははは！」

魔導師がいきなり狂ったように笑い始める

「何が可笑しい？」

「貴様の愚かさに笑っているのさ！こちらにはロストログアがある！この【黯ノ書】がな！【黯ノ書】発動！」

奴が懷から黒い本を取り出し、発動を宣言する。瞬間、周りに黒い波動が広がる、本からは黒い魔力が垂れ流しになっている

「くそっ！なんなんだ！」

「わかんない！でも、危ないのは確かだよ！」

「ちっ、なのはは下がれ！危険だ！」

「危険なのは時谷君も一緒でしょ！」

「じゃあ後ろから援護しててくれ、周りを気にしてる余裕はなさそうだからな」

「うん、わかった」

黒い波動が大きく広がり、収まる。そこには白くなった魔導書を持った奴がいた。白くなった魔導書を懷に戻して奴は自分の姿をマジマジと見る

「これが黯の力が、素晴らしい！この力があれば管理局など虫ケラ同然！」

茶色だったバリアジャケットは黒く染まり、デバイスも漆黒の刃をもった異形の形に変化している。目も白と黒が反転している

「まずは…貴様で試してやろう！」

「はっ！やってみろ！」

「余裕だな」

「なっ！」

いきなり後ろに現れる。まったく視認できなかった。何とか反応し、振り降ろされる剣を【ヴェルベルク】で防ぐ

「ほう、防ぐ…か」

奴はまた目の前から消える。背後に気配を感じ、振り向きざまに【ヴェルベルク】の引き金を引くが、発射されない

「なんで！って…おいおい、マジかよ」

そこには銃身の半分近くまで切られた（・・・）【ヴェルベルク】があった。アークエネミーは滅多なことでは壊れない。それにこのヴェルベルクは元々封印用のアークエネミーだ。他のアークエネミーよりは頑丈のはずだ。それがたった一度で半分近く切られている

「戻れ【ヴェルベルク】来い【ウロボロス】」

俺は【ヴェルベルク】を戻して【ウロボロス】を召喚し、すぐさま

アンカーを射出するがあつさりと回避される。そのまま何度も射出するが、すべて回避される

「その程度か？ではこちらの番だ！」

奴の姿が一瞬ぶれると、また後ろに気配を感じて左回転で右に避けて、そのまま左回し蹴りを放つ

「それがどうした！」

「まだまだあ！」

勢いを保ち、さらに勢いをつけて右回し蹴りを繰り出すが、これもやはり回避されるが回避先にアンカーを射出する

「捕捉！蓬閃・参！」

アンカーの先端の蛇の口がしっかりと奴の腕に食いついていた。アンカーの引き戻しの勢いを利用し、奴に急接近し、顔面に向けて蹴る奴はそれをまともに顔面で受ける

「（よし！）」

「甘いわ！」

奴はその蹴りをモノともせず俺の足を掴んで投げ飛ばす

「時谷君！」

そこになのはがディバインバスターを放つ

「その程度の砲撃でこの私を止めようなど、未熟！」

奴はそれを拳を振るうだけで弾く。リミッターが掛けられているとわいえ、なのはのデイベインバスターを拳で弾くとわ

「余裕扱いてんじゃねえ！」

俺は投げ飛ばされながらも体制を立て直し、奴の頭上に位置取る

「飛鎌突！」

奴のから空きの頭に、蒼炎を纏った右足の踵落としを叩き込む

「ぐっ」

さすがの奴もこれには耐えれず呻き声をあげる。ただ怯んだだけで、すぐさま左足で奴の頭を挟み込み、腰を使って捻り飛ばす。そこに

「デイベインバスター！」

今度こそなのはのデイベインバスターが直撃する。この程度で倒れるわけがない、爆炎で見えないが大体の位置にアンカーを射出する。アンカーの先端が爆炎の中で何かを掴む手応えを感じる

「捕捉！蓬閃・弐！」

先程と同じようにアンカーの引き戻しの勢いを利用し今度は勢いはそのまま、俺自身が射出されるように、勢いをカタパルトに奴の後ろに回り込む

「これで！蛇翼^{じゃよく}！」

グツッと膝を曲げて力を貯め、鋭く真上に打ち上げる。だが効果は薄く奴は体制を戻そうとする

「千魂^{せんこん}！」

そこに奴の頭上から大量のアンカーを射出する。何発かは外れるが気にしない。落ちてくる奴の位置に魔法陣を展開し、俺の目の前に転送する

「烈華斬^{れつかざん}！」

蛇の形を象った黒炎をぶち込む

「グバツ！」

この連撃をモロに食らった奴は剣を手放し、吐血しながら吹き飛ば

「まだまだ！」

【ウロボロス】を戻し、【ブラッドサイズ】を召喚し、その刃がスライドし鎌のように展開すると剣先と逆のほうから黒炎の刃が形成される。吹き飛んでいる奴に追いつき、その刃を振りかぶる

「見せてやるよ！」蒼”の力を！ブラックオンスロート！」

その刃を振り降ろし、奴を切り刻む。

上から
下から
右から
左から
斜めから

もはや何回斬ったかわからなくなるほどに

「ブラックザガム！」

尚も斬り続ける

「ナイトメアレイジ！」

【ブラッドサイズ】に蒼炎を集める。集めると同時に奴の体から黒い波動が蒼炎に吸われていく。やがて集まった蒼炎はやがて形を持ち始める。すべてを喰らう蛇の形

「デストラクション！」

右手を突き出すと、蒼炎の蛇はその顎^{アギト}を開き、奴の胴体に喰らい付き、弾ける

「グボアッ！」

奴はさらに吐血する。すると、奴の黒かったバリアジャケットは茶色に戻り、瞳も元に戻る

「なぜ…だ？なぜ…黯^{くろ}のち…からが」

「その力は俺が喰った」

「なっ、き…さま、その…瞳は」

そう、俺は黯くろの力を吸収したことにより右目が白黒ではなく黒白に反転していた

「ふっ、その呪い…は解けんぞ。黯くろ…の呪いはな。一生…貴様に付きまとうだろうな。これを…やろっ」

そう言っただけは懐から白くなった魔導書を取り出し、差し出す。俺は不思議に思いながらも受け取る

「なぜ、これを？」

「その…魔導書は、管理…局に改竄…されて、呪われてしまった…のさ。貴様が、私を…倒して、黯くろの力を得たことで…呪いから解放された…はずだ」

「これを俺にどうしろと？」

「その魔導書には…まだ管制人格が…残っている筈だ、融合騎としての機能…も残っている筈だ。私はずっと…この魔導書を託せる人間を…探していた。やっと出会えた」

俺は奴の口から語られる事に驚愕していた。そんな、じゃあ、この人はわざとこんな悪役のような演技をしていたのか？今考えてみれば、なぜ、動きの遅いなのはを狙わなかった？殺そうと思えばなのは殺せた筈だ。なのに俺を狙い続けた

俺が魔導書を託すのに相応しいどうかを見極める為に

「その魔導書…をどうしようとお前の勝手だ。できれば大切に…してほしい。哀れな老いぼれの…最後の願いだ」

「……承知した。この”蒼黯”^{そうあん}の名において誓おう」

「ありがとう、さらばだ。若き…魔導師よ」

その言葉を最後に、奴は落下を始める。落下しきる前に受ける。覗き込んだ顔は穏やかな笑みを浮かべていた

「クロノ」

時谷！大丈夫か！？急に通信ができなくなって心配したぞ

「ああ、大丈夫だ。一味の内二人は逮捕。内一人は死亡…ロストロギアは確保し、以降は俺が管理することにした」

時谷、それはどういうっ！…いや、いい。そのお前の表情を見ればわかる。ロストロギアは封印処理したことにしておく

「ああ、ありがとなクロノ」

構わんさ

そう言っつてクロノは通信を切る

「時谷君…」

「時谷…」

なのはとフェイトがこちらに飛んでくる

「さあ帰ろう。ヴィヴィオが待ってるだろうからな」

俺はそう言っただけ知らない一人の亡骸を抱えなおして、屋敷に戻る為に飛び立つ。それについてくるのはとフェイト

「ねえなのは」

「なに？フェイトちゃん」

「時谷、なんであんな悲しそうなの？」

「私にもわからないけど、今はそっとしておいたほうがいいのは確かだよ」

俺たち三人はそのまま無言で屋敷に戻る。いつの間にか空は曇り、雨が降り出していた

next strike.....

strike 25 (後書き)

25話でした！前書きにも書きましたが、一か月近く開けてしまいですみませんでした！>m(――)m<

今回は作者的には結構シリアスになってしまいました。こんな筈ではなかったんですが書いているうちにいつの間にかシリアスになってしまいました

さて今回の更新はまた遅くなってしまうと思います
誠に申し訳ありませんm(――)m

登場術技

【蛇翼千魂烈華斬】

登場作品：オリジナル

概要

作者がとある動画様から考えた（いやむしろパクr：おつと誰かきたようだ）技。三つの必殺技を合わせた奥義

【ブラックオンスロット】

登場作品：BLAZBLUE プレイフル CONTINUUM コンティニウム SHIFT シフト

使用キャラ：ラグナ「ザ」ブラッドエッジ

概要

ブラッドサイズを鎌に変形し斬りつけ、右手に敵の体力を吸収しつつ翼の形をした炎を叩き付ける技。時谷のはハザマの千魂冥烙を組み合わせた形になっているので、炎の形は蛇の頭のようなものになっています

s t r i k e 26 (前書き)

どうも、くりふぁです。この間写真部の活動で江ノ島に行って写真撮ってきました！江ノ島の海は綺麗でしたね。海の写真は撮れたのですが空も撮ってきたかったのですが、雲がなくて雲の写真が撮れませんでしたorz晴天というのも考え物です（笑

さて、今回のお話はギンガ合流までなので少し短いです

では、始まります

俺はそのまま屋敷に戻り、魔導師の亡骸と捕縛した魔導師二名を増援に来ていた部隊に任せて、俺たちはそのまま機動六課の隊舎に戻る準備を始める。その際に俺は瞳の色が反転した右目を黒い眼帯で覆う

「それじゃ、またねアリサちゃん、すずかちゃん」

「また来なさいよ」

「うん、またね（私出番なかったなあ）」すいません！この埋め合わせは必ずいたします！by作者

なのはがアリサとすずかに別れの挨拶をしている。はやてやスバル達は転送ポートのある部屋にいる

「なのは、そろそろ行くぞ」

「うん。それじゃあね」

なのはと一緒に転送ポートのある部屋に行き、はやて達と合流する

「それじゃ、帰るでえー！」

はやてが転送ポートを起動し、俺たちは地上本部に転送される

転送が終わる。この転送独特の浮遊感は未だ慣れない。地上本部の駐車場に向かい各自、車に乗り込む。俺の運転する車にはなのはとヴィヴィオ、スバルとティアナそれに紗耶とはやてが乗っていた。席順は俺の隣になのは、そのなのはの膝の上にヴィヴィオが座っている。中座にはやてと紗耶。後部席にスバルとティアナだ

「なあはやて」

俺は後ろを振り向かずにはやてに話しかける

「ん？なんや？」

「隊舎に戻ったらどうするんだ？」

「そやね、今日はもう休みにして明日から通常どおりかな。そういえばその眼帯どうしたん？」

「そうか、わかった。眼帯だったな？ちよつとミスってな、あんまり気にするな」

「ミス？時谷君が？どないしたん？」

「いや、そのなんて言ったらいいのか、使う技を間違えたというか、効果が違うというか、な」

「何がや？…あ、ちよつとええか？通信みたいや」

はやては俺との会話をやめ、通信に応答する

「はやてです。どうかしましたか？」

ああ、この間言つてた増援の件だが、うちから出せるのはギンガくらいだ。ギンガを今日六課に送つたんだが、まだ隊舎に着いてないのか？

声からしてゲンヤさんだろう。会つたことはないが

「ええ、少し待っててください。…時谷君？あと誰くらいで着きそう？」

「そうだな。10分くらいかな」

「だ、そうです」

時谷？ああ、お前が嬢ちゃんの言つてた暁 時谷か。俺はゲンヤ・ナカジマ。陸士108部隊の隊長をやつてるもんだ。気軽にゲンヤとでも呼んでくれや

「暁 時谷と言います。さすがに呼び捨てはあれなのでゲンヤさんと呼ばせてもらいますね」

さて、要件はそれだけだ。切るぜ

「はい、今度お礼に伺いますね」

気にすんなや。そんじゃあな

そういつてゲンヤさんは通信を切る

「あの八神部隊長、ギン姉が来るって本当ですか？」

後ろで黙っていたスバルがはやてに問いかける

「前々からお願いしてたんやけどね。この間のヘリ襲撃でギンガの戦闘力はハッキリしとるからそれにスバルのお姉さんやからね。連携も取れやすいと思うてな」

「それじゃスバルが早く大好きなお姉ちゃんに会えるように急ぐとするか」

「もう！時谷さん！からかわないで下さいよ！」

はやての問いを有耶無耶にし、スバルが何か言っているが、そこはスルーして少しスピードを上げて六課に向かう

六課に着いてから隊舎裏の駐車場に車を止めて、スタッフに荷物を任せて六課のロビーに行くと、淡い紫色の髪を腰まで伸ばした少女と言うには大人びているが大人とわ言えない、成熟まじかの女性、ギンガ・ナカジマがそこにはいた。ギンガはロビーに入ってくる俺たちに気付き、立ち上がって敬礼する

「ギンガ・ナカジマ陸曹であります！陸士108部隊より機動六課に出向してまいりました」

「機動六課の八神 はやてです。こちらこそ、よろしく願います」

はやてもギンガに敬礼する。はやてはギンガとの挨拶を終え部隊長室に向かい、シグナム達もそれについていく。エリオとキヤロは寝てしまった為、フェイトが部屋まで連れていった

「あの、暁 時谷二等空尉でありますか？」

ギンガが俺に問いかけてくる。近くで見るとやはり姉妹か、スバルに似ている

「ああそうだが、敬語でなくていいぞあんまりそういうのに拘らない主義だからな」

「そうなんですか？じゃあ時谷さんと呼ばせてもらいますね。スバルが凄く楽しいそうにお話する人がどんな人なのかと気になりました」

「まだ敬語が抜けていないがまあいいか、で？スバルからどんな風に聞いているんだ？」

「ちょっとギン姉！それは言わない約束じゃん！」

「あら？そうだったかしら？」

俺とギンガの間にスバルが割り込む。スバルがギンガのほうを向いていて表情はわからないが、多分恥ずかしさで真っ赤だろう

「ギンガさん、お久しぶりです」

「あらティア、久しぶりね」

むくれているスバルを放置し、ギンガに挨拶するティアナ。ギンガのことはティアナとスバルに任せ、俺となのはとヴィヴィオと紗耶は各自の部屋に向かう

「そういえば、紗耶の部屋ってどうすればいいんだ？」

「それならさつきはやてちゃんが、時谷君の隣だつて言つてたよ」

「お兄ちゃんの隣？やった！そういえばヴィヴィオちゃんはどこで寝てるの？」

「なのはママのお部屋か、時谷パパのお部屋！」

紗耶がヴィヴィオに質問すると、ヴィヴィオは元気に答える

「ヴィヴィオはどっちかの部屋で寝てるんだよ。なのはの部屋だったり、俺の部屋だったりな」

「へえ、じゃあ今日は紗耶お姉ちゃんのお部屋と一緒に寝ようね？」

「うん！」

「よかったなヴィヴィオ？」

「えへへえ」

紗耶はそのままヴィヴィオと部屋に入り、俺となのはも別れて部屋

に入る

「さて、明日から幾日かで公開意見陳述会もすぐそこか」

スカリエッティは一昨日の件でヴィヴィオを攫う必要は無くなった筈。その筈なのに訪れた襲撃。誰の仕業かは大体検討できるが、なぜその犯人とおぼしき奴が独断で行動しているのだろう

わからないが、もはや原作通りにいくとは考えないほうがいいだろう。どんなことが起こるかわからない

『女神から伝言があるそうです。繋ぎますか？』

「女神から？ああ、頼む」

聞こえてますか？

「ああ聞こえてるよ」

通信のようにモニターが現れるわけではなく、頭に直接聞こえてくる。念話のようなものか

重大なお知らせがあります

「重大な知らせ？良いことか？悪いことか？」

良くもあり、悪くもあることです。今あなたがいる世界が平行世界ではなく独立世界になりました

「独立世界？」

はい。平行世界の場合は元となった話通り、要は原作通りに事が運ぶのですが、独立世界になったら話は別です。何が起るかわからない。何が起きてもおかしくない状況です。悪い部分はこの事です。ね。良い部分は逆に何をして世界から干渉されないということです。平行世界なら原作に沿わなくなると世界の修正力が働き、イレギュラーを排除しようとはしますが、独立世界なら何をして世界の修正力は働きません

「要は過度な介入ができるようになったって捉え方でいいのか？」

はい、ですが何が起るのか分からなくなっている為、あなたの持つ原作の知識は当てにしないほうがいいでしょうね

「そうか、良い部分は俺が何をしてその修正力つてのが働かなくなったことか」

その通りです。気を付けてください。ね。怪我だけはしないようにしてくださいね？それとちゃんと紗耶ちゃんの面倒も見రుんですよ？あとそれから

いきなり女神がまるで母親が子供を心配するかのように小言を言うてくる

「ちょっと待った！そんなに言わなくても分かっているって！なんか母親みたいだなお前」

っ！そうですか、母親ですか。時谷君はお母さまのことを覚えていますか？

俺が母親のようだというと声の質から驚きを感じる。それにしても母さんのことが

「母さんのことか？ そうだなあ俺も紗耶も小さくて俺はうる覚えだけど、確かお前みたいな金髪で声もお前に似てるな。写真とかは全部父さんが捨てちゃったて言ってたし、姿とかは思いだせねえな」

そう…ですか。覚えていないですか。すいません辛いことを聞いて

「謝んなよ。お前が悪い訳じゃないんだしな」

そう言ってくれると幸いです。それにしても息子さんがこんなに立派になってたらお母さまも嬉しいでしょうね。大切な人たちを必死に護ろうとしている息子さんがいたら天国のお母さまも鼻が高いでしょうね

「そう思ってくれてるといいな」

それとも大切な人たちではなく大切な人ですか？なのはちゃんと
か？

「な、何言っただ！なんでそこでなのは名前が出てくるんだよ
！」

顔を真っ赤にして、説得力がありませんよ？

「お前、俺のこと見てんのか！？」

見えてますよ？耳まで真っ赤なところまでしっかりと

「俺からはお前が見えないのに！狡くないか？それ」

こう見えても一応神様ですからね。えっへん

姿は見えないが、女神が胸を張って腰に手を当てているのが容易に想像できた。不覚にも可愛いなと思ってしまった

「はいはい、じゃ、俺は寝るから。お休み」

はい、おやすみなさい。時谷君

疲れていたのだろうか、俺の意識はすぐに暗闇におちる

ホントに立派になりましたね…時谷君。いえ、時谷…

n e x t s t r i k e

s t r i k e 26 (後書き)

またしても一か月近く開けてしまった…

ほかの先生方はストックを作っているらしいのですが、私にそんな時間はありません！w

ああ、一日が36時間くらいあればいいなと思った今日この頃でした。

次回も一か月近く開けるかもしれませんが、レポートだりいw

strike 27 (前書き)

皆様突然ですがアンケートを取りたいと思います！ヒロインアンケートです。今から1〜3までの選択肢の中からどれかを選んで投票をお願いします！

1 高町 なのは

2 高町 なのは

3 高町 なのは

のいずれかに投票してください！では本編です

休暇から帰ってきた翌日には機動六課は通常勤務を再開した。スバルたちもいつも通りに訓練が再開される。今日はギンガも加わってからの初訓練になる

「さて、ギンガ」

「はい！」

訓練を始める前に俺はみんなに集まってもらった（紗耶はまだヴィオと寝ているだろう）

「いい返事だな。ギンガはスバルと軽く模擬戦。妹の实力を確かめてこい」

「はい！行くわよスバル」

「うん！負けないよギン姉！」

ギンガとスバルはここから少し離れた位置で模擬戦をしてもらう

「さて、ティアナはなのはとクロスファイアの撃ちあいな。ただし、同時発射は5発までだ。ティアナはできるだけなのはのクロスファイアを撃ち落す、なのはは撃ち落とされないように考えて撃つんだぞ。説明終わり！行け！」

なのはとティアナに指示をだしてから俺はエリオとキャロの方に向き直る

「さてエリオはいつも通りにフェイトとの回避訓練な。キャラは残
つてくれ」

フェイトとエリオにも指示をだし終わり、集合場所には俺とキャラ
しか残っていない

「さて、キャラは今日は俺と回避訓練だ」

「回避訓練ですか？それならフェイトさんやエリオ君とやること変
わらないんじゃないですか？」

「やることは変わらないが方法が違っただよ。キャラは普段どんな
回避訓練をエリオとやってる？」

「えーと、スフィアから撃ちだされる訓練弾を動き回って回避する
っていうのです」

「あー、それだとキャラはダメだな」

「ダメ、ですか？」

「ああ、エリオは前衛だから動きながら回避することが多いけど、
キャラは後衛^{バックス}だろ？みんなをサポートする後衛^{バックス}が動き回ったら全員
にサポートが行き届かなくなる可能性が出てくるし、離れてしまっ
てみんなにサポートが行き届かなくなってしまう。だからキャラは
なるべく動かないで回避する術^{すべ}を覚えてもらう」

俺の説明に少し悩んだ表情なキャラ。しばらくすると納得がいった
のか、頷く

「まあいきなり動かずに回避しろって言っても無理だからまずは範囲を指定して、徐々に範囲を狭くしていくんだ」

「はい！」

俺は元気な返事に頷いてから、大き目の長方形の枠を描いてその中にスフィアを浮かべる。数は少ない目の5

「あとは」

長方形の枠の中央に丸い円を大体フラフープぐらいの大きさで書く

「さてそれじゃ、開始！」

キャラが円の中に入り、準備ができたのを確認してスフィアを起動し、一定間隔で訓練弾をスフィアから発射する。キャラは弾がどこから来たのかを見極めながら的確に回避していく。

慣れて来たのか、余裕の表情を見せていたので少しスピードを上げる。まだ非一定間隔の弾は発射しない

「そこまで！」

スフィアを停止させ、中断させる

「どうしたんですか？何かミスしましたか？」

「いや、ミスとかじゃなくてな。円の範囲を若干縮めようと思ってな」

今まで描いていた円を消して、また円を描く。今度は先程描かれていた円より二周りほど縮めている

「それじゃ、円の中に入ってくれ。さっきとは違って今度は弾が一斉に発射されるからな。と言ってもそこまで弾速は早くない。でも慣れてきたらスピードあげてくからな」

「はい！」

キャロは両拳を胸の前に構えて返事をする。うん。可愛い

「始め！」

スフィアを起動する。一斉に発射される弾に驚くキャロ、すぐさま頭を切り替えて、視野を広げる。だが、動き過ぎて円から出そうになるが見えない壁に阻まれる

【内外結界】俺が開発した結界。ないがいかい内からは出ることはもちろん攻撃も通らない。だが外からも入ることはできないが、攻撃は通るというご都合主義バンザイな結界だ

「っ！」

キャロはすぐに気付いたのだろう。最悪円から出ればいいという考え捨て、更に回避に集中する。外側から見ると斜め上からの一斉射で避けられないように見えるが内側から見るとわかるのだが、二、三か所程、安全地帯を用意してある。これは思考能力と反射神経の訓練も兼ねている

「そろそろスピード上げるか」

少しスピードを早くする。危なげだがきちんと安全地帯を判断して回避していく。しかし、避けようとしたときに足を縛もつれさせ、転びそうになる

俺は直ぐにスフィアと停止させ、キャロに駆け寄り、なんとか転ぶ前に抱きかかえる。キャロは目をつぶっているが、いつまでも衝撃が来ないことに気づき、目を開ける

「大丈夫か？キャロ」

「はい、大丈夫です」

キャロの無事を確認し、立たせる

「さて、そろそろ他の連中の訓練が一区切りつくころだろうし、休憩にするか？」

「はい！」

遠くから爆発音や金属が接触する音。地面を盛大に滑っている音が聞こえるが気にしないでおこう

「あゝ」

「ん？」

俺とキャロが休憩していると後ろから話しかけられた。振り向くとそこには、一般の管理局の制服に白衣を纏い、少し濃いめの緑色の

髪に金色の瞳と丸いノンフレームメガネを掛けた女性がいた

「あなたは？」

「本局技術部精密技術官のマリエル・アテンザです。暁 時谷二等空尉ですよ。」

「ええ、そうですが。俺をご存知で？」

「はい、スバルからのメールによく書いてありますから、強くて優しくカッコいい人がいるって」

「なんだか恥ずかしいですね」

「時谷さん。なのは隊長が集合してほしいそうです」

「わかった。アテンザ技官はどうします？」

「マリーでいいですよ。私も行きます」

「そうですか、じゃあ俺のことも時谷でいいですよ」

俺はマリーとキャロと一緒に集合場所に向かう。そこには俺達以外のメンバーが揃っていた

「すまないなのは、遅くなった」

「ううん、別に大丈夫だよ」

「そうか？ならいいんだが、ところで今から何やるんだ？」

「え〜とね、ギンガも来たことだし、模擬戦やろっかなって」

「模擬戦？隊長陣対FWか？」

「うっん、時谷君対私とFWとギンガだよ」

そうかそうか、俺対なのはとFW+ギンガね、ん？俺対？要は俺一人？俺only？は？

「ちょ、ちょっと待てなのは、なんで俺一人なんだよ。どう考えてもおかしいじゃん。訳が分からないよ」

「大丈夫でしょ、時谷君だし」

なにその理由、いい加減すぎでしょ。てかどう考えても俺不利じゃん

「あ、それと時谷君はハンデとして【ウロボロス】以外の射撃魔法とそれに準ずるものの使用は禁止！」

「は！？いやいやいや、ハンデじゃなくて縛りじゃん、てか射撃がダメってことは、ミドルかクロスで戦えと？」

「うん！」

うんいい笑顔だ、可愛いがやってることは悪魔の所業のそれと変わらん。もはや虐めレベルだろこれ

「はあ、分かった分かった。やればいいんだろ？やれば」

射撃魔法やそれに準ずるものが禁止つてことは【ベルヴェルク】は使えない、【タケミカズチ】も同様だ。【無限の剣製】の剣弾射出も禁止、【王の財宝】禁止、【鋼鉄の歯車】の能力で口ボになっても射撃出来ない。え？これなんて無理ゲー？まあ【魔神剣】や【蒼破刃】はミドルレンジだから大丈夫だろうが

「それじゃ、開始位置に移動！」

なのはの号令で皆一斉に動き出す

「ねえスバル？」

「ん？何？ギン姉」

「これいつもやってるの？」

「ううん、たまにかな？時谷さんが提案したり、今回みたいになのはさんが提案したりするぐらいの違いだけ」

「時谷さん、ああ言いつつかなりマジで潰しに来るので、気を付けないと気付かぬ間に撃墜なんてこともあるので」

そこにエリオが入る

「それに今回はまだましなほうですよ。射撃禁止ですから」

ティアナも会話に参加する

「普段は、問答無用、容赦無用で射撃してくるんですね」

キャラも参加する

「時谷さんのバリアジャケットに一撃入れればクリアです。今回はなのはさんもいるので大分楽な…筈です」

「筈…なの？」

「」「はい」「」「うん」

「はあ」

訓練シュミレーター市街地仕様、それが今回のマップだった。廃墟都市ではなく立派な市街地だった

「さて、武器どうするか」

俺は武器の選択に迷っていた。射撃が禁止なのは本当に痛い。向こうはバンバン撃ってるだけでいいからだ。こちらは接近しなければならない

「【黒鍵】も射撃にはいるから投擲は駄目、同じ理由で【ゲングニル】も駄目か」

それじゃ、模擬戦開始！

そうこう言ってるうちに模擬戦が始まってしまった

「まずは、なのはだ」

俺は飛行魔法を発動し、なのはの魔力を頼りに飛ぶ。向かう最中に【逆刃刀・真打】を投影しておく

「見つけた！」

なのはを見つけた俺は速度を上げるが、簡単に接近を許してくれる相手じゃない。鉄壁の防御と砲撃、それが彼女の戦闘スタイルだ。接近に気づき、桃色の砲撃が飛んでくる。こちらが加速している為、当たれば確実に大ダメージを受けるだろう。そんなへまはしない、右にロールして回避し、さらに接近する。が、オレンジの弾丸に阻まれる

「ティアナか！」

速度を落とし、回避重視に切り替えてから地上を見ると、すでに次弾を準備しているティアナとティアナにブーストを掛けているキャラが居た

「ちっ！」

後ろから接近する魔力を感知し振り向くと、蒼と水色の道が向かつ

てくる

「はああああ！」

ギンガとスバルが拳を構え、突っ込んでくる。迎撃しようとするが、砲撃と弾丸で邪魔される

「くう！」

一旦距離を開けるために後退するが、何か忘れてないか？

「しまっ！」

そこにはエリオが愛槍ストラダを構え、突進してきていた

「やあああ！」

「教えた筈だ！奇襲の際に声は出すなと！」

【逆刃刀・真打】の鞘で矛先を弾き、体制の崩れてガラ空きのエリオの胴体に抜刀と同時に、刀身をたたきつける。もちろん、エリオのような成熟していな体では怪我をするかもしれないので、力加減は忘れない

「かはっ！」

肺の空気を掃出し、そのまま地面に落ちていく。落ち切る前にキヤツチしたが

「これでエリオは撃墜っ」と

エリオを比較的安全なところに寝かせ、また飛び立つ。ビルの陰から出ると同時に砲撃が飛んでくる

「危な！」

俺は今度こそなのはに向かう、ティアナのクロスファイヤとなのはのアクセルシューターの弾幕が展開されるが、避けれるものは避け、当たりそうなものは【逆刃刀・真打】で弾く

「覚悟！」

「デイベイイン・バスタアア！」

眼前に迫る砲撃を【逆刃刀・真打】で切り裂こうとするが、無理だと判断し、【逆刃刀・真打】から手を放し、回避する

「【ウロボロス】！」

砲撃後の硬直で動けないなのはに【ウロボロス】を射出する。なのははプロテクションを張って【ウロボロス】を防ぐ

「貰った！」

プロテクションに阻まれている【ウロボロス】の巻き戻しの勢いを使い、なのはに接近し、プロテクションの範囲外から【ウロボロス】を射出してなのはを捉える

「これでなのはも撃墜な」

「むゝ、悔しいな」

「さて次はっと」

俺はティアナに向き直り、【ウロボロス】を射出する。ティアナはそれを撃ち落としてつつ、俺にも弾丸を放ってくる

「やるな、だが！」

俺は【ウロボロス】の射出をやめ、ティアナに向かって降下する。おそらくだが、ティアナはキャロに退避を指示し、自分も物陰に隠れるが、すぐに出てきた。おそらくフェイクシルエットだろう

「と、いうことは本物は物陰か！」

物陰に向けて【ウロボロス】を撃ち込むが、手応えがない

「まさか、出てったほうが本物かよ！」

フェイクだと思っていたほうに目をやると、ティアナがニヤリと笑っていた

「ファントム・ブレイザー！」

それもよりにもよって覚えたての砲撃魔法を撃ってきた

「そんなもの！」

砲撃は迫っているがなのは砲撃より遅い、回避は容易い。回避してから刃引きした【ジャマダハル】を二本投影し、両手に装備する

「させません！」

いざティアナに向かおうとすると、横からスバルが殴り掛かってくる

「私もいますよ！」

スバルに攻撃を加えようとするとうとギンガが蹴りを放ってきた。キレが鋭い、おそらくキャラがブーストしたんだろう。優秀だな

「くっ！」

ギンガの蹴りを避けきれなかった俺は蹴りを腕をクロスしてガードするが、未だに慣れない空中での踏ん張りがきかず、吹き飛ばされ地面に直撃する

「はあああああ！！！」

俺が地面にいるのをいいことにスバルとギンガが俺の真上から追撃を仕掛けてくる

「【ウロボロス】起動、千魂…冥烙！」

俺は足元から俺の真上にいる二人に大量の【ウロボロス】を射出する。この技は真上に【ウロボロス】を射出し、相手を怯ませ

「一夜に千の死をもたらす冥府の蛇よ！その顎で、全ての魂を喰い尽くせ！」

射出された【ウロボロス】が束ねられ、一匹の蛇に変化する。大蛇

と化したそれは二人に体当たりし、派手な音を立てて地面に叩き付ける

「ナカジマ姉妹、撃墜。あとは」

キャロとティアナが

「フリード！ブラストレイ！」

いきなり炎弾が飛んでくる。ビルの陰からフリードに騎乗したキャロがブラストレイを放ってくる

「そらあ！」

炎弾を魔力でコーティングした右足で蹴り返す

「え？ええ！」

キャロはまさか蹴り返されると思っていなかったのか（てか普通思わないか）、そのままブラストレイが直撃、撃墜

「あつけないだろ。まあしょうがないかと！」

降り注いだクロスファイヤを前転して回避し、撃ちだされた方向を見る。そこにはクロスミラージュをダガーモードにしたティアナがいた

「ほう、接近戦か、俺に」

「はい、いきますー！」

「来い！」

ティアナはダガーを構え直し、走ってくる。俺も手にある【ジャマダハル】を構え、迎え撃つ

「ただの突撃ではな！」

ティアナがダガーを振るが、左の刃で受け流して右の刃で切り掛かる。そのまま刃はティアナの体に突き刺さる

「?」

突き刺さる？おかしい、この【ジャマダハル】は刃引きされている突き刺さる（・・・・）事はないのだ。俺がティアナの顔を見ると

「っ！」

そこには先ほどのようにニヤリと笑った

「フエイクか！」

気付いた時には時既に遅し、俺の後ろにはダガーを構えたティアナがいた

「はあっ！」

弾丸が撃ち込まれる。だが痛みはない。と、いうことは！

「バインド!？」

「これでえ！」

ティアナは体を回転させて勢いをつけて横薙ぎに刃を振るう。そして刃を振るうと同時に凄まじい速度で弾丸が俺に撃ち込まれる。これはバインド弾ではない魔力弾だ

「まだまだ！」

次は左からの袈裟切り、これも斬る際に魔力弾を放っている。次は両手から突きを放ちながらの射撃。そして

「これで最後！」

ティアナは魔力を刃に流し込み、威力を上げる。そしてそれをX字に振り抜く

「ハアハアハアハア、こ、これで」

魔力を大量に消費したことでティアナが倒れそうになるが、倒れる前に抱きかかえる

「お前の勝ちだ。ティアナ」

模擬戦は、俺の負けで終わった

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.
.

strike 27 (後書き)

なんでこんなに遅れてんだ？俺はいつたい何がしたかったんだ？
とまあ、遅れた理由と言いますか言い訳です

わたくしが進路でてんやわんやしてたからです！

親との話し合い、担任との話し合いなど、他にもさまざまなことが
あげられますが、所詮は言い訳です。まことに申し訳ありませんで
した！

今後はもっと更新ペース上げたいと思います！

登場武器

【ジャマダハル】

概要

インドなので使われていたダガーの一種
分かりやすく言うとカタールと言えればぴんと来ると思います。鋼殻
のレギオスで仮面の連中が使ってたあれです

strike 28 (前書き)

どうも、くりふぁです。

修学旅行も終わり、本格的に進路の季節になってしまいました

自分の将来を考えるとということはとても難しいものなのだと感じる
今日この頃です

では、本編です

俺は模擬戦の後、気絶してる奴は起こして、無事な奴には今日の訓練の終了を告げた。今は全員でストレッチしている最中だ

「まさか、俺がティアナにやられる。か」

「そんな、偶然です！それに時谷さん射撃できなかったじゃないですか！」

ティアナが慌てて言う

「そんなことはない、射撃ができなかったというのは俺の言い訳に過ぎない。最後のフェイクシルエットを読み切れなかった俺の油断だ。こんな力を持ったことで俺の中に驕りが出来たんだ」

「時谷さん…」

俺はティアナのほうに向き直り

「いいか、ティアナ。今日のが実戦で、相手が非殺傷なんてしてなかったら俺は今頃細切れになっていただろう。力を持つ、ということとは脅威を退けることが出来るということと同時に、脅威を呼び込むことにもなりうる」

「脅威を…呼び込む…」

いつの間にか全員が俺とティアナの会話を聞いていた。俺はティアナだけではなく、みんなに語りかける

「そうだ。力を持つものは必ずそれを利用しようとする奴らが出てくる。時には卑怯な手を使って迫ってくることもあるだろう。たとえば、ギンガ」

「わ、私ですか？」

「ああ、もしお前が現存のデバイスを上回る強力なデバイスを持っていたでしょう。そのデバイス目当ての武装組織の人間がスバルからマツハキヤリバーを取り上げて、抵抗できなくなったところで銃をスバルの頭に突き付けながら、そのデバイスを寄越せ。と言ってきたらどうする？」

これは妹思いのギンガには酷かもしれないが、覚悟が必要だ。力と
いうものはそういうものだ

「そ、それは、犯人たちを制圧してからスバルを助け出します」

「お前がスバルを助け出すのと、引き金が引かれてスバルが殺されるのとどっちが早い？」

「それは…じゃあ、どうすればいいんですか！」

「俺なら仮死魔法でスバルを仮死状態にして、犯人が同様している内に、犯人を制圧する。制圧後、スバルを仮死状態から復帰させる」

「そんな、私にはそんなこと出来ません！スバルを仮死状態にするなんて…とても…」

「そうか、お前はスバルが殺されると仮死状態とはいえ、助ける

ことが出来るのに諦めるのか？」

「じゃあ！時谷さんは妹である紗耶ちゃんがそういう状況になったら、迷いなく、その方法で助け出しますか！？」

「ああ」

俺は即答する。ギンガだけでなくのは達まで驚愕の表情を浮かべる

「その方法で紗耶に恨まれても、俺は構わない。紗耶が生きている。その事実だけで十分だろ」

「時谷さんは、なんでそこまで護ることに拘るんですか？」

「そうだな、別に俺は人類すべてを救おうなんて考えてない。そんなことは出来ないんだから、せめて目の前の大切なものくらいは護りたい。だから俺は護るんだ」

皆が静まり沈黙が空間を支配する。だが、そこにその沈黙を破る存在が現れた

「パパあ！」

ヴィヴィオだった。こちらに向かって走ってくる。その後ろには紗耶が居た

「ヴィヴィオお！転ぶなよお！」

先程の沈黙が嘘だったかのように場の雰囲気が柔らくなる

「うっん！わはっ！」

と、転ぶなと言ったそばから石に躓き、地面に倒れこむ

「ヴィヴィオ！」

俺は駆け出そうとするが、それをなのはが止める

「大丈夫、うまく転んだから」

なのははそういうと、しゃがみ込んでヴィヴィオに語りかける

「ヴィヴィオ？ママとパパはここにいるよ？自分で立ってみよ？ね？」

「うっ、うっ」

ヴィヴィオは今にも泣きそうだった。俺は我慢できずにヴィヴィオに駆け寄り、立たせてから服に着いた土を払って抱き上げる

「もう、時谷君優しすぎだよ」

「なのはが厳しすぎるんだ」

「お兄ちゃん？ヴィヴィオも5歳なんだからそこまで甘やかさなくてもいいんじゃない？」

「紗耶までそんなこと言うのか？5歳でも転んだら痛いんだ。痛みになれていない5歳の子供が、そこまで我慢する必要はないさ。でも」

俺はそこで言葉を切って、少し涙が溜まったオッドアイの瞳を見る

「ヴィヴィオ？泣くのは悪いことじゃない。パパぐらいになると泣けなくなっちゃうからね。でもな、どんなに泣きたくても、泣いちゃいけない時がある。それはいつだと思う？」

「わかんない、いつ？」

「それは、パパにも分からない。その泣いちゃいけない時はヴィヴィオがそう思った時がそうなんだ。いつか、いつの日かヴィヴィオにもそんな時がくる。その時は絶対に泣いちゃ駄目だよ？」

「うん！」

「よし！いい子だ。それじゃ朝ご飯食べに行こうか」

俺は抱きかかえていたヴィヴィオをそのまま肩車して、隊舎に戻る。そのあとをみんながついてくる

朝食を食べ終え、俺は自室でデスクワークに勤しんでいた。ヴィヴィオは紗耶とともにスバル達の訓練を見に行っている

「こんなもんかな」

書類の処理を終えてクロノに転送する。一応俺の所属は本局になっているので上司であるクロノに書類を提出しなければならない

時谷、ちよつといいか？

転送し終えて、紅茶を飲みながら読書をしていると、クロノから通信が入った

「なんだクロノ？書類に不備でもあったか？」

いや、別件だ。お前のことでちよつとな

「俺のこと？」

はて、そんなクロノに怒られたり、他人に批判されるようなことは特にしていないんだがな（機動六課にいる時点で男性局員と一部の百合ってる女性局員に嫌われている時谷君でした）

ああ、お前、デバイス持ってないだろ？デバイスを持たない局員が時空管理局にいていいものか！って上に爺どもが五月蠅くてな、というわけでものは相談なんだが、デバイスを持つてみないか？お前も一々武器に魔力纏わせて非殺傷にするのは手間がかかるだろうからな

「一応、デバイスならあるんだがな。そういや登録してなかったな」
なんだ、あるのか。じゃあ話が早い。今から本局に来て登録して

くれ

「分かった。お前の執務室に直接転移するけどいいだろ？」

ああ、構わない

「了解、そうじゃ」

俺は転移術式を発動させ、クロノの執務室に転移する

「到着つと」

「来たか。さて登録自体は簡単だ。デバイス管理課に行って登録申請するだけでいい」

「そうじゃ行ってくる」

俺はクロノの執務室を出てからエクセアに登録しておいた本局の地図を出す

「場所はここから2ブロック先か、ちょっと遠いが、まあいいか」

俺はデバイス管理課に向かいながら先程の通信でクロノに言われたことを考えていた。確かに武器に少々魔力を纏わすのはハッキリ言っ
て面倒だ。咄嗟の時に時間が掛かってやられましたじゃ話にならない、ならば最初から非殺傷設定されているデバイスを持ったほうが余程効率的だ

だが、この非殺傷設定というのは気に入らない。犯罪者を殺さない為のものかもしれないが、先刻スバル達に聞かせたように、敵が銃

を持つていたらどうする？敵は殺しにくるがこちらは殺せない。敵は非殺傷設定を知っているから、殺される心配なく戦える。こちらは殺される心配をしながら戦う

精神的にどちらが有利など子供でも分かる。敵がデバイスを持つていたとしても非殺傷設定を解除されてはそのアドバンテージは計り知れない。だが

「（殺さなくていいなら、それに越したことはない）」

もしデバイスをエクセア以外に持つとして、俺の理想としては、剣と槍になるものがいい。剣も槍もシグナムのレヴァンティンのシュランゲフォルムのように蛇腹に変形できるようにしてもらおう。考えてたら無性に欲しくなった。でも、作るとなったら大変だよな

『マスターはデバイスが欲しいのですか？』

俺が考え事しているとエクセアが話しかけてくる

「ん？まあ、あれば便利だろうな」

『では、クロノ提督に頼んでみては？』

「いや、頼む奴の目星は付けてるんだ」

『誰ですか？』

「そのうち話すよ。もうデバイス管理課に着いたしな」

俺はデバイス管理課のドアを開けて中に入り、デバイス登録と表示

されているカウンターに向かう。そこで登録用の書類をもらい必要事項を書き込んでいく。そこで問題にぶち当たった

「（デバイス作成者：だと？）」

デバイス作成者。これは大変だ。なのはレイジングハートはユーノが発掘したものだし、フェイトのはリスがフェイトを思う一心に作った傑作機だ。スバル達のは六課のスタッフだ。じゃあ俺は？女神から貰ったものだ。そんなこと書けるわけない

さてよ、俺のも六課のスタッフって事にして、口裏合わせて貰えばいいんじゃないか？いや、ましてそんな卑怯なことは出来ない。自作ってことにするか？だが自作にしては高性能すぎる。どうしたものか

「あの〜」

「はい？」

「無理に書かなくてもいいですよ？（こめ）印のついている部分だけ書いていただければ結構ですの〜」

「え？…あ」

よく見たら、デバイス作成者の部分には（こめ）印はついていなかった。よかった…本当によかった。それなら大丈夫だ、（こめ）印以外は埋まっているから、このまま提出すれば大丈夫だろう

「じゃあ、これでいいですか？」

「え〜と…はい。大丈夫です。これでデバイス登録は完了ですね」

登録も終わり、俺はデバイス管理課を出て、クロノのところに戻る

「クロノ、登録終わったぞ。帰ってもいいか？そろそろヴィヴィオと昼飯なんだが」

「ああ、要件はデバイスのことだったから、もう大丈夫だ。すまなかったな呼び出したりして」

「まあ気にすんな。なんかあったら呼んでくれ。じゃな」

転移術式発動、場所は六課の俺の部屋

転移で俺の部屋に戻ってくると同時に、ヴィヴィオと紗耶が部屋に入ってくる

「あれ、お兄ちゃん帰ってきたんだ」

「ああ、ちょっとクロノに呼ばれてな。どうしたんだ？」

「パパ！ごはん食べに行こ！」

ヴィヴィオはそう言って、紗耶の手を離れて俺に駆け寄って飛びつく。俺はしっかりと受け止める

「そうだな、そろそろスバル達の訓練も終わる頃だろう」

俺はそのままヴィヴィオと紗耶を連れて食堂に向かう。定期的にそろそろだろう。俺は選択しなければならない、今度の公開意見陳述会で

ギンガかヴィヴィオか、どちらを救うかを

n e x t s t r i k e

strike 28 (後書き)

さて、次回は公開意見陳述会ということになります

ギンガとヴィヴィオ、時谷はいつたいどちらを救うのでしょうか？
それとも…

では、次回の投稿がいつになるかは分かりません。課題研究や進路
やらでてんてこ舞いです(汗)

strike 29 (前書き)

どうも、くりふぁです。

部活の引退も迫り、もう高校生活も終わるかと感じる今日この頃です
では、本編です

本局から戻ると、はやてに呼ばれたので部隊長室に行くとなのはにフェイト、ヴィータとシグナムが揃っていた。おそらくは近日に行われる公開意見陳述会のことだろう

「時谷君も来たことやし、説明はじめよか」

はやてからなされた説明は簡単なものだった。六課の隊長陣は内部警備。スバル達は地上本部周辺の警備だった。内部警備には俺も含まれていたが

「すまん、はやて。俺は本局に用があるから公開意見陳述会の日に行けないんだ。すまないな」

「そうなん？クロノ君からは何も聞いてへんよ？」

「いや、クロノじゃなくて三提督たちからの依頼でね」

「三提督かあ、じゃあしょうがないやね」

「すまん」

因みに、三提督からというのが嘘でクロノからってのが本当の事だ。この場に居ても俺に話せることはないため、俺は部隊長室を出て自室へ向かう。ドアを開けて中に入るとそこにはベッドに寝転んで寝ているヴィヴィオとベッドのそばには狼形態のザフィーラがいた

「ヴィヴィオは寝てしまったか。そばに居てくれてありがとなザフ

イーラ」

「気にするな。主から仰せつかったことだ」

「そうか、まあいい。ザフィーラ、今から見るもの聞くものはすべて忘れてくれな？」

「ん？まあ構わんが」

「サンキュ」

俺は通信画面を起動する。通信する相手を項目から選ぶ。カーソルを合わせた名前はJの文字

おや、君から連絡してくるとはな。という風の吹き回しだい？

そこには薄紫の髪に不健康そうな顔色をした男がいた。ジェイル・スカリエッティ。世間を騒がせている次元犯罪者がそこにいた

「っ！」

ザフィーラは咄嗟に身構える

「どういうことだ時谷。これは」

「なに、ただ友人と会話するのがそんなにおかしいか？」

「友人だと！？そいつは犯罪者だぞ！」

「静かにしろヴィヴィオが起きるだろ」

「くっ、説明はあるんだろうな」

「説明も何も今からの会話を聞けばわかる」

俺はスカリエッティのほうに向き直る

やれやれ、私の評判は最悪のようだね

「当たり前だろ？世間一般では犯罪者だからな」

困ったものだね。ところで、要件はなんだい？こっちは今逃げる最中なんだ

「逃げる？なにからだ？」

通信をしていると、とてもそんな緊迫した状況には思えないが

まあ逃げていると言っても追手はいないんだがね。少々まずい状況なんだよ

「なにがあつた？」

君から貰った髪の毛での起動実験に入ろうという時に襲撃を受けたんだよ。黒のバリアジャケットを着た男だった

その後スカリエッティの話を聞くと、その黒のバリアジャケットを着た男は襲い掛かるナンバーズを撃破し、どこからともなく出した魔力でできた短剣でスカリエッティを壁に礫にし、スカリエッティのコンピュータにアクセスしナンバーズの命令権を手に入れたらし

い。

スカリエツティは掌握される前にセツテのIS【スローターアームズ】で操られたブーメランブレードで魔力短剣を破壊してもらい、命辛々逃げ出したらしい

「じゃあお前の”娘達”はどうなった…」

恐らく、あの男に操られて当初の予定通りに今度の公開意見陳述会を襲撃するだろうね。今の私は何もできない。ただの無力な父親だっ！

「落ち着け、ジェイル（……）」

っ！ああ、ああ、大丈夫だ。すまない見つともないところを見せてしまったようだ。それと時谷、気を付けてくれ。奴が当初の私の計画を遂行するとしたら

「ああ、間違いなくヴィヴィオを攫いにくるだろうな」

まあもつともそんなことは例え天変地異が起きたとしてもありえないからな

話が逸れたが、要件はなんだったんだい？

「ちょっと、作って貰いたいものがある。俺専用のアームドデバイスだ」

デバイス？君は確かインテリを持っていなかったかい？なんでまた

「少し思うところがあつてな。設計図はあるから場所を指定してくれば、そこに材料も送る」

なぜ私なんだ？君のところには優秀な人材がいるんだろ？

「確かにここのスタッフは優秀だが、今回は特急で仕上げて貰いたいからな。できれば五日以内で」

おお、五日以内か。確かにそれは普通の人間には無理だね

ジェイルがニヤリと笑う。俺もつられて笑う

「だからお前に頼んでいるだよ。【希代の天才】よ」

心得たよ。【蒼黯の魔騎士】よ

「【蒼黯の魔騎士】？随分な名前だな」

裏ではもっぱらの噂さ、蒼と黯のバリアジャケットでS級犯罪者を悉く逮捕または殺害。魔導を振るう騎士ってね

「（殺害だと！？時谷が！？）」

ザフィーラが驚いているが、気にしないでおこう。普段の俺を見ていたら俺が人を殺すような奴には見えないからな

「そうか、俺だって好きで殺してる訳じゃない。死にたくないから殺す。俺はまだ死ねないんだ」

誰だっそうだ。デバイスだったね。今から座標を送るからそこに一緒に添付した材料を送ってくれ。五日、いや四日で仕上げて見せよう

「ああ、わかった。じゃあな気をつけるよ」

ああ

通信が終わる。ウィンドウを閉じた瞬間に人型形態になったザフィーラが掴みかかってくる

「なんだ？ザフィーラ」

「なんだ？ではない！何故お前が犯罪者と繋がっている！そして殺害とはなんだ！」

「S級犯罪者相手に逮捕なんて手段があると思ってるのか？俺が逮捕できたのは相手が戦闘力のない研究者くらいだ。武装した連中は俺を殺しに来るんだ。なにか？お前は俺に死ねるか？」

「そうは言っていない！何も殺すまでしなくてもいいだろ！」

「S級犯罪者はな、精神が狂ってるような奴らだ。そんな奴ら相手に手加減？理性の箍たがが外れている連中にか？」

「くっ、ではなぜスカリエッティと繋がっている！奴は犯罪者だ！」

「世間一般ではな、でもなザフィーラ、それが仕組まれたことだとしたら？」

「仕組みれた？誰にだ！」

「管理局だ」

「なっ！」

ザフィーラが驚愕の表情になる。俺はザフィーラの手を振り払う

「コード名【無限の欲望】アンリミテッドサイア管理局最高評議会が作り出したアルハザードのクローンがあいつだ。世界の必要悪として作り出された。だが、あいつは自らの意志で俺に助けを求めた。だから俺は奴を助ける。覚えておけザフィーラ、管理局は一枚岩じゃない、それどころか上層は表面だけが綺麗な腐ったリンゴ（Bad Apple）だ」

「そんな…馬鹿な…」

「いいかザフィーラ、ここでのことは他言無用だ。俺とお前は他愛もない雑談をしていた。ただそれだけだ」

「くっ」

「それじゃ、俺は材料集めに行ってくるから。ヴィヴィオのことを頼む。俺みたいない人殺しはこの子の父親なんかやるべきではないかもな」

俺はそう言って部屋を出る。俯くザフィーラを残して

数日後、公開意見陳述会当日。なのは達をヴィヴィオと一緒に見送り、ヴィヴィオを寝かせてアイナさんをお願いしてからジエイルから届いた俺専用のアームデバイス【エンフーター】ドイツ語で”守護者”を意味する言葉

「エンフーター、起動。モード【エンソード】」

『o k , m a s t e r』

バリアジャケットは変わらない。エクセアのをそのまま使うからだ。起動が終わると俺の手には剣が握られていた。柄を含めた全長が約160cm、幅は約15cmの大剣

俺は周りに被害がいかにないようにかなりの高度まで上昇する

「はっ！」

剣を袈裟に振るう。振るった瞬間、刀身がバラバラになる。本当にバラバラになった訳ではない。シグナムのレヴァンティンのように蛇腹になったのだ、刃をつないでいるのは魔力系まりよくし

「はぁ！」

袈裟に振られた連結刃で自分を傷つけぬように、切り上げる。風を切り裂く音と共に16の刃が夜の空を切り裂く。この剣に限界はほばない、刃と刃を繋いでいるのが魔力系だからだ。ただそれを操る

俺には限界がある。それに刃の間隔を空けすぎると相手に当たらなくなってしまう

「ふっ！」

切り上げた刃を横に振って元の大剣の形に戻す。ちゃんと大剣としても使える優れたものだ

「次、モード【エンスピア】」

大剣が形を変えて、槍になる。全長が約200cm、槍身そうしんが約50cm、槍幅10cmの槍だ。これにも【エンスード】同様に蛇腹機構が搭載されている。ただ【エンスード】と違い、手元50cmを残して、そこから上250cmが連結したものになる（まどマギの杏子の槍みたいな奴です）

この槍は蛇腹だが、薙ぎ払うのではなく、その伸縮自在性を生かした突きを放つのが主だ。こちらも通常の槍としても使うことができる。槍身が剣のように平らな為、斬りつけることもできる

「ふんっ！」

蛇腹形態で突きを2、3回放ち、槍に戻してからまた突きを2、3回放つ

ヒュッ、ヒュッ、ヒュッ、ヒュッと風切り音が聞こえる、試しに蛇腹を横薙ぎに大きく振ると、バキンッ！と音がなった

「なんだ？」

音のなった方向を見ると、ピンク色の球が砕けていた。なのはの使
うサーチャーだ

なのは？見てたのか？

俺はなのはに念話を繋ぐ

ふえ！？あ、いやね？時谷君なにしてるかな？って思ってたサーチ
ャー飛ばしたらなんかやつてるからね？

それで、覗き見てた。と？

う、ごめんなさい

しゅん、となっているなのはが容易く想像できてしまう

別に怒ってる訳じゃなさ。気にするな。それじゃしっかりやれよ。
お休み、なのは

うん、お休み、時谷君

互いに言い終わったところで念話を切る。【エンフーター】を待機
状態であるブレスレッドに戻し、右腕にはめる

「明日、か」

そう、おそらく実行されるであろう地上本部襲撃と機動六課襲撃、
犠牲になる人間が分かかっていて俺は止められない。どちらか一方し
か護れない。ならどうしたら、どうやれば2つとも護れるのだろう

n
e
x
t

s
t
r
i
k
e
.
.
.
.

Strike 29（後書き）

少し間が空いてしまいました。それにしても【蒼黯の魔騎士】
自分でつけといてなんですが、これなんて厨二？w
次回の投稿はテストが終わってからになります

登場武器

【エンフーター】

登場作品：魔法少女リリカルなのはStrikeS（護る為の力
（オリジナル）

概要

時谷がジェイル・スカリエッティに依頼して作成されたアームドデ
バイス。

剣と槍2つのモードがあり、どちらもレヴァンティンのように蛇腹
形態への変形機構を持つ。

剣は刀身が、槍は手元50cm以外が蛇腹になる。

剣は鞭のように薙ぎ払って使い

槍は本来のように突いて使う

待機状態は蒼のブレスレッド

strike 30 (前書き)

どうもくりふぁです。もう7月に入り、すっぱり夏って感じですね。
汗がやぶぁいですw

今回はちょっと短めです

では本編をどうぞ

「どうやってたらヴィヴィオとギンガ、両方を護れるんだろうな」

ヴィヴィオの髪を撫でながら呟く

「何か、方法はないものか…」

「お兄ちゃん？」

俺が考えに耽っていると、紗耶が入ってくる

「ああ、紗耶か」

「うん、ノックしても返事なかったから入ってきちゃったけど大丈夫だった？」

「構わないよ。ただヴィヴィオが寝てるから静かにな」

「うん、で？何を悩んだの？横顔がすっごい難しい顔してたけど」

「そんな顔してたか？」

「うん。すっごく」

そんなにか、そんな顔しているつもりはなかったんだがな

「どうすればいいのかわってな」

「何が？」

「ジェイル・スカリエツィの本拠地が何者かに襲撃された。あいつは逃げ出したがあいつの娘達、ナンバーズ全員の命令権を奪われたい。この時点で俺の知る原作からは離れた」

「でもここって平行世界なんですよ？」

「ああ、でも女神が言うにはこの世界は原作から分岐した世界になったらしい。俺がこの世界に来たせいだな。だから今後は原作知識は役に立たない。完全に未知数の展開が待っているだろう」

「そっか、悩んでたのはその事？」

「いや、ジェイルが言ってたんだが、おそらく襲撃犯はあいつの計画を実行するだろうって言ってたよ。この意味が分かるか？」

「地上本部襲撃と機動六課壊滅……」

「施設はいくら壊れようが構わない。ただ」

俺は再度ヴィヴィオの髪を撫でる。気持ちよさそうに寝ている

「地上本部のギンガ、六課のヴィヴィオ。どちらか一方しか俺は護ることができない。こんな力がありながら情けないもんだ」

「なんだ、そんなことか」

「なっ、そんなことってお前なあ」

「私がいるじゃん」

「はっ？」

何を言ってるんだ我が妹は

「いつまでもお兄ちゃんに護られる私じゃないよ。私にも力がある。お兄ちゃんみたいに皆を護る為の力が」

「何言ってるんだ！そんな危険なことお前にさせるわけには！」

「危険なのはわかってる！それでも私は、お兄ちゃんの力になりたい
い」

紗耶が決意を持った目で俺を見る。本当はこんな危険なことはさせたくない。だが、紗耶がそれを望んでいる。俺の力になりたいと、自分も戦うと、なら俺は兄として紗耶の意志を尊重しよう

「分かった。お前が本気なら俺は止めはしない。だが条件がある。絶対に生きる。いいな？」

「うん！」

「じゃあ、お前はギンガを助けに行ってくれ。六課は俺が護る」

「分かった。じゃあお休みお兄ちゃん」

紗耶が部屋を出ていく。それを見送り、俺もベッドに入る。ヴィヴィオが俺の服を掴んでくる。しっかり俺の服を掴んだヴィヴィオは安心した表情で眠る

「（娘を護るのは父親の仕事だ。何があっても護り抜く。俺の娘に手出しはさせない！）」

俺は決意を固め、意識を落とす。目が覚めれば、戦いが始まる。最後に続く戦いが…

n e x t s t r i k e

strike 30 (後書き)

紗耶が久しぶりに登場です！今まであまりにも出番がなかったですから（笑）

大喰らいの牙様、感想ありがとうございます！これを励みに頑張っていきたいと思います！

次回はいよいよ公開意見陳述会です

strike 31 (前書き)

どうもくりふぁです。

7月も後半に入って、本格的な入試の時期になってきました。私もAOがあるので今から面接練習で必死です

でわ本編です。公開意見陳述会は次話です

公開意見陳述会当日の朝、俺は起きてすぐ紗耶に会いに行った。紗耶の部屋はそう遠くない位置にある為すぐ着いた。俺がドアをノックしようとしたら丁度紗耶が出てきた

「紗耶、昨日の事だが」

「うん、気にしないでお兄ちゃん」

「ああ、お前がそれでいいならいいが」

俺の中ではやはりまだ不安だった。紗耶を危険な目にあわせたくないように生きてきた俺にとってその紗耶本人を危険に晒すことは耐え難かった。だが紗耶だってもう子供じゃない。俺の手を離れる時が来た、つまりはそういうことだ

「それで私はどうすればいいの？」

「お前は地上本部に行ってもらう。護衛対象はギンガだ。この世界が原作から離れた以上、やれることはやるさ」

俺は紗耶に要件を伝えて部屋に戻る。部屋のドアを開けるとベッドではまだヴィヴィオが寝ていた

女神よ、聞こえるか？

聞こえていますよ？どうしました？

女神が具現して、姿を現す

いささか緊張していてね。少し愚痴りたい気分なんだ

愚痴ですか、別にいいですよ。私も暇だったので

これでいい、俺は前々から気になっていたことを聞くこと。それが今回女神と話す理由だ

ああ、俺の母さんのことなんだ

っ！お母さんのこと、ですか？

声が明らかに動揺している

ああ、俺が小さい時に紗耶を産んだ後に死んだって父さんに聞いたんだ。俺も小さかったからほとんど姿は覚えてないんだけどな。覚えてることがいくつかあるんだ

嘘だ。本当はほとんど覚えている。母さんの顔も、声も、姿も全部覚えていることがあるのですか、それはお母様も喜んでいてしょうね

その覚えていることが、紗耶のような綺麗な金色の髪、それに優しく、暖かな声。そう、まるでお前みたいな姿だった

わ、私…ですか？

ああ、お前、時たま俺が寝る前に何度か俺の事を呼んでるよな。

時谷って

なぜ私が呼んでいると思うのです？それはエクセアがいった事でしよう？

かかった。これで一つ確信した

俺がいつエクセアなんて言った？俺はただ呼んでるよなと言っただけだぞ？お前はエクセアで間違いないな？

っ、ええ、私がエクセアを通してあなたをサポートしていました
認めたか、だがそのことはぶっちゃけどうでもいい。本題はここからだ

まだ、聞きたいことがある。お前 エクセアがなぜ俺を時谷と呼んでいたかだ

そ、それは…

さっきほとんど覚えてないって言ったな。あれは嘘だ。その逆、ほとんど覚えてんだよ。母さんの事

…

エクセアは何も答えない。俺はそのまま言葉を続ける

体が弱くて、それでも俺を可愛がってくれた母さんを忘れるわけがない。だが、お前と会って最初は疑った。ありえない。母さんは死んだ筈なんだってな。似すぎなんだよ。エクセアと俺の母親であ

る 暁 明希が

なんで…

えっ？

なんで、覚えてるの？ 時谷…

やっぱり、母さんだったんだね

俺の中で疑問だったこと、女神がエクセアであることと、そのエクセアが俺の母親ではないかということ。最初は勿論疑った。ありえないと、そんなわけあるはずがないと。どんな超展開だよとさえ思った。俺が母さんの姿を覚えていたのはちゃんと覚えていたのもあるが、父さんが大事に保管していた写真などで見たからだ。それが今の言葉で確信へと変わった。エクセアは母さんだ

そう、あなたと紗耶の母親であり、父親の暁 幸也の妻。暁 明希であり、天界十二柱の一人、アキナ・フォン・エクセアです

アキナ・フォン・エクセア、それが母さんの本当の名前なの？

ええ、まずは私が地上界に降りた理由から話しましょうか

母さんが言うには

天界で生まれた神または女神は一度地上界に降りて研修みたいなものをやるらしい、父さんと会ったのは学生研修の時に会ったらしい（ここから父さんとの惚気が始まった為割愛）。

ただ天界の規定で、地上界の者と結ばれることは許されていなかった

たらしい。父さんには自分が人間でないこと、いつか天界に帰らなければいけないことを話したらしい

そこで父さんが「それがどうした。お前はお前だ。俺は明希という存在自体を好きになったんだ。天界？そんなもん俺がぶっ飛ばしてやるよ。だから、俺の傍にいろ、明希」とカッコよすぎる台詞に心打たれてそのまま逃げるように結婚（明希は地上界用の偽名）

その後、いろいろあって（ここでも惚気が発動したため割愛）俺が生まれたらしい。幸せに見えた生活も長くは続かなかった。天界からの妨害である

地上界に降りた者が天界に戻る為には死ぬしかないらしい。何人か人間に擬態した奴が来たらしいが、父さんがフルボッコにして追い返したらしい（ここでも惚気g(yr)。その後天界からの直接的な妨害はなくなったそうだ。その代り、母さんの体を病が蝕んでいく。こればかりは父さんでもどうしようもなく、病院に行ったところ、余命3年を宣告された。その時にはすでに母さんのお腹の中には紗耶がいたそうだ

紗耶が産まれてすぐに母さんの人間としての寿命が近づいてきた。母さんは父さんに俺と紗耶の事を頼み、死んだらしい

これが私が地上界に降りた理由と、過ごした日々よ

そうか、まあ途中で惚気があったけどそれはいいとして、これもある意味本題なんだけど

何？

母さんはこの世界に俺を転生させるときに「こちらの手違いで」
って言ってたよね？母さんが俺を殺したのか？

そんなわけない！この世界のどこに息子を殺すような母親がいる
の！そんなの天変地異が起こってもあり得ない！あれは私が地上で
結婚したことに遺憾をもった連中が私のいない隙に時谷の名前を生
者リストから消したのよ！

母さん、母さんの思いはわかったけど、その生者リストって何さ

生者リストっていうのは、今、地球で生きている人々のリストの
事で別にそれを使って死ぬ人間を選んだりとかしてるんじゃないかと
どんな人がいるのかとか、そういう調べたりする時につかうリスト
の事よ。確かにリストから名前を消せばその人を殺すことが出来る。
私が最高神に呼び出された時を狙って、その機能を使って時谷を殺
したのよ

その、反対派みたいな連中は大丈夫なのか？母さん狙われたりし
てないよな？

大丈夫よ、私の息子に手を出すような輩は全員捕まえたから

そっか、それならいいけど

それにしても、天界に帰ってからあなたの生活を見ていたけど

え、見てたの？

まずい、怒られる！

ええ、全部見てたわよ？危険なことに自分から関わって大怪我したり、紗耶を庇ってこれまた大怪我したり、幸也君を困らせたり、まるで昔の幸也君を見てるみたいだったわ

え？昔の父さん？

いろんなことに首突っ込んだり、私庇って怪我したりなんてホントにそっくり

そっか、あれ？紗耶をこっちに送るときに父さんに会ったんだよね？

俺は気になったことを母さんに聞く

会ったわ。幸也君は直ぐに私だって分かってくれて、時谷の事も私は何度も謝ったんだけど許してくれたわ。「お前のせいじゃないなら気にする必要はない。時谷もきつと許してくれる。信じろ、俺とお前の子を」って言うてくれたの。ねえ時谷？お母さんを許してくれる？

許すも何も、母さんは悪くないだろ？その反対派みたいな連中が悪いんだから、母さんが謝る必要はないよ

ありがとう、時谷

紗耶には話すの？なんなら俺から話しておこうか？

うつん、私から話すわ。だから紗耶には内緒にしててね？

母さんが手を伸ばして俺の頭に置いて俺の頭を撫でる

な、子どもじゃないんだからやめてくれって！

ふふ、どんなに大きくなっても私にとっ たらいつまでたっても子どもよ

そのあとヴィヴィオが起きるまで頭を撫でられた。この年になつてとも思ったが、だが、懐かしい温もりがとても暖かった

n e x t s t r i k e

s t r i k e 3 1 (後書き)

今回は時谷君とエクセアの過去と関係が明らかになりました！
どんな超展開だよ！って思うかとも思いますが、他にタイミングが
なかったのでw

次の投稿は部活の合宿や、引退試合、受験など、いろいろ忙しくな
るので遅くなってしまうかと思っています

strike 32 (前書き)

どうもくりふぁです

部活も引退し、本格的に進路に取り組んでいかなければいけなくなりました

バイトも探さないと

今回は公開意見陳述会前編です。公開意見陳述会の間は地の文は三人称視点です

ミッドチルダ地上本部、そこは次元世界を管理する管理局の地上における象徴。今日、そこで一大イベントとも言える公開意見陳述会が開かれていた。

厳重な警備体制で警備されており、一般人は立ち入ることすらできない。

だが、今、その地上本部は赤く染まっていた。正確には炎が上がり、所々で小規模な爆発が起きている

地上本部襲撃、予想されていた事態が現実となってしまうたのである。手口としてはこうだ。

まずガジェットに搭載されているAMFで地上本部のバリアを弱体化し、その後戦闘機人による防衛システムのクラッキング、管理室の爆破、バリアエネルギー施設の破壊、魔力砲撃による狙撃。そして地上本部内部への遠隔召喚しよる制圧

地上本部の局員は抵抗するも、ガジェットの物量と、戦闘機人のポテンシャルの高さに次々と倒れていった。その中で抵抗し続けているチームがあった。管理局機動六課のFWメンバーの4人だった

「あらかたのガジェットは片付いたわね」

「うん！はやくなのはさんたちにデバイスを届けないと」

そう言ったのはオレンジ色の髪フロントアタッカーのFWのリーダー格のティアナと青い髪フロントアタッカーのFAのスバルだった

「お前らは中に突入して隊長達にデバイスを渡してこい！空は私と

ラインで抑える！」

「はいです！」

指示を飛ばしたのは機動六課の副隊長のひとり、ヴィータだった

「分かりました、行ってきます！」

ティアナとスバルは残りのFWメンバーのエリオとキャロを連れて本部に突入する

ヴィータ副隊長！地上本部に向かって航空戦力1、ランクは推定S+！

「分かった、そっちは私とラインで対処する。ライン！ユニゾン、いけるな？」

「いけます！」

「「ユニゾン、イン」」

ヴィータとラインが赤い光に包まれる。それをやぶって出てきたヴィータはいつものバリアジャケットだが、色が違っていた
いつものヴィータのバリアジャケットは赤を基調としたものなのだが、今のヴィータのバリアジャケットは白を基調としたものに変わっていた

飛び出したヴィータは接近してくる航空戦力へと向かっていった

ウィータが飛び立って少したった頃、FW達は戦闘機人たちとの戦闘に入っていた

「はぁ！」

スバルがティアナが掛けた幻術魔法で出来た隙について戦闘機人の1人であるノーヴェに殴り掛かり吹き飛ばす

「ノーヴェ！」

「やぁ！」

そこにエリオは仲間がやられて隙が出来た戦闘機人の1人ウエンディに槍を振りかぶる

「くっ！」

それに気づいたウエンディは自身の武器であるライディングボードの砲身部分をエリオに向けるが、その選択は間違いだった

「サンダー、レイジ！」

エリオが放ったのはサンダーレイジ、電撃による間接攻撃だった。周りのガジェットもAMFを張るが、地面からくる電撃には対処できない。ウエンディもライディングボードからくる関節感電でダメージを受けてしまう。ウエンディがライディングボードを防御に使

つていたなら、その防御力でサンダーレイジを防げたのだが、迎撃を選択したウエンディのミスだった

「撤退！」

ガジェットの爆発で出来た煙に乗じてティアナが撤退を指示する。
4方向に散らばるティアナ達の幻影。ノーヴェは吹き飛ばされたさ
いのダメージで、ウエンディは感電による痺れで、ティアナたちを
逃がしてしまう

ティアナたちが隊長たちとの事前打ち合わせで指示されていた緊急
集合場所であるエントランスホールに着くと、そこにはなのはとフ
エイトが居た

「お待たせしました！」

「お届けです」

FWたちが手の平に握っていたデバイスを渡す

「うん」

「ありがとう、みんな」

なのはとフエイトは自分のデバイスを受け取り、残ったレヴァンテ
インとシュベルトクロイツは居合わせたシスターシャツハに手渡さ
れ、届けられることとなった

「ギン姉？ギン姉！」

スバルが叫ぶ

「ギン姉と通信が繋がらないんです！」

「戦闘機人2名と交戦しました。表にはもっという筈ですから」

「ギン姉、まさかあいつらと…」

スバルの顔に不安がよぎる

「ロングアーチ、こちらライトニング1」

フェイトが急いでロングアーチに通信を繋ぐ

ライトニング1・・・こちらロングアー・・・チ

「グリフィス？どうしたの？通信が」

こちら・・・は今、ガジェットと・・・アンノウン・・・の襲撃を受けて・・・いて。今は・・・時谷二尉・・・が持ち・・・応えています

「時谷が？持ち応えられそう？」

はい・・・時谷二尉が・・・設置したシールド・・・があるの・・・で

「了解。通信終わり」

「フェイトちゃん、六課は？」

フェイトが通信を終了したのを見計らい、なのはが話しかける。その顔には不安が浮かんでいた

「大丈夫、時谷が頑張ってるみたいだから大丈夫だって、でも一応援護に行きたいから」

「うん、スターズはギンガの安否の確認と襲撃戦力の排除」

「ライトニングは六課に戻る」

「……はい!」

各々が目的のために走る

「（時谷君……）」

なのははその胸に一人の青年の顔を思い浮かべて

スバル達が戦闘機人と交戦中のころ、機動六課は緊急体制に移行していた。多数のガジェット?型と?型、戦闘機人二名の襲撃だった。代理指揮官であるグリフィスはすぐさま朝に時谷から言われていたシールド装置を発動。攻撃の第一派を凌ぐ

「第一派、突破、続いて第二派きます!」

「そうなんども受けられないか、時谷二尉！」

「聞こえてるよ」

六課の正面、そこに時谷はいた。迫りくるはミサイルの雨

「だが、それがどうした！投影待機！」

時谷の後ろに剣軍が広がる、その数はいつもの比ではない。もはや数える事すら億劫になるほどの剣軍

「待機解除！」

時谷の命令で千を超える剣軍が一斉に撃ち出される。すぐさま次弾が装填され、撃ち出される。また装填され撃ち出す

撃ち出された剣軍はミサイルを全弾貫き破壊し、奥に待機していたガジェットへと降り注ぎ、突き刺さる。それを目を魔力で強化した時谷が確認すると、一言呟く

フロックン・ファンタズム
「壊れた幻想」

時谷がそう呟いた瞬間、すべての剣に込められた魔力が爆発。一瞬にしてガジェットの9割が撃破、また1割がその余波で誘爆した。要は全滅だった

「こんなもんか」

時谷はつまらなそうに言った

「何が起こったんだ？」

六課襲撃を命じられた戦闘機人の1人であるオットーは今自分の目の前で起こったことが認識できないでいた。当然だろう

ミサイルを迎撃された。これはまだいい、問題はその後だ。ガジェットに剣が突き刺さったのだ。それも1本なんて生易しいものじゃない。1体につき10本以上突き刺さっているのだ、1本も外れることなくだ。自分たちには飛んでこなかった。いや、狙わなかったと言ったほうが正しいだろう。事実、時谷は剣軍でガジェット（・・・）のみを狙っていたのだ

「オットー！」

「っ！」

もう1人の戦闘機人、デイドの声で現実に戻る

「ガジェットがやれたが、どうする」

「関係ない。このまま僕たちで殲滅する」

デイドが頷いて返し、六課に向けて飛ぶ。オットーも遅れないように飛ぶ。その先に待つのはテロリストから『蒼黯の魔騎士』と恐れられる化け物。オットーはそう認識した

「来たか」

時谷は六課しじくに向かってくる人影を確認した

「【エンフーター】セットアップ」

『OK』

待機状態だった【エンフーター】をソードモードで持った時谷。すると黄緑色の砲撃が飛んでくる

「甘い！」

その砲撃を時谷は防ぐのではなく切り払う。砲撃を撃った本人を睨み付ける。大剣を、刀身を後ろに回し、軽く下げるようにして構える

「甘いのはそちらでは？」

時谷の後ろに回り込んだデイドが双剣を振りかぶるが、時谷はすぐさま腕の力だけで刀身を上げ双剣の刀身を受け止め、力を受け流しながら刀身を弾き、がら空きになったデイドの胸に剣を叩き込んで吹き飛ばし、刀身を蛇腹形態に移行させ吹き飛んだデイドを絡め取り、刀身を引き、デイドを引き裂く。もちろん非殺傷設定なので実際に引き裂いているわけではない

だが、相当のダメージを与えたところで、時谷は大剣に戻し、オットーを見据える

「IS発動【レストーム】」

オットーがレイストームを放つ。時谷は先程のように切り払おうとするが、切り払った筈の砲撃が刀身に纏わりついている

「ちっ、拘束用のやつか」

「これで終わり」

オットーが時谷の大剣を拘束している右手とわ逆の左手に砲撃をチャージする。直撃すればいくら時谷とて、ただではすまないだろう

「俺がやられる？こんなところで？……………なんてな！」

時谷はオットーの予想外の行動をとる。いや誰も予想などできないだろう。時谷は「エンフーター」を手放したのだ。これにより引っぱりあっていた力の片方が消えた為、オットーの体勢が崩れる

イグニッション アルトアイゼン
「ギア起動！古い鉄！」

時谷が光に包まれ弾けると、赤と白の装甲、大きく出っ張った肩、大きな角、左手の3連ティーンガン。極め付けは右手の大きな杭

「ただでは済まんぞ！」

背部のブースターを点火し、体勢が崩れているオットーに突撃しその右手に装備されたりボルピング・ステーキをオットーの腹部に突き付ける

「おおおお！」

ステーキの撃鉄が起動し、杭が撃ち出される。そして再び撃鉄が起

こると同時に薬室が回転し、次弾が装填され、撃鉄があり、杭が撃ち出される。全弾6発がオットーの腹部に撃ち込まれた

「ぐぼっ！」

時谷は最後の杭が撃ち込まれると同時に腕を突出し、デイドの方へオットーを吹き飛ばす

「終わりか」

【鋼鉄の歯車】を解除し、オットーとデイドにバインドをかける

「六課に損傷なし、任務完了だな」

時谷は安心して、隊舎に戻ろうとした。愛する娘の元へ。だが

ドシュドシュッ、ドシュドシュッ！

「な、なんだ…と？」

時谷の両手足には金色の魔力で出来た短剣が突き刺さっていた

「ぐぼっ！」

痛みに耐えきれず、時谷は膝をつく。だがその目は、自分を串刺しにした相手を見ていた

「どう…いつつもり、だ…バラン・ヴァルフエス！」

そこに居たのは気絶しているであろうヴィヴィオを抱えた機動六課

の料理長、 balan・ヴァルフェスだった

next strike・・・

s t r i k e 3 2 (後書き)

いたい私はなにがしたかったんでしょう？どうしてこうなったw
このまま終わらせるつもりだったのにちよいキャラのバランス料理長
再登場です。拳句の果てに敵ですw

今後の展開は作者にも予想できませんが、また次回！

strike 33 (前書き)

遅れましてすいませんくりふあです。

PCが母に占拠されていたため更新が遅れてしまいました
スマホを購入したのでこれからはスマホから更新していきたい
と思う次第です。

今回も三人称視点でおおくりします。

balan・ヴァルフエスは転生者である。時谷とは違う世界からの転生者だった。

balanの元いた世界『リーアマリシン』にもミッドチルダのように魔法があった。魔法と言っても呪文を唱えたり、特別な道具などで魔法を行使する、一般的にファンタジーと呼ばれるものの典型的なものだった。

そんな世界にbalanは生きていた。自らの魔力で生成した短剣を投げたり、斬りつけて戦う投剣魔法師だった。順調に出世して近衛魔法師団に配属され、幼馴染みの女性と結婚し、子供も産まれ、幸せな家庭を築いていくはずだった

「戦争、ですか？」

ある日、balanは王城に召集された。いやbalanだけではなく、他の魔法師も召集されていた

「うむ、隣国のデマール帝国が我が国に宣戦布告してきた。既に帝国軍の部隊が我が国の領土に侵攻してきている」

「帝国側の東国境の砦はどうなったのですか？」

「先刻、敵の新魔導兵器の襲撃され陥落した・・・」

「そんな！？あそこは猛将と言われるベルバス將軍の砦だぞ！」

「将軍が戦死したと!？」

俄に周りが騒がしくなる中、バルンが口を開く

「静まりなさい!王の御前です!」

その一言に一瞬で周りの魔法師たちは口をつむぐ

「王よ、今後の方針はいかがなさるおつもりで？」

「うむ、我々は侵攻してきた帝国軍の迎撃に向かう。そこでバルンよ、貴公に斥候を頼みたい。出来るだけ小人数で向かってくれ」

「承知致しました。出来るだけ小人数でとのことでしたら私1人に向かいます。その間に兵の準備をしてください」

「1人でだど!?!ならん!貴公を死なせる訳にはいかん!」

「ご安心を、私を信じて下さい」

「・・・分かった。貴公に任せよう。その代わり、必ず戻ってこい。分かったな?」

「御意」

その王の言葉を聞き、その場を後にする。城を出たバルンは自宅へと走る

「フエイ、今帰りました」

「おかえりなさい。 balan 」

自宅の玄関を開けるとそこには最愛の妻であるフェイとフェイに抱き抱えられたまだ1歳の娘アリス

「会議、どうだったの？」

「ええ、隣国が攻めてきているようです」

「帝国が！？」

「はい、私は斥候としての任務に就くことになりました」

balanの言葉にフェイの顔が険しくなる

「まさかとは思わないけど、1人で行くなんて言わないよね？」

「そんな訳ないじゃないですか。心配しないで下さい」

balanは嘘をついた。本当は単独なのに余計な心配はかけたくない
と思い、最愛の妻に今までついたことのなかった嘘をついた

「心配しないわけじゃないでしょ？私の旦那様でこの子の父親なんだから」

「そうでしたね。この場合は心配してくれてありがとう。と言っべきでしたね」

「うんうん、それで？いつ出発するの？」

「今日の夜にはもう出発します」

「そんなに早く!？」

「ですからアリスにはパパはお仕事に行つたと伝えて下さいね」

そして夜、 balan は家を出た。そして一度だけ家を振り返り一言

「行つてきます」

そう呟いて、夜の闇に消えていった

strike 33 (後書き)

今回はちよつと短めな本編でした。

くりふぁ「 balan は実は転生者だったんだ！」

、 くな、なんだって！

はい、なにやってんでしょね私はw

でわまた次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9093l/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～護る為の力～

2011年9月26日02時51分発行